

つてシツの音となり、更に轉じてイツの音を取つて居る。

此の音韻轉化は猶、湯腸傷陽の四段の文字に就いて、一タウ、二チャウ、三シャウ、四ヤウとなつて居るのと全く同一である。これ等の音韻轉化の順序が、何故かくの如き順序を取るに至つたかと云ふことは、聲音學上のこまかい説明を要するから、茲には之を省略して置いて、單にその結果だけを示して置いたのである。兎にかくタ行音に屬して居る文字も、茲に擧げた例に見られる通り、かやうに規則正しく劃一に變化して居る。それ故之れによりて次のやうな一つの法則が原則として建てられる。即ち、

タ行音の系統に這入る漢字は、サ行音を経て、次ぎにヤ行音に至つて留まる。

但しカ行音の場合に於いても現れた通りこのタ行音に於いても亦或るものはサ行音に迄は進んで行つても、ヤ行音には行かないものがあり、又ヤ行音には已に進んで居ても、中間のサ行音にある文字の、格別見當らないものなども往々出て来る。(六〇一頁以下参照)。

今之を一目瞭然に示す爲め、次のやうな部類別けにしてその主なるものを擧げる。(六三六頁参照)

行タ	←	湯腸脱	兌抽澤	鐸倫的	他別途	透忒
行サ	←	場觴	說紬釋	釋輸芍	施場除	莠軾
行ヤ	←	陽楊閱	柘油譯	驛瘞約	也易餘	誘弋

タ行よりサ行に轉じて、ヤ行には進まないものは次の如きものである。

行タ	←	咄獨都	柘題待	綴彫直	堆督統	單讀
行サ	←	出蜀諸	拆石匙	痔至週	殖雖叔	銃銃戰
行ヤ	←	炎躍涌				

又タ行よりサ行を経てヤ行に至つたもの(中間不明)は次の如きものである。

行タ	←	談濼踊
行サ	←	
行ヤ	←	炎躍涌

以上音韻上の分類は、極めて大あらしの觀方であつて、更にこまかく別つときは本編第五章に述べてある如くに種々の場合が起るのであるが、茲には實用を主としたから、餘り細別することは避けて置いたのである。

漢字相互の間に存する此れ等の音韻關係がわかるときは次の如き場合の解釋は直ぐ出来るわけである。(六三六頁参照) 即ち、

丁の字の音字……………成城誠  
 登の字の音字……………證  
 冬の字の音字……………終

詹の字の音字……………瞻檐瞻  
 多の字の音字……………侈移  
 重の字の音字……………董動働種衝鐘  
 某の字の音字……………牒蝶蝶葉  
 台の字の音字……………殆苔治咎始治  
 占の字の音字……………店點點站砧髻

要するに秩序なく観えて居る漢字に對して、吾人は先づその音符となつて居る文字の音が如何に移り行くかを見定めて、各其の段階を二段又は三段位に別ち、以つて字音の現象が、一定の系統のうちに、簡単に收められ得るものであると云ふことを見るのが肝緊である。

研究法の大要は此れでわかるであらうから、他の系統に屬する文字のことは茲に省いておく。尙詳細なる場合に就いては本編第六章音韻轉換の法則十一則及び本編第五章支那古韻 K, T, P の沿革と由來の兩章を抄獵せられたし。若し又その日本に於ける字音假名遣の方法について漢字を觀んとするものは後章第十六章の類推法のところを熟讀せらるべし。漢字教授の任にあたるものが自ら此の種の點に就いて日頃注目せらる可きは至極喜ばしきことなるも之を頑是なき兒童に強ゆることは考ふ可き點なりと思ふ。要は教授上の參考にもと思つて専門研究の傍ら茲に平易に講述したまでである。(漢字統一會席上にて明治四〇、八、)

## 第十五章 字音の長短

字音の研究には種々の方面から這入ることが出来る。音の質 (Lautmaterial) の方からすること、音の變化 (Lautwandelung) の方面からすること、音の結合 (Combinationslehre) よりすることなどがある。併しこゝには音の分量 (quantität) の方面から少しばかり最も普通に知られて居る字音に就いて述べて見よう。

音の分量とは語を換へて云へば音の長短のことである。同母音に就いて見ても日本で云ふ普通の長母音は短母音に對して如何なる割合に行つて居るか、少なくともその割合に對する感じは、彼の梵語以來印度歐羅巴語で云ふやうな一に對する二の長さの感じであるかどうか。未だ其の研究は出來て居ない。自分の今字音に就いて云はんとするところは之に關係するものではない。けれども單に其の長音のみについて其の長音の由つて起つたところを考へて見ると、普通の長音の符牒「ー」にあたるものゝうちには二種類の起源が存して居る。即ち、

一、本來二重母音 (io, au 等) 又は三重母音 (iao, ieu 等) のものより來れるもの、

二、本来母音のあとに *ng* の鼻音を有せしものより來たれるもの、となる。例へば今日カウとせられて居るものに就いて云ふも、

カウ } 一、交、校、絞、郊、高、稿、鎬、膏、考……………kao  
      } 二、江、虹、肛、杠、岡、崗、綱、鋼、康、慷、糠……………kang

此の兩起源は素とローマ字の示す通りで本音は大なる區別がある。けれども日本では別段書きわけられて居ない。朝鮮や支那の方では *kao* と *kang* とは明かに別であり、日本にも尤も奈良朝、平安朝の初め迄はその區別は多少存し居たものと見え例の香山の香、相良の相は後者 *kang* の韻と同類のものである。併し後世では全然一様に *ng* の韻もカウのウと同じくウとせられて居る。

『書かん』*kakang* の形が『書かう』*kakau* → *kako* となつた國語音の變遷に徴して見ても此の兩區別の消滅は奇とするに足りない。日本人の必然の傾向である。

字音に此の影響の及んだと云ふことは字義識別の上に少なからぬ打撃である。江の字の音カン *kang* に含まれてあるアAは其の分量から云へば交 *kao* のアAとは大いに異なり後者のアAのうちには委細に實驗すればアA音以外に尙アAからオOにうつる中間母音も無數に伴つて居るべき筈である。(六三三頁参照) かやうなわけより同一のAに事實上長短の區別が存し、其の他の母音に就いて見ても場合によりて其の分量に差のあつたものと推測せられる。

尤も日本の字音のうちには所謂吳音漢音の讀みわけがあり。字に依つては上述の *ng* を全然没却して發音しない場合もある。

供奉 *kung-fung* → *gu-bu*

と讀ませて居る如きは其の一例である。その他、

工夫 } *kung-fu* → *kun-fu* (*kōfu*) ……………1  
      } *kung-fu* → *ku-fū* ……………2

と讀ませる2の場合の工の音 *ku* の如き又その類例である。かくの如くすれば『工夫』の如きは三様の義を生ずることになる。即ち之を現在の言葉に見るに、

工夫 } 1 *kung-fu* ……………ひま (北平官話)  
      } 2 *kōfu* ……………鑛夫  
      } 3 *ku-fū* ……………考案

かやうに語尾音の *ng* を省きてその前の母音を短かくすることがある。然るに之と反對に又單なる單母音をば音調の上で強いて長めて發音する習慣がある。例は

區の音   ク   (*ku*)       樞   スウ   (*su*)  
主の音   シュ   (*shu*)   註   チュ   (*chu*)

朱の音 シュ (shu) 誅 チウ (chü)

に於て即ち、樞密院、註釋、筆誅などの如く、樞、注、誅は長母音にて發音せられる。これは古代に詩歌を日本でシーカと讀ませ紀の國をキーと發音せしと同様のものであつて、その字の音符から云へば元來は長音でない筈のものであるが、かゝる場合になると長音で讀まれる慣習がある。女房の女の音ニョーの如きもその例である。

尙母音の長短を見る場合の一材料としては、單獨の場合の長音が熟語を形成する時にその次ぎに來る音質如何によりて、音の分量の異なることがある。例へば、恐 (kung-kiang-kiou-kiō) の音は無論長母音キョウなるにも係らず、

恐喝 キョカツ (kiokak)

の時の恐キョの如く短縮せられたることがある。然し元來は恐縮、恐露病などの恐の如く非常にその母音の長さは長くなつて來る。とても印歐語の一に對する二の比例どころではなく、更に大なる長さの割合であるやうに感ぜられる。

以上は單に歴史的假名遣のウの長音について云つただけである。更に之を入聲フから來た長母音(狭協の如き音)などについてその沿革を觀れば母音の長短の觀察は頗る面白い結果を見るであらうと思ふ。尙單に母音ウばかりでなく他の母音その他、摩擦音 (sh, j, z, r, w, y, h) などの音についても其

の種々の音現象について此の長短の觀察が出来るのである。英音に於いても hill と heal 又は mill と meal とは其の發音上音の長短がその意味に大なる影響を有する如く、漢字音の場合に就いても同様のことが云ひ得られるのである。此の方面の研究は後日機を得て更に詳細に述べて見たいと思ふ。要するに字音の長短の研究はこれは極めて微妙な問題であつて、普通文字上で觀察することの出来るやうな研究とは違ふ。實に音の分量の上の問題は最早や文字上の問題でなくして言語上の問題となるのである。生きたる生命を有する言葉の上の音聲上の側から觀て之を解かなければならぬのである。從來東洋の音韻研究はすべて基礎を言語の上に置く可きことを忘れて、いつも文字の上に置いて居た。而かもその文字は漢字である。如何ぞその言語の音を能くうつつし得ることが出来ようか。音韻の研究は常に元來言語上にあるべきもの、わけて此の長短關係などは殊に然りである。

## 第十六章 字音假名遣の類推法

漢字音の古い假名遣を正確に附けると云ふことは専門家にとつても容易なことでない。殊にその拗音の場合、長母音の場合には中々むづかしい。新教育の立ち場から捧引假名の主張のあつたのも無理からぬことである。

卑近なる實用の側から云へば、明治今日の發音の上で全然同一に讀まれて居る漢字音に何故に二様の假名遣が存しなければならぬか。『當』も『等』も共にトーと發音して居りながら『當』はタウで『等』はトウと書き別けなければならぬ。その理如何、との疑問は誰にも起るであらう。それには明治の日本音で共にトーの音なるも大陸の方では『當』はタン (tang) 『等』のトン (tong) 古音であつたからであると云へば一應合點せられる。又同じョーの音にしても『綱』がカウで『公』はコウ。これも支那古音で『綱』がカン (kang) 『公』がコン (kung) なりし故に此の書きわけがあるのであると云へば濟むのである。

かやうに観てくると字音假名遣を正しく覺ゆるには悉く支那の原音（必ずしも北平音にあらず）を極めなくては出来ないこと考へられるかも知れぬ。固よりそれに越したことはない。けれども日本の字音假名遣は絶対に支那の古音に據れるものゝみであるかどうか第一疑問である。朝鮮百濟古音の影響もあるであらう。又對馬訛音も交つて居るであらう。若しこれ等の中間訛音が加はつて居ないとしても日本の假名遣のうちにはわけもなく機械的に或る音を或る一類の假名遣の型の中に入れてしまつたと云ふ形迹も見えないことはない。即ち先づ大體の範疇をいくつもきめて置いてそれにあとから入れ込んで行たかと思はれるところもある。故に日本の古い假名遣は必ずしも支那古音にピッタリ符合したものとは考へられない唯大體に於いてその俤が辿られると云ふまでに過ぎぬ。

字音の變化の多いとは古代も今も變りはあるまい。その變化に富むだけそれだけ日本の方では假名遣が面倒になつて來たのである。然し今日では我が邦の字音假名遣なるものゝ意義は大陸の字音の實際に合ふが合ふまいが、殆ど無關係で唯日本在來の假名遣に符合さへすれば宜敷いやうに考へられて居る。これではいかゞと私かに思つて居るが支那大陸の古音との比較研究までに及んで古い假名遣を根本的に研究したものは未だこれ迄日本には見あたらないのである。

支那の所謂古音は今日までに非常な變遷をして居るが、その變遷は支那語獨特の變化で、日本の島國內部に於けるそれとは著しい相違がある。始めは支那音に近い音で我が邦に這入つても暫くするうちに日本流の音韻に變化させて用ひ慣らすに至るのである。而かも支那大陸から打寄せる字音の波は一度や二度でなく、支那本場で既に變遷した音がその度毎に我が國に傳へられるのである。若し字音が火山の熔岩のやうなものであつたとすると、日本の字音は模様違つた地層がいくつもかさなり重なつて見える筈である。字音の科學的研究には此の地層を顯微鏡で觀るやうに一々精細な調査を必要とするものである。此の調査によると日本の字音の各年代、出處（支那の何れの地方）その性質などが極めて複雑に觀察せられる。今日字音假名遣が非常に複雑に感ぜられて居るのは全くこの爲めである。然らば字音假名遣は唯むやみに面倒なばかりで、機械的に一々覺えるより他に道はないかと云ふと、決してさうではない。極めて少數の例外はあるとしても、大部は自ら一定のきまりに支配せられて居

る。一を知れば他は類推でその一系統の文字を同じ性質の音で表はすことが出来る。自分は日頃の音韻の研究に之を適用して頗る便利を感じて居る。假りに之を字音假名遣の類推法と名づけて、その一斑を左に擧げて見よう。

字音假名遣の最も多くまがひ易きは長母音の場合と、拗音の場合とである。その各の例を取つて見るならば、

## (一) 長母音の場合

例へばホーの音を有する漢字について、その音の假名遣にはホウ又はハウ或はハフ(法律の法)の三種類がある。此の區別は音韻學上決して混同せらる可きものでなく、素は非常な差別が存して居たのである。ハウである可きものは飽くまでもハウでなくてはならぬ。然るを例へば『謗』の字はポーと發音する所より之にポウとするものがある。誤りである。音の出處たる『方』の振り假名次第で、ホウともハウとも極められるのであるが、『方』は明かにハウの方である。今の支那音でも *fang* である。『方』がハウである故に、その系統文字、即ち、

方……坊妨防防訪放做紡紡紡  
旁傍磅磅滂磅芳房髡

はすべてハウ。濁つてもバウの音で類推せられる。ハウにせよ、バウにせよ *hau, bau* の *au* を韻

に有する音である。若し之をホウとかポウとかの音に誤る時は *ou* の韻となるわけで『方』の抑もの音とは大いに違つて來る。

之に反して同じホーの音を有する『朋』の字について云へばこの『朋』はバウではなく、ホウである。故にその系統の文字、

朋……崩繡棚棚鵬

等は總べてホウである。ホウで類推され得る文字である。

なほ包胞抱砲胞砲苞苞などのハウであり、邦蚌豐峰蜂鋒逢逢などのホウと假名振られるわけも右の例から直ちに歸納的に推知することが出来るのである。

字音研究の上よりすれば泡、胞、抱等を一々別々にハウと機械的に覺えるよりも包の音符を含むものをまづハウ (*hau*) と假定しておいて、その例外のものを捜す方に力む可きである。電の音ハクを發見するなどその一例である。例外には總べて一一深き理由があるが茲には省く。例外があつてもその數は全系統の上より見れば極めて僅少である。僅少の例外を以つて多數を貫く類推法を打破ることは實用上策の得たものでない。であるから出來得る限りは此の類推法で進んでよろしい。

トーの音。唐は音タウ (*tau*) である。それ故糖、糖もタウとせられる文字である。尙湯蕩盪などの總べてタウなるわけも湯の字の旁から出て居るのである。その旁がタウ (*tau*) であると云ふことは非

常に他に關係が深くなつて来る。何となれば、その系統を引いた文字は後世頗る多く發達して居るから。例へば、

湯蕩盪の外に、腸暢場傷觴瘍陽場楊揚颺

などの諧聲文字が悉くタウ (tau) の au の系統を引き、假令その語頭音はシャウ (shau) の s 又はヤウ (yau) の Y などのやうにタウ (tau) の T とは別の音であつても、あとの au の部分には何等の變りはない。五十音表で云へばア列の假名を以つて必ず振り假名が始まる、決してショウとかヨウとかのオ列の假名ではない。此の例は拗音の例としても見られるのであるが湯の長音を觀る序いでに茲に述べたのである。尙導がダウなる所以も道の音ダウなるによる。

ト一の音には尙又同のドウがある。洞胴洞銅がドウ (nod) にして、桐筒がトウなる、總べて理屈は同一である。タフ (榻) の音のことは省す。

ソ一の音。これにはサウ、ソウ、サフの三種の假名遣がある。例へば『倉』などはサウである。故にその系統の文字即ち、

倉……………創滄槍槍齋蒼——サウ

なることを類推することが出来る。之に反して『曾』『宗』の字などはソウである。故に、

曾……………僧憎增贈贈贈贈贈贈贈——ソウ

宗……………綜綜綜綜——ソウ

であることがわかる。同理で入聲のサフの音に就いても挿挿の音がなぜサフの假名の振られて居るかは直ちに了知せられる。言葉として之がサフの音を取るに至つたのは別に深い理由があるがそこまで問はない。唯茲ではその假名遣のことを云ふまでである。

尙盲の字がモウでなくてマウであり、網の字も同じくマウと振假名せられる所以は唯亡の音がマウなりしことを知ればこと足りるわけである。

長音の假名遣については尙實用上又學術上注目すべき點がある。それは同一の音符であつて、或る時は語尾がイで終り、或る時はウで終る如きものはその前の母音が必ずア(A)であつて、オ(O)にあらざること。實例で云へば『央』の字の如きもの。

『英』の字音ではエイであつて、イで終り

『快』の字音ではアウであつて、ウで終る

かゝる場合には『央』の假名遣はオウ (ou) でなくて、アウ (au) である央を今日オーと發音するところよりオウとする傾きがあるがそれは誤りである。尙他の例で云へば、『京』の字である。

『京』は景の字音ではケイであつて、イで終り

普通の音で京は即ちキヤウであつて、ウで終る

かやうに、イと、ウとで終る『京』は發音こそキョーであれ、假名遣はキヤウである。kyauである。之をキョウ (kyou) としては誤りとなる。先づ此の兩例によつて大抵は類推することが出来ることと思ふ。が今後は折にふれて此れが例外なるものを蒐集して研究して見たいと考へて居る。

例外。工の音はコーで、假名もコウである。従つて項攻功紅虹肛鴻貢なども總べてコウである。此の系統は極めて明瞭である。然るに江の一字に至つては支那後世の訛音の這入つた爲めか獨りこれだけはカウの音である。けれども江の本音のコウなりしことは鴻の字に含まるゝ江に依つて察知せられる。江の假名遣のカウなるは工の諧聲字中の唯一つの例外である。尙かゝる現象は媾溝構構購籌のうちにも此れに似た例外がある。

## (二) 拗音の場合

拗音の場合でもその長母音を語尾にせるものには免かく誤りが生じ易い。例へばキユーの音について、『級』の字がキウなるか、キフなるか、又穹の字がキフなる如くに考へるものがある。穹はキウ (kin) で級はキフ (kip) である。と云ふは穹は『弓』の音キウに基づいて居るし、級は『及』の音キフからその音が出て居るからである。既に『及』がキフなることを知らば、その系統の文字即ち、

及……………吸汲扱級笈急(急は素と及の音符と心の字より成る)

がキフにて統一せられて居ることは見易きの理である。

キョーの音にしても、竟(キヤウ)を含む文字は境にしても鏡にしてもすべてキヤウであり。又夾(ケフ)を含む陝狹缺頰すべてケフの假名遣なることも類推せられる。その濁音ギョーの音に於いては例へば堯舜の堯の字。これは更にくだいて土の字三つでゲウの音を有すれども、然し堯の字を直ちにゲウと見てもよろしい、此の堯(ゲウ)よりしてその系統字の、

堯……………曉繞繞繞遠翹——ゲウ

なることが類推せられ、その頭音を異にする饒(ゼウ又はネウ)に於いても此れが五十音のエ列の音ゼ又はネで書かれ、ともかく ge, je, ne 等の音なりしことを知る。饒の發音がジョーだからと云つてジョウでは假名遣には叶はないこととなる。

以上長母音を帯びた拗音でなく、短母音のものゝ場合でも、又同じ類推法が適用せられる。例へばエの假名の用ひられる場合。會の字、回の字にエの振り假名のあるは如何なるわけかと云ふに、會(クワイ kwai) より來たる繪繪繪繪會の孰れにも見られる通り語尾のアイ ai の前に kw の音がある。此れが會の本音の語頭にあつた音である。然るに kw の音は移つて hw となり更に始めの H が消えて次ぎの W がそのまゝ、ai の韻の頭に立つて現れて來る。その故に kwai は新たに wai となり、茲に K の始末の一段落を告げる。然るに語尾 kw は A と I とが互に影響しあつて宛かも手前 (emai) のマイがテメーのメーとなる如く wai の ai は變じて E となる。依つて wai は we となる理屈で



ある。理屈はかやうであるが兎も角も會(クワイ)のワの音の名残りがエに現れたと見れば澤山である。回向院の回がエなる所以もこれで解釋されるわけである。

以上漢字音假名遣について述べたものは僅かに研究の一局部に過ぎぬが、要するに音符の要素たるものゝ音をよく知つて置けば或る程度まではそれで類推法が利くものであると云ふことを注意したのである。此の方法で律する能はざる例外のあることは固よりであれば、自分でも之を絶対の價値のあるものとして認めて居るのではない。

然し試みに尙外にヨの音について、一例を取つて見るに、

天の假名遣はエウ……………故に妖はエウで笑はセウ。又喬はケウ。

喬の假名遣はケウ……………故に橋嬌僑嬌驕驕は悉くケウ。

例外、沃はエウの外にヨクの音あり。

羊の假名遣はヤウ……………故に洋養饜様漾もヤウ。

又詳詳痒翔はシャウ。羌はキヤウ。

かやうに同韻を以つて或る程度までは推して行かれる。

尙ムの場合でも嚴重に適用せられて、その例外なるものは殊に少ないやうである。

甘の音カムは柑酣瘖の總べてを通じてカムで現れ、一時甚、斟でシムとなつても、再び勘堪でカム

の音が復活する。又威の音カムが鹹威懣でカム鍼箴でシム。同様に敢の音カムも橄駁闞でカム、嚴にゲム、ゴム、巖にガムであるなど皆いかにもよくその語尾を統一的に示して居るではないか。又占の音セムは假令語頭がTに移るとも尙テムのムは保存して居る。店貼霑點など今の發音はテンなれども古き假名遣を云へば必ずテムである可きものである。

以上は字音假名遣を諧聲文字の方面から系統的に觀察したもので、別冊『漢字音の系統』を補はん爲め茲に特に注意した次第である。從來世人は間違つた考を抱いて居た。嘗て大槻博士なども漢字の音は實にまち／＼でその間に統一秩序の存しないものゝやうに觀て居られた。従つて假名遣の如きも殆ど條理のないものゝやうにたしか、云つて居られた。然し自分の見るところでは既に支那語の音韻史上に一定の秩序があり、その音韻史上の秩序は牽いては又字音の上にそれが現れて居る。日本の字音の如きはよほど日本訛りや百濟音などから受けた特別音の癖を有するも尙且つ上述の如き、更に尙多くの實例は前記『漢字音の系統』中に見ゆる如き一定の系統と、順序とが伏在して居るのである。實に漢字の音そのものゝ方面は多少の例外はあつても、大體は條理整然としたものである。もしかりに漢字が表音字でありしならば音の秩序は比較的よく世人に注意せられて居た筈である。唯これが古來常に千態萬狀の漢字で現されて居たばかりにその音上の秩序の存在が殆ど全く没却されて居るのである。要は漢字の錯雜せる點を以つて、直ちに字音の不統一を律すると云ふことは謬見で、此れは

必ずしも博士に對する伊澤氏の辯駁を俟つ迄もないことである。

## 第十七章 『漢字音の系統』に就いて

漢字の性質が無秩序で統一がないなど、云ふ様な見解は漢字研究の未だ起らなかつた前の思想である。高田忠周氏の二十有餘年の研究によつて漢字相互の『形の上の系統』は大いに秩序を得たかと思ふ。漢字系譜参照。自分は淺學不才日頃音語學上又音聲學上から漢字相互の『音の上の系統』を搜つて居るものであるが、今日までに先づ大體の假定説を得た。拙著漢字音の系統(日本橋區數寄屋町六合館發行)は即ちこれを法則に現して平易に述べたものに過ぎぬ。

印度歐羅巴語の方面にありては誰も知るかの有名なグリム (Grimm) の音韻法則がある。これはサンスクリット (梵語) ゴシツク語、古代高部獨逸語、及びラティン語相互の間の音變化の法則を定めたものであつて、その現象は實に整然として窺はれるのである。漢字音の方面に於いて自分の拉し得た假定説としての法則は果して此のグリムなどと肩を並べるに足りるだけの發見であるかどうかは、未だ速斷が出来ない。歐洲にありては流石にグリムの研究以外に尙 Lotner の如く、Verner の如く又 Paul の如き學者がグリム法則並びにその除外例の研究を試み爲めにグリムの法則は愈益確かめら

れることゝなつた。然るに漢字音の系統上の研究は過去にも現在にも、外に研究した著述なく、さればとて此の研究が自分の専門とするところなりとは云へ、今日漸くその端緒に着いたと云ふまでである。謂はゞ試験の時代である。吟味の時代である。之を以つて完成したグリムの法則と比肩するなどは甚だ輕々しい嫌がある。偷を tou と讀み、輪を shu と讀み、愈を yu と讀む。故に T, S, Y の順序がこれに認められ、澤を tak 釋を shak 譯を yak と讀む。故に T, S, Y の一系統は音聲學上から認められるものであるかと云ふは唯單に自分一個の考たるに過ぎぬ。獨の dok があり、燭の shok があり、而して未だ yok と讀まる可き蜀の音字は今日までには見出さないと云ふやうな除外例もある。自分はその例外であると、ないと係らず、この種の法則に就いて尙廣くあたつて見て、此の假定説をば將來益確實なるものに築き上げたいと思つて居る。

漢字のうちでも苟も諧聲で構成せられて居るものだけは是非その音符をたよりにその字音を指摘しなければならぬ。例へば寄附の二字はそれ〴〵奇と付の音符にて先づ注意し、滋養の二字は茲と羊とで之を注意して行く。これを試みるだけでも教授上などには非常な便利を與へることゝ思ふが、漢字音の系統上から云ふ時は更に之に一步をすゝめて同一音符に屬する他の音の文字をも律せしめようと思ふのである。獨、燭は既にも云つたが、尙養にしても、同音の洋、様の外に異音の祥、詳の如き又差の如きものをも注意する。これは別に又 K, S, Y の法則に據れるものゝ一例であるが、總べてか

やうに同じ音の系統に屬するものは、同一音符で律してどこ迄も秩序正しく推して行くことが出来るのである。稿を *jit* と讀むのは妙な氣がするかも知れぬが唯此の *K, S, Y* の法則の一例は *Kit* からの變化と見れば譯なく解かれるのである。支が *Ki* となり *shi* となるのも此の爲めである。系統を辿つて云へば造作もないことが、之を偶然的の現象と見る時には容易に音の順序がわからず、所詮無秩序不統一などと稱するに至るのである。

然しながら素と人間が発見し得る法則なるものは現象界の宏大無限なるに比べると實に九牛の一毛で、未だ氣のつかぬところに如何なる餘地が残つて居るかも知れぬ。唯然し自分は今日までの研究で十個乃至十一個の法則を見出したつもりであるが、これとても世の識者並びに先輩の叱正を得て更に改訂せられる餘地のないものと斷定はしないのである。自分は大々字音研究の方法について多少の秩序を興へ、以つて漢字研究の順序を世人に知らしむることが出来れば幸甚である。否此の杜撰なる一書の公刊を動機に、漢字研究が四方より盛に起つて来るに至らば、それで思ひは足りるのである。自分の假定説が破られようと、法則が否認せられようと、かゝる枝葉のことは敢へて意に介しないのである。

第一版の『漢字音の系統』は新調活字木版がとかく意に任せず、校正も尙五六回に及んだ次第であるに係らず、尙點劃については慊焉たるところが少なくない。再版亦同様。依つて出來得る限りは來

春の三版の方で訂正することゝした。序でながら左に同書三版の分の目次を参考の爲め列挙しておく。

## 第一編 序 説

第一章 漢字の觀かた

第二章 字形の話

第三章 字音の話

第四章 音符の話

第五章 字音の轉換

第六章 字音轉換の法則

第一節 語頭音轉換の法則

第二節 語尾音轉換の法則

第七章 音の側より觀たる字形誤謬の發見

第八章 漢字の教授について

## 第二編 字音系統表

第一章 カ行音の部

第十七章 『漢字音の系統』に就いて

- 第二章 サ行音の部
- 第三章 タ行音の部
- 第四章 ナ行音の部
- 第五章 ハ行音の部
- 第六章 マ行音の部
- 第七章 ラ行音の部
- 第八章 アヤワ三行音の部
- 第九章 追加の部
- 第一節 類例の少ない漢字
- 第二節 日本特有の漢字
- 附記一 音符五十音表
- 二 現行漢字の統計表
- 三 假名基本字の古音表
- 四 誤られ易き字音
- 五 『文字の研究』に就いて

同書に觀察せるところは大體この目次でその一斑の程度を察することが出来る。吾人は例へば堅、賢がなに故にケン音を有するか、又腎が何故にジン音を發するかは、臣の音符と音韻變化の法則とから説明することが出来る。『漢字音の系統』は此の程度のところまでを説明して居るのである。それ以上に遡つて然らば臣がなぜケン、シンの音を發して居るかの點に至ると最早や問題外であつてこれらのは一つに言語學上の問題になる。形としての文字とは少く關係が別になつて来る。つまり字を解剖し盡して最早や、その文字中に音符の迹を見出す能はざる程度に達すれば、そのところでは音符の系統上のこととはとめて置くのである。これは漢字音の系統の一立脚地點であるから序でながらその點を明かにしておく次第である。同じく K, S, Y の法則に従へる現象にても家の音 ka に對して舍、榭の音 sha があるなどの例、又軻の音 ka に對して鏟 sha のあるなど、これ等の音變化は同一音符の如何に關係なく、前の言語上の理由に依つて音の轉換が行はれて居るのである。言葉の音の系統上のごとは固より K, S, Y の法則中に認められるも然しこれは文字上の系統を述ぶるところには少く問題外となる。故に此の種の純言語に關することがらは總べて茲に抜きにしたのである。

附記 以上三三一ページ以來茲まで特に音韻部の一編を設けて敘述するところがあつた。固より特殊専門家の立脚地よりすれば尙且つ不備の點の發見せられることは著者自身にも氣づいて居る。發音機關の口腔、鼻腔、咽喉等に於ける詳細なる解剖的圖説の如き其の一例である。然し印刷の都合、日

限の都合、又餘りに音聲學の一方に偏し過ぎる嫌ひのある爲めに遂に割愛することとした。兎に角、音韻に就いては尙研究す可き餘地は非常に残つて居るのであるが、今日までの自分のなした研究の報告として今その大半を爰に公けにした次第である。

本書は『文字の研究』の美名を標榜して而かもそのページの大半は音韻の敘述を以つてうづめてしまつた。其の理由は素と自分一個の研究報告上の便宜に據れるは勿論なるも、然し又舊來の『文字の研究』法上に聊か資するところあらんことを期したるが故である。思ふに文字研究なるものは、常に音韻そのもの、研究が文字研究に資するのではなく、更に根本の話をすると、支那各時代の言語なるものが常に漢字の運命を根底から支配して行つて居るのである。音韻は唯その言語の音聲の側だけの表現に過ぎない。故に音韻研究のみを以つて文字研究の根底を解決することは固より未だ不可能のことである。どうしても言語の全體から文字の觀察に向はなければならぬのである。然るに由來文字の研究とし云へば言語方面よりの觀察は無論のこと、音韻の方面から之を觀察することさへもが未だ氣附かれて居ないと云ふ現状である。否な字形と云ふ具體的の一方にのみ眩んで、言語とか、音韻とか云ふ抽象的の側の等閑視せられて居たことは漢字研究者一般の通弊である。音韻學を文字學から離れた別の一學問であるが如くに視て居たのが抑もの謬見である。固より字形の上では漢字の性質上十分の音韻觀察は出來にくい。出來にくい故に文字と音韻の相互關係が密接でないものとして一般に見られ

て居るのかも知れぬ。然し觀察の出來にくいと云ふことを理由にして、兩者互に別個の學問なるが如くに斷するのは甚だ理に合はぬ譯である。思ふに、今後の文字研究は音韻學的、言語學的、文字研究に向つて歩を進めなければならぬのである。

### 第三編 言語の部

#### 第一章 支那古代の根本的研究に就いて

歴史の科學的研究が、支那古代の暗黒面に少なからぬ光明を與ふることは、今更贅言を要しない。併し所謂歴史の範圍だけでは、其の手の届くところ、未だ以つて、十分に支那の上代を明かにし盡し得たとは言ひ難い。於是か、歴史の研究法には一々其の方面の異なるに隨つて、それ〴〵其の必要の程度こそ違へ、諸種の補助學があつて互に相補ひ合ふの關係を有して居る。けれども補助學として進むと云ふは恐らく研究法上の言のみ。支那上代の研究の如き大問題をば單に史學者一派の手に一任して置くのみで、而かも其れ以外のものが手を着く可からざるものゝ如く放棄せるは、眞の支那古代研究の所以にあらざることと思ふ。

史家が補助學と命名するところのものは單に史家の見のみ。吾人は寧ろ其の所謂補助學となせるところのものを専門として、而して歴史そのものをば之を補助學としたらん如き研究方面が他に幾種類も起り出でんことを熱望するのである。否。今日は之が起らざるを得ない氣運に向つて居ることを斷

言して憚らないのである。更に一步を進めて極言すれば、支那古代の研究が單なる歴史研究法のみによりて研究せられつゝある間は、未だ以つて眞の古代支那が研究されつゝあるとは云へないのである。今少しく、適切にして際敏き研究が盛に併び興つて、之が歴史と共に相提携し合ふと云ふやうな風に支那古代を中心としたる包圍研究が起らなければならぬと思ふ。尤も此れは必ずしも日本人のみが獨占研究にする必要はあるまい。西人の眞面目なる研究亦た大いに容る可きは言ふを俟たず。要は、何國人でもよろしいから、共に包圍研究に熱心に従事すると云ふ精神が肝要である。

吾人は此の問題に就て歴史の價値を小さく觀んとするものにあらず。史家の勞に慊焉の情を起せるものにもあらず。唯歴史其のものゝ性質が支那古代の新研究には其れだけでは非常な不便を感ずるならんと推測するのである。このことは既に屢々識者間に唱導せられたところで、現に今、尙唱導されつゝある點である。

試みに思へ、支那上古の活動時代は之を漠然と分つても、尙有史以前と、有史以後との二つに區劃せらる。其の境は素とより判然せざるも、歴史の意義に普通に關係する領分は、無論有史以後のみ。而かも其の最初の部分は傳説時代として見る學者も少なからざる有様である。故に或は、有史以前と、傳説時代と、歴史時代との三時代が立てられても、別段不當ではあるまい。かくの如く觀來る時は歴史の領分は事實の上、比較的廣からざるものとなる。これ吾人が古代支那の研究に歴史のみを基礎とせ

ず、他に諸種の學問の必要を云々する次第である。

假りに歴史が有史以後の事實を闡明ならしむるものであるならば、有史以前の方は之を主として言語の研究と上古の遺跡、遺物の調査とに俟たざる可からず。人類學の方面より云へば言語研究で及ばざる上古の研究は、遺骨の調によりて人種の推定をなし得と云ふに非ずや。孰れにしても、有史以前の研究には其の傍證として有史以後の史的事實を借りること位はある可きも、眞の古代研究には、實際上の踏査及び古物其の物に就いての考古學的研究を必要としなければならぬ。これは鑑定の眼識を養ふを頗る難事とする譯であるが、兎も角是非記録の考證を離れて、別に此の側の研究が起らなければならぬ。春秋以前の研究に此の考がなくして調査するなどは、健全なる古代研究ではあるまいと思ふ。茲に考古學的研究と云ふは、主として、上代、居住に關係したるもの及び古器物、其他文字等からの研究の謂である。更らに進んでは言語學上からの研究で、之に依つて、吾人は其の古物遺跡の絶無の場合でも或る程度まで古人の人文を攷覈することが出來、又多少の推測の立つ如き場合には之をして一層たしかめ得るの便宜となるものである。

言語學、及び考古學の研究は素とより古代支那に光明を與ふるものなるが、尙之と同時に山西省、陝西省、河南省、山東省あたりの僻地の土俗及び傳説の實地研究が、これ又少なからぬ要素となるのである。禮記に見ゆる古習が今日の北支地方に、大體に於いてなほ固守されつゝあることを思へば、

古代支那の研究には此の側の研究が又少なからぬ面白い結果をもたらすと信ずる。

以上は簡略ながら古代支那研究の人文の側である。吾人は次に、之よりも更らに一層重大なる關係を有し、且つ千古不變なる山川地理の觀察をなすこと。是れが又頗る重要な方面であると信ずる。地理觀察中にも殊に、黄河流域の本流支流地方、一帯の地質、地殼の研究、滿蒙方面に走れる山脈、峪地の觀察、その他、居住と地質との關係、生業と土壤との關係等の點に至るまで、此の地理學的方法に於いても、古代支那研究上、調査を忽諸にしてはならぬ點が澤山あるのである。

支那古代の研究は西人の所謂シノロギー (Sinologie) と云ふやうな漠然たる名前でなく、日本では今少しく、専門的に分ち、而かも其の代りに各専門家は多面的の觀察を要する。畢竟、科學的、歸納的研究が要るのである。西人の支那研究は既に八九十年前から盛に從事されて居る。日本では未だ漸く十年になるかならぬかで、吾人は不幸にして未だ此の種の新研究が東洋協會調査部以外に團體として起つて居ると云ふことは聞かない。或は今日既に特殊の學者にして從事して居られるかも知れないが、未だ公には聞き及ばない。若し不幸にして未だ起つてゐないならば、學者、熱心家自ら之にあたらんことを慥越ながら希望する。

支那研究が完全なる發達を遂げて行く爲めにはどうしても此の根本研究が、早晚起らなければ鞏固な支那史の基礎は定まらぬであらうと思はれる。周代以前に於ける所謂史的材料としての文獻の少な

き古代支那の研究には、吾人は、上來述べたる各方面からの専門的調査の必要を説かんと欲するものである。此の話は嘗て市村博士との、閑話の一節で博士も少なからず、此の側の研究を主張せられて居られたところであるが、最後に自分の觀た愚考を茲にまとめて列挙して見ると次のやうになる。

- 古代支那の研究
- 1 北部支那の地理の踏査
  - 2 土俗及傳説の研究
  - 3 言語學的研究
  - 4 考古學的研究 附人種上の調査
  - 5 文獻學的研究
  - 6 文字學的研究

此れは觀る人の、趣味及び見解に依つて、多少異同もあるであらうが、大體此の六方面より少くは十分の研鑽は出來がたいことと思はれる。

以上に述べた研究法は範圍が餘りに廣くて、素と本書に敘述し來たつたところとは多少其の趣意を異にするものゝやうに考へられるかも知れぬ。然し古代支那を調べるには基礎としてかゝる見解を是非必要とするのである。自分が文字とか言語とかの方面の闡明につとめて居るのも、蓋し此れ等諸方面中の一部分に過ぎないのである。故に文字や言語のみの上から得られたものを以つて直ちに古代支



那の全般を推すことは固より出来ないのである。けれども従来漢學の弊として學者は多く常に言語の根本研究を抜きにして、唯單に文獻上の思想の點のみより上代を揣摩して居た故、一言以つて、茲に辯じ、旁支那上世研究法上の一革新を希望する次第である。

## 第二章 人種と言語

普通人種上の區別は種々の標準によつて觀察することが出来る。或は毛髮の上から、皮膚の上から、頭蓋骨の上から、時としては又身長の上から、又眼の形の上からと云ふやうに色々體質上の點から大體の區劃の立てられることもある。其他言語の特質の上から區別せられることもある。しかし孰れが多く準據するに足る可きものかと云へば體質上の方の區別である。言語の方は必ずしもいつも此れが唯一の方法となることは出来ない。固より時としては一般の歴史事實の到達し得ない範圍迄を會得せしめることがあつて確かに歴史以上の手懸りとなつては居る。けれども體質程に固有性を保存しにくいのみならず、時代の推移すると共に著しく變つて來るもの故、中々容易に言語上の同一で以つて人種の同一などは證明し盡くされるものではない。

本來言語なるものは改めて申すまでもなく、獨立的存在は出来ないものであつて、其の存するや常

に必ず人々に使用せられると云ふことにある。言語の言語的生命は全く此の點に存するのである。従つてこれを使用する人々のところを換へて推し移つて行くと共に言語も亦兎に角之に隨伴してうつゝて行く。けれども其の到着地に於ける幾代もの滞在と其土地の文化の程度の高い場合には共に相俟つて此れが移住者をして生來用ひ慣れた母國の言語を打ち忘れ、漸次その新らしい土言を採用するの止むを得ざるに至らしめるものである。其の移住者の人數が少ければ少ない程益その必要が起るのである。此の現象は同一の民族の間に於いても見られるが、又時として種族の違つたもの、間にも多く見られることで、本編第五章にも述べてあるやうに、こは現時の滿洲人に就いても之を窺ふことが出来る。

現時の滿洲人は地理上滿洲北部の諸地方及北支地方等に擴がつて居る。其の滿洲のうちでも北隅に住んで居るものは今日尙よく滿洲本來の言葉、即ち所謂滿洲語を傳へ存して居るけれども下つて南滿洲に居るものとか、北支地方に來て居るもの、殊にその數代も前から來て居るものは今や全く舊來の言語は忘却してしまつて、異種の言語即ち支那語を話して居る。素と滿洲種族は西比利亞の方向からアムール (Amur) 河方面に擴がつて居たツングース (Tunguse) 族に屬するものであつて、漢民族とは其の種族を別にして居ることは云ふまでもない。然るに今若しこれが支那語をややつて居るかたと云つて直ちに總べて支那種族であると稱するならば、其の間違つてゐることは火を見るよりも明かである。雜婚に雜婚を重ねて數代を経て居るものは別として、一般にはさうは云はれない。

尙一例を南の方、臺灣に取つて見ても過去十ヶ年に於ける帝國語の普及は非常なものであつて、今日では厦門、泉州、漳州からの支那人、廣東省からの客人其の他馬來族とか( )云はれて居る蕃人など、随分よく日本語を繰つて居るものがあるさうである。けれどもこれ等がその種族の上で日本人と混同せられないことは固よりである。かやうな卑近な例によつても觀られる如く、單に同一な言葉を使用して居るからと云つてすぐそれを人種上に説き及ぼすなどは餘りに早過ぎる推斷のしかたである。翻つて他の方面から觀察すると、實際は同一の言葉であつても唯その理解が出来ないなどの理由から宛かも別種の言葉であるかのやうに思はれる場合がある。奥州語と所謂琉球語との如きは即ちこの一例である。琉球の言語も薩摩の言語も又奥羽の言語も共に皆日本語たる範圍に這入つてしまふ。唯その土語のままでは互にわからないと云ふまでである。それ故表面の言語現象では到底言語の異同を云々することは許されない。況して種族に論及するなどは以ての外のことである。

然らば言語上の現象は常にかやうに種族異同の證左となすことが出来ないかと云ふに、必ずしもさうでもない。普通一般の場合には人種言語の兩問題は互に相符合するものである。唯それが國民の離散移轉、侵入其他大戦争とか又は文化上の影響などの歴史的關係が起るものであるから、符合しなくなるのである。然しその言語の如何に符合して居なく見えて居ても先づ其の根本的性質關係を知るには是非とも次ぎのやうな比較が必要である。

### 一、文章 (Sentence) の構成法

#### 二、音韻の特質

三、語彙、主として數詞、代名詞、名詞殊に親族名、身體各部の名稱、家畜の名稱其他打消し用語

大略これ等の點が符合すると言語と言語との關係は多く認められる。言語上の關係をすぐ人種上に及ぼすことは出来ないけれども、併し有力なる參考となり、立派な傍證の一つとなすことが出来るのである。唯これが唯一の標準となることが出来ないと云ふまでである。

## 第三章 亞細亞に於ける言語の分布

世界諸地方に行はれて居る諸種の言語が同一の起原から出て居るなど、云ふ一源論は今日の言語學では餘り唱へられて居ないので寧ろ世界の諸言語は多くの本源地を有して居たものと云ふやうに考へられて居るのである。人種の起源問題は暫く別として言語の方の起源は輓近一般に認められて居る多源説を穩當とする。但し玆には古い地質時代などに深く這入り込んで絶對的にダーウキン進化論の如く根本のところまでを推しつめて云ふのではない。唯大陸の諸地方に言語の見えそめた時の状態を假

定して云ふのである。

既に世界に於ける諸言語が事實上多くの起源から分岐して居るとしても亞細亞に於るものが必ずしも亦多源でなければならぬと云ふ理屈はないのであるが、併し亞細亞の諸地方に見える諸種の言語は自ら其の間性質を異にして居るところが色々ある。それ故亞細亞の言語全體の上から云つてやはりそれに共通の一起源たる中心點を假定するなどはむづかしい。

古來亞細亞に於ける言語の地理的分布は如何に見えて居るかと云ふに大體に於いて次ぎの四大系統のうちを屬する。即ち、

- 一、ウラル、アルタイ語系統
- 二、インド、シナ語系統
- 三、インド、ゲルマン語系統
- 四、セミテイツク語系統

がその主なるものである。今左に此の四大言語系統の地理的位置に就いて略述して見よう。

### 一 ウラル、アルタイ語系統

此の系統の言語は西の方歐羅巴の中央、匈牙利よりして東は滿韓日本に迄も及んで居る廣大な範圍

を占めて居る。尤もその中間に位する露西亞語などは此のうちに這入つては居ない。併しラブレランドやフィンランドの土人の用ふるフィン語、ラプ語はこのうちに屬するのである。その外ブルガリアのモルドヴィン語及び匈牙利のマジヤール語などを併せ稱して此の一語族をウラル語族と云ふて居る。

然らばアルタイ語族とは如何なる分布を有するかと云ふに、此れには南方アルタイ語族と北方アルタイ語族との二種類がある。南方の方のアルタイ語族は西は土耳其より東は朝鮮日本に來たつて居る。即ち土耳其、小亞細亞地方よりヴォルガ、ウラルの兩河口附近乃至は中央亞細亞の一帯の地、ひいては天山、新疆地方の一部分より蒙古に出で朝鮮半島より日本に來たれるものがこれである。其の所謂土耳其語のうちにはウイグル語チャガタイ語が含まれ又トルコマンやクリミアの言語及びキルギスの言語なども之に屬するのである。新疆地方は土耳其語の範圍内に這入つて居るが青海方面に行はる、カルムーク語は西部蒙古語を形成して居りバイカル湖附近のブリアート人の用ふる土語は北部蒙古として知られ、ゴビの砂漠の東南部に行はるゝものは即ち東部蒙古語として知られて居る。

亞細亞に於ける南方アルタイ語族はそれ故大體に於いて裏海以東バイカル以南、支那にて云へば塞外とか朔北とか云ふ方面の言語で尙それが日本に迄も續いて居るものと見られる。然るに或る言語學者の調査によると西比利亞の中央以東レナ河流域の東方に擴がりて行はるゝヤクト語を以つて同じく土耳其語族内に編入して分類をなせるものがある。これは言語の分布上とび離れたもので言語學で

云ふと、これは言語上の島 (Sprachinsel) と云ふものゝ大きなものである。以上は南方アルタイ語族に屬するものゝ話である。

次に北方アルタイ語族は大體露西亞本土の東部ウラル山脈以東の西比利亚一帶の地方に行はるゝ言語を總括して居るもので(但しヤクト語は除く)東は黒龍江の流域よりオホツク海の北岸地方に至り又一部は日本海に迄も迫つて居る。此の語族のうち主なるものはサモエド語とツングース語で其の中間にオスチャーク語がある。そのサモエド語とはエニセイ河口を起點として東西に長く擴がり、ツングース語はエニセイ河の流域より東方バイカル湖の北邊を過ぎ更に東しオホツク海及び日本海に迫つて居る。滿洲語は此のツングース語の一派と見られて居たが最近にシュミッド氏は之を否認し。滿洲語を別に視て尙これには黒龍江口のゴールド (Gold) ソロン (Solon) オロチエン (Orochen) 諸語を容れて居る。

日本語は南部アルタイ語に屬し朝鮮蒙古に類似を有するもの多しとのことなるも數詞の組織などは之と全く別である。白鳥博士の説参照。次にアイヌ言語は日本語朝鮮語などゝ共に一時は全く無所屬の言語として歐洲の言語學者に考へられて居た。然し金澤博士の之を日韓兩國語に比較せられた研究が見えるに至つた。又アイヌ語のうち數詞に西方サモエドのそれと組織の一致するものがあること云ふ白鳥博士の新研究も見えるに至つた。

亞細亞北半の言語は以上の如く大抵はアルタイ語族に入れて考へることが出来るが、併し最近西比利亚は河沿ひの肥沃の地とか要所々々の土地などには露西亞スラブ語の行はるゝものが少なからずある。尙西比利亚極東の北部地方にはチュクチー語とか、甘察加語とか、コルヤーク語又ユカギール語であるかと云ふ言語が行はれて居る。しかしこれ等は尙尙所屬を明かにしない勢力のない言語である。世界の文明の上にこれ等の言語が何等の影響も與へることは無論ないが、しかし言語の分布を調べるには是非明かにして置きたいものである。

## 二 印度支那語系統

亞細亞で西藏の高原及び緬甸から、東の方の支那本部全體安南暹羅までを含む地域。此の亞細亞東南の一帶の地方には印度支那語系統の言語が行はれて居る。尤も一部分は滿洲の方面に侵入して行つて居るところもあり、又馬來半島の言語の如く一部分南方から別種の言語の這入つて來て居るところもある。

西藏語は支那語と相互に親族語であつて一語族をなして居る。此の一語族は既に述べたアルタイ語族と比較するならば全く其の性質を異にして居るのである。

尙ヒマラーヤの山地及び西藏の高原には多くの同族語が行はれて居る。ホルバ語、ギャルング語の

如きその他ブータン語、ネパール語、キラント語、レプチャ語など種々の小言語がある。

安南暹羅の方面にはラオス語、アホム語、シアン語の如きタイ語族があり又別にシャン語がある。これ等は支那語と直接又は間接に關係のあるものである。又支那南方地方に居る苗族の言語を時として此の語族のうちに入れて考へられて居ることがある。支那語と苗族語とは單語の上には似寄りが見出しにくい。

支那語は北支地方のものと南支殊に福建とか廣東あたりのものとかは互に全く相通することの出来ない程であるが併しそれは久しい間の時代の上の轉訛に依るものであつて孰れも支那語と云ふ一つの言語のうちに入れて考へることは出来るのである。安南語でも時には支那語と大差のないものが随分あることを見る。

ビルマとかシンファとかナガ種族などの用ふる言語は又別に一群をなして、而かも同じく此の印度支那語系統のうちに屬して居るものである。

### 三 インド、ゲルマン語系統

亞細亞に於いて最も著しい言語系統は上述の如く、アルタイ語族と支那語族との二つであるが、尙亞細亞の西南部地方には全くこれ等と言語の性質を異にしたものがある。そのうちに一つをインド、ゲ

ルマン語族と云ふ。時として又アーリアン語族とも云ふて居る。本來此の語族の地理上の分布は前印度の大半から以西歐羅巴の殆ど全洲に擴がつて居る。否大西洋を渡つて南北亞米利加に行はれて居る英語、スペイン語なども皆これに含まれて居るのである。亞細亞に於ける此の語族は、印度及びアフガニスタン地方に行はるゝ印度語と、波斯地方に行はるゝイラン語との二種類に分れて居る。併し共にアーリアン語族のうちに屬する點は同様である。

### 四 セミティック語系統

セミティック語系統の言語は多く死語に屬して古代のヒブリュウ語とかカルデア語などがこれである。今日とても全くないのではない、アラビアの語などはその尤も代表的となるものである。尙シリア地方の言語とか猶太人の言語などもこれに這入る。しかし猶太人などは到る處のその土地の言語を使用して居るから特色は示して居ないにしても昔の聖書の原本に見えるのヒブリュウ語は素との猶太の言語のまゝである。

かやうに亞細亞に行はるゝ言語の種類及び分布は之をわかつて四種類として考へることが出来る。けれども歴史上又人種上の關係からするとアーリアン語族及びセミティック語族の二つは寧ろ西洋の局面の方に關聯するところが多くして殆ど亞細亞の言語と云ふうちには入れて考へられて居ない傾向の

ある位である。又實際此の二つの語族は西人によつて從來十分に手がつけられて居る。然るに残る二つの語族即ちアルタイ語族と支那語族の方は一時今から七八十年前は盛に西人に研究せられて居たこともあつたけれども、其の後は頓と寂寞の姿となつて居る。吾れ、日本人の亞細亞に於ける言語の研究は固より先づ此の支那語の方面と、アルタイ語族の方面にあると思はれる。將來此の未墾の言語の原に蹶を入れることは他の人文に關する諸種の學問と共に是非平行して進んで行かなければなるまいと思はれる。

#### 第四章 亞細亞遊牧民族の言語に就いて

支那塞外の民族は其の種類が多様で人種學上色々の種族に分かたれる。或は蒙古族或は土耳其族或は西藏族其の他ツングース族と云ふやうなものがその主なるものである。人種學の根本標準たる體質の上から云へば斯やうに分類して考へられて居るが、併し若しその大部分を通覽して其の生活狀態の上から共通の點を採つて見れば孰れも皆遊牧を事として居て西人の所謂 *nomad life* を送つて居るのである。故に或る東洋學者は之を遊牧の民と總稱することもある位である。古來支那の歴史の上では西戎とか北狄とか或は又東胡とか云ふやうな方角に依り多少呼び別けの出來て居ることもあるが概

して獸同様に視た呼びかたが多い。少くとも之を書き寫す時は獸偏の文字を以つて表はして居る。麋とか狄とか云ふ文字はその好例である。或は又匈奴など、云つてつら惡くい呼びかたをして居ることもある。しかしかやうな感情は孰れの國にもあることで獨り支那にのみ限つた現象ではない。(第一編第四章參照)

支那民族が塞外諸民族に對する感情及び命名の仕方は大概以上の如きもので、かれ等の生活狀態は大體同一である。又支那が世界で有数の古い歴史と記録を有して居るのに反して遊牧民族は少し以前に浜ると何等の記録なく僅かに支那とか西洋とかの外國の古書に散見して居る材料が残つて居る位である。ウラル、アルタイ語族の民族が有する其の記録のうちで日本の古事記が一番古い記録である。云はれて居る一事に徴して見ても如何に北方民族が古記録に缺乏して居るか、察せられる。尙塞外民族は其の特質として奪略と侵略の歴史を有しては居るが文化の歴史は殆ど有して居ない。否實際其の結果から云へばかれ等は南方漢民族の文化を常に破壊して行く方ばかりに努めて居る者と見られる。従つて古來麗はしい文學上の産物を殘して居る漢民族とは違つて北方民族は一般に殺伐たる有様である。

塞外遊牧民族の文化程度はかくの如く低い程度で元始的の状態 (*primitive stage*) たるを免れな。通常かゝる程度の民族が有する言語は總じて軽く視られて居る傾きのあるのは無理もないことであ

る。が併しそれは民族の文化史に餘りに重きを置いて觀た爲めである。けれども我が言語學上では之と觀方を異にするのである。

今更らしく云ふまでもないことであるが、凡そ言語そのものを觀察するには其の言語をつかふ國民が必ずしも嘗つて立派な文化を有して居なければならぬと云ふわけではない。既に歐羅巴の言語學者も云つて居る通り、希臘や羅甸の言語を研鑽するばかりが言語研究の能事ではない。言語現象の奇徴なるところを窺ふにはアメリカ、インディアン、土語とか亞非利加ホツテントットの言語などに於いて反つて學び得る點が多々ある位である。それ故蠻人の言語は反つてホームマーの詩集以上の價値を認めらるゝことがあると云つてよろしい。

支那人が如何に戎狄の言語として卑み又歴史上如何に文化の發達がないからと云つても今日塞外遊牧民族の言語は決して等閑に附す可きものでない。古記録の缺乏は其の言語の歴史的研究を頗る困難ならしめるとは云へ尙その間外國の古記録から多少の手懸りが得られるのみならず現代の諸方言に就いても無數に調ぶ可きことが推積して居る。研究すればする程戎狄の言語のうちにも色々のわかちのあることは勿論である。然るを唯その之を使用する民族が遊牧の生活状態にあるからと云つて亞細亞北半の言語を區別なく總べて一括して同一視する觀方があるなどは勿論眞の研究の所以でない。又チユラニアン語族など云ふ名稱の如きもアーリアン語族、セミテイツク語族に抱合せられない亞細亞の

言語を引きくるめて總べて此のうちに容れてしまふ。謂はゞガラクタのはき溜め言語族とでも云ふ可きものゝやうな形に見えて居る。併しその語族のうち南部のものは支那語族で北部のものはウラル、アルタイツク種族である。而して前章にも述べて置いた通り其のアルタイツク語族には日本朝鮮の言語もその系統を引いて這入つて居るのである。即ち日韓の言語は所謂遊牧民族の言語と同じ系統のうちに屬するもので此れが研究は日本人に取りて最も趣味のあることと思はれる。此の點で支那塞外諸民族の言語は假令文化史上に古記録こそなければ日本及び東洋の諸語研究の上に缺く可からざる一方面たるを失はないのである。

近時支那塞外の言語は日本及び露國の學者によりて漸く注意を鋭くし、現にその研究は着々進みつゝあるものゝ如し。殊にシュミット (Schmidt) 氏の研究の如き又白鳥教授其の他最近本邦諸學者の塞外民族諸語の觀察は頗る言語研究上留意す可きものがある。吾人は自分の立ち場として支那語研究の急を促がすものなりと雖も支那語中には北方語起源の言葉頗る多きにより、つまり遊牧民族の言語研究は外的支那語闡明の上に少なからぬ光明を與ふるものと信するのである。

## 第五章 支那主権者の蒙むる言語上の運命

凡そ一國の主権者は普通は政事上とか軍事上とか云ふ方面では抗ふ可からざる勢力を有して居るものであるが、風俗習慣又は言語などの方面になるとなかなか之を左右することはむづかしい。否反つて風俗習慣言語の爲めには流石の主権者も其の意を枉てゝも従はなければならぬこともある位である。獨逸のグリムが法典の編纂に就て云つて居ることに『慣習に背いて作られた成文は到底法律たるの價値を認めない』とかあるがこれは甘く此の間の消息を告げて居るものである。

支那の主権者が言語上に蒙むる運命に就いては最早や茲に推察せられるであらうが、尙主権者と言語との關係に就いて面白い類例が歐羅巴の方面に見出されるから先づその中の一二を擧げて見よう。

昔羅馬時代にマーセラスと云つて文法學に通じて居た廷臣があつた。或る日の事チベリウス皇帝の言葉に一つの云ひまちがひがあつたのを見て、すぐ之を指摘した。すると傍に居た文法家のカピトは反つて帝の言葉が正しいラティン語であると云つて讚美した。マーセラスは其の言質を取つて云ふには『カピトの云ふところは伴である。陛下には政治上の権力に於てこそ羅馬に皇帝たるを得てござるう。』

が、言葉の方ではまだ／＼なか／＼のことで』と直言したと云ふことである。又獨逸のシギスムンド皇帝に就いても同様の逸話がある。即ち皇帝がコンスタンス會議を主宰してあられた當時、或る會場に臨みラティン語で以て滔々と演説せられて居た真最中、一僧侶があつて突然叫んで云ふには『畏くも陛下には文法上名詞の性(男女)を混同せられて見えるがそれは明かに中性名詞である』と遮つた。皇帝は靜かに『爾は何處からそれを學んだか』アレキサンダー、ガルスと言葉から『爾は一體たれか』『一僧侶で』羅馬に君臨する朕が言葉はどうして一圓頭の僧侶などに屈しようか』と強く出られて、滿場のものも私かに之を苦笑して居た。然し其の言葉は其の後尙依然として中性の名詞で行はれて居て、一天萬乗の君の力も遂に之を何ともすることが出来なかつたと云ふことである。

かゝる逸話 (Max Müller の Science of Language I 參照) は全く人爲に依つて言語といふものは決して左右せられるものではないと云ふことを明かに示して居るものである。一國の主権は謂はゞ人爲によつて獲得せられるものであらうが言語の場合には實に人爲以上で、容易に權勢や威壓などで左右せられ得可きものでない。

今之を支那に就いて攷ふるに近くは現滿洲朝廷は如何。初めその中國に主権を握つた當時こそ生來の清語即ち滿洲語及び滿洲文字を用ひてゐたやうであるが、爾來年を経るに従ひ塞外の言語はいつしか忘れられて之に代ふるに支那語を以つてするに至つた。これは力めて支那語を用ひようとしたわけ



ではなくとも自然と周囲の境遇之上に同化せられてしまふ歴史的の淵源を有して居るのである。單に言葉ばかりでなく風俗習慣の如きものも亦中國のそれに同化せられると云ふことは北方の異民族から起つた支那主権者の免る可からざる運命である。

云ふまでもなく支那の主権を握つたものは古來大概は塞外の異種族から起つて居て、純粹の支那民族から出て居ることはむしろ少いと云つてもよろしい。つまり支那の天下を覆へすものは殆ど常に北方から起つて居るのである。これは全く南方の支那民族の文に長ずるに反して北方の異民族は専ら武に長じて居るからである。古來支那民族の最も恐れて居るものはこの外部からの武力の壓迫であつて、支那の天下に主権を取つたものもこの北狄の外患に備へてゐなかつたものはまづ極めて少なかつた。此れを最もよく證明して居るものは歷朝歴代の都の位置であつて、或る特別の事情のあつた時の外は支那の都とさへ云へば常に中國の北隅に偏した處に奠められて居る。古へは夏殷周當時にしても或はその以後にしても此例に漏れるものは極めて少ない。主権者の眼から觀る時は必要上北隅に於いて奠都しなければならぬわけがあつたので時としてはまたそれだけで不十分な處から湖北に接して長城までを築いた位である。

古來支那主権者が政治上軍事上か程までに北方に重きを置いて居た事は争はれぬ事實である。然るに他方に於てかれ等が中國を治める上には單に武一偏を以てすることは出來ず、自ら文の方面を加味するの止むを得ざるに至るのである。塞外から起つて支那の主権を取つたものが今其の固有の言語を以つて天下に號令しようとしても元來言語上の性質が違つてゐるものであるから中國の人々には、とてもわかる氣遣ひはない。例へば蒙古族の言語にしても之も支那文字で全く漢譯してしまへばかくべつさうでなくて音譯などしてゐた位では到底支那民族一般にはわからない。それ故たとへ政治上では北方種族が之を制服して居たとは云ふものゝ言語上では反つて被制服者の爲めに屈服しなければならぬやうな運命になつて居る。

一利一害は數の免れざるところで言語上の屈服は引いて中華の衣服を着け中國の器物を愛玩するの緒となり、その結果遂に全くの中國人で精神の方面までが又それに伴つて最初天下を取つた所以であるところの武のことは忘れられる。そこで北方に隱然勢力をたくはへて潛んで居たものは此の機に當つて中原の鹿を逐ふのである。かくの如き現象は支那南北の兩勢力の間にあつて上下三千年の歴史中幾度繰り返されてゐたか殆ど算するに遑ない位である。かやうにいく度北狄が入り込んで中原に主権を握つても其の言語が遂に以つて支那語を壓するまでには至つてゐないと云ふのは抑もいかなる理由によるのであるか。

朝鮮に於ける日本の勢力などは日尙淺しと雖も既にこれ日本語で朝鮮語と調和して居るものもかなりある、これは其の言葉の云ひかたに於いてその系統上相接近してゐるのみならず、一つ々々の單語に

於いても似たものがわりあひ多いと云ふこと又入り込んだ日本人の多いと云ふことゝが、その他尙一般の文化に於いて日本の方が遙かに優等の位置を占めて居ると云ふわけもあるであらう。然るに支那の主権者の場合には根本に於いて支那と言語上の系統がちがひ、從てすべて言葉の云ひかた、一つ一つの單語に至るまで何等の似寄りもなく、語韻の有様もちがつてゐると云ふわけで塞外の言語は中華のそれと調和融合することが出来ない。之に加ふるに塞外の文化は中華に比して殆ど雲泥の差も嘗ならぬので御話しにならない。これ等が主なる理由となつて支那の主権者は反つて被制服者の言葉をつかはなければ實際の政治が出来ないと云ふ運命になつてゐるのである。それ故或は言語上の運命は他の風俗習慣の上の運命よりも更に重大で且そのまのあたりに感ずる不便は又中々看過す可らざる理由となつては居らないかと思はれる。

要するに支那の主権者は多く北方の異種族から武を以つて起つて來たもので、その武斷的政治を取つて居る間はただしも、漸次中國の文化に調子を合はして政治をして行かうとする場合には萬事中華の風に則らなければならず、殊に其の言語の上では一般中華の風に感染せられるまでとなく否その主権を取らうとする時には既に郷土の言語は棄て、支那語を用ひなければならぬ運命にあるので、其の主権を取ることの久しければ久しき程多く被制服者から言語上の制限を受けなければならぬ歴史付きの運命を有して居るのである。それ故支那民族は武に於いては常に北狄に制せられてゐても言語

に於いては決して北方外民族の束縛を受けてゐないと云つても過言ではあるまい。(明治四十年九月稿)

## 第六章 支那語に對する僻見

學問上の見地から支那語は今日一大疑團として目せられて居る。從來支那人自身は固より日本人に於いても支那語と云ふものゝ真相を闡明しようなどの念頭は浮びもしなかつた。従つて支那語の性質發達が如何なるものであるか少しも攷究せられて居ない。

東洋の方で支那語が殆ど研究せられて居ないのに反し西洋では既に六七十年前頃から考察せられて居つた。實に十九世紀の中頃支那語は泰西の言語學者間から大いに注目せられて居たのである。これは當時歐羅巴で言語學の研究が大分隆盛になつて居たから獨り支那語ばかりの攻究があつたのではない。彼れ等自分のインド、ゲルマニオンの言語研究が主で、セミテイク語の研究も起り、一方には又ウラル、アルタイ語の研究も着手せられて居た。尙マレイ方面でカーヴイ(Kavi)語の考察までがあつた位である。

かやうに西洋では早くも世界諸地方の言語が研究せられて居つたが、そのうち最も完成の域にまで

研究せられたのは古代印度の言語を始めとし今日の歐洲諸國の言葉である。殊に言語學界の天才とも云はれる人達(二三三頁參照)が多くゲルマン語族の研究を遂げた爲め極めて緻密なる研究結果が擧つたのである。今日世界諸地方の言語研究の方法上に其參考となる教へを垂れて居ることは非常なるもので實に吾人は之に向つて多大の感謝を表さなければならぬ。

然らば西人の觀た支那語は如何なるものであつたか。如何なる研究を支那語に就いてなしてゐたか。素とより支那語に就いてはインド、ゲルマーネン語の研究とは同日の論でなく著しい徑庭がその間にあつた。

即ち彼れ等は支那語の事實上の方面に就いての科學的研究は積まないで居て、寧ろ其の哲學的方面の考究に耽つて居たやうに思はれる。支那語の事實の方面の研究は實云ふと西人などには少々無理で或は當時その十分な素養が出来て居なかつた爲めかとも致へられる。唯哲學的方面で支那語は自由自在に上下せられ、彼れ等が言語の發達論を云々する時とか言語の分類をなす場合には必ず支那語がおさまりの如くかつぎ出されて居た。

西洋の言語學者の大多數殆どその全部は言語の發達上から支那語を如何なる程度のもものと見て居たかと云ふと、世界の言葉のうちで支那語程發達程度の低い Primitive のものはないとしたのである。然らば自分たちの話す歐洲語は如何と云ふと、云はずもがな、それは最も高度の發達を遂げた言語で決して外の言葉と同程度のものでないとした。そうして支那語の程度から歐洲語の程度に迄發達して來るには中間に土耳其、蒙古、朝鮮、日本などに行はれて居る言葉の階段を経て來なければならぬとしたものである。

要するに支那語は言葉として一番發達程度の低いものであると見られて居た、其の理由とするところは支那語は單綴語でその語の形式に何等の語法形式が現れて居ない。語尾變化もなければ、テニヲハの附着することもなく、唯各個の單語を列べるばかりで語の排列順序が即ち語法となつて居ると云ふ風なものであるからと云ふ。つまり文法上の形式が語の上に缺けて居るからであると云ふに歸する。けれども此の見解は今日の英語の大勢を支那語に比較して見ると、あながちそんなに發達程度の上下を云々する譯には行かなくなるのである。フンボルト(Humboldt) 其の他心理學の見解を有する言語學者も云へる如く支那語が語尾變化なくしてしかも思想をよく表し得るは梵語歐洲語に劣るところはない。近くは即ち英語に於いても唯語詞を列べるだけで文章をなし別段の語法形式のいらぬこともあるのである。言語が若し凡て發達の方向に向つて進んで居るものであるならば、英語が支那語風になりつゝある事實は反つて怪しく見られるわけで反つて高度の發達程度から退いて程度の低い方に逆戻りして居ると云ふことが云はれるのである。

かやうなことは言語の性質の全く別であるものと同じ發達の筋路から論じようとしたから起つたわ

けで、素とより印度歐羅巴の言語と支那の言語とは元來が別種の性質を有するのであるからあながち西人の観る眼でばかり支那語を律して行かうとするのは受取りにくい。

支那語なるものは云ふまでもなく世界の他の國言葉と發達の状態がちがつて居る。それは形の複雑な文字を他方に盛に發達させ言語と平行し且つ同體となつてそれ特有の發達を遂げて居る。それ故支那語は音の上の語法形式こそ他の國語と違ふにしても文字の形式で以つて殆ど遺憾なく之を補つて居るのである。此の點で支那語は世界無比の特有の發達を遂げて居ると云はれるわけである。決して最低度の状態にあるところではない。西人も云つて居る通り、なる程支那語は語法形式には乏しい。併し乏しいけれどもその代り文字の方面でかやうに殆ど達し得られるだけのあらゆる發達を遂げて居るのである。唯に文字の方便を借りるばかりでなく音そのものゝ操りかたの上にも極めて微妙なる現象があらはれて居て緻密な意味の區別法が立てられて居るのである。尤も心理學派の西人は既に此の點を認めて居る。而して支那語はその音現象の複雑なる爲め勢ひ無數の方言を發達せしむるの止むを得ざるに至つては居るがそれは言語範圍の廣大にして天然の地勢上又人文の發達程度の上自然の數であると思ふ。

畢竟するに支那語の發達程度などに就いて云々するにはその前に十分なる事實の上の研究を積んで置かなければならぬのである。支那語を發達の程度のひくいものと見るは西洋語を標準にして云ふからである。西人がふれの説である。尙單綴語の代表語と云へばいつも支那語が引合ひにとられるが、果してそれ程單綴的のものであるかどうか。之には慎重なる研究を要すると思ふ。吾人は今迄に支那をどこ迄も本位にとつて研究する言語學的研究者が西人の間から出て居なかつたことを遺憾に思ふ。否これは西人には望みにくいことであるから此の點は日本人が最近の研究法を以て新開拓の任に當らなければならぬと考へる。

## 第七章 支那語の學術的研究に就いて

支那を對象とする諸般の學術的研究が我が國に於いて盛に起らなければならぬことは今更贅言を要する迄もない。わけて支那語の研究に至つては吾人は種種の便益を歴史的に有して居る。從來は所謂支那語と云へば單に商業取引の上、又は軍事通辯の上などよりして間に合せの實用を主とした研究（若し研究と云ひ得らるゝならば）があつたきりで、つまり唯支那語の會話が出来ればそれで以つて能事了れりとして居た。

支那語が實用的價值を有することは無論であるが尙吾人は之に向つて更に一步を進め實用以上の研究價值を認めなければならぬ。固より支那語の完全なる修得を期する爲めには先づ第一に實地に支那

語を理解し口にすることが出来なければならぬ。如何に支那語の學術的研究とは云つても支那語の實地の素養を積まないで居て、いきなり取りかゝれるものではない。若しそれなしに取りかゝれば順序を経た研究法とは決して云はれない。それ故これが實地の修得は健全なる支那語研究の根本條件である。又必要なる出發點である。支那語の學術的觀察に就いては此の點を先づ明かにして置かなければならぬ。

次ぎに然らば實用の點を脱却して支那語の學術的研究とは如何なる事柄を指すのであるかと云ふに茲で云ふのは支那語の科學的觀察を指していふのである。即ち言語學 (Science of language) の立脚地からして支那語を歸納的に研究するのである。此れには現在の地理上の分布に従つて觀察をして行くのと、今一つは過去に遡つて歴史的にその沿革變遷の跡をしらべるのがある。これは支那語を横からと縦からとの二方面の觀察である。更に詳言するとはそれ／＼次ぎの如き事柄を含んで居るのである。

一、支那語の地理的觀察。これは支那語を横から見た觀察で今日のところ大體に於いて先づ所謂北平官話なるものを標準に取り此の標準語を土臺に取りて之と諸地方の方言との比較研究をなすこと。此れが第一に必要な點である。

二、支那語の歴史的觀察。此れは支那語の古代の状態に遡る研究であることは無論であるが主として一つの時代から他の時代に移る間の變遷沿革をしらぶる研究である。即ちこの方は音韻を縦に見た研究である。

以上支那語の兩面の觀察をなすに當つては孰れも共に共通の研究部門がある。即ち、

- 一、音韻の部……………Phonetic side.
- 二、語彙の部……………Vocabulary.
- 三、文章法の部……………Syntax.

などがその主なるものである。併し此のうちの孰れの部門の研究とても頗る複雑で又容易に手の付けられる可き性質のものではない。實際のところ今日では未だ其の研究法すらも建てられて居ない状態である。就中第一に擧げた音韻の部に就いてはその歴史的觀察が餘程困難である。或は云ふ古代の支那音は南方の方言中に見出されると。併しあながちに之に依つて古音を決定することは出来ない。研究上に種々の困難はあるが、兎に角支那語研究として以上の部門の研究が必要である。ところが支那語の研究は主として支那文字を経て觀察しなければならぬ場合が多い。併し支那文字は或は程度まで意義も表はし又音も現して居るから之による時は少なからぬ研究上の便宜を得るのである。支那の文字が歐洲文字と同様の表音文字でないから言語研究法上の價値が少ないなどは云ひにくい。かやうに支那語自身の研究、支那語と支那文字との關係の研究と云ふは即ち支那語の學術的研究の内部

観察である。

次ぎには更に支那語を中心として外部の同族語即ち苗族の言語とか、安南語とか、其他シアム語、西藏語、ネパール語など、比較してつまり單綴語としての支那語の發達位置を見なければならぬ。この観察に當つても上述の音韻、語彙、文章法の三部門に就いて出來得る範圍まで調べるのである。畢竟するに以上の如く支那語は縱横から三大部門に就いてそれ／＼特種の研究をなし更に之を外部から取り圍んで観察すると云ふこと此れが支那語の學術的研究の概要である。更に日本人の研究立ち場としては日本の單語及び漢語から観察すること。これが又間接にその一補助となる。少なくとも支那語の歴史的方面の研究の一資料となるのである。大矢透氏に従へば推古朝（元興寺露盤銘）に蘇我氏のことを巷宜とある。古朝鮮の音との關係もあるべけれど兎も角『巷』がソの音に轉じ易いH音を有せしとが察せられる。尙後世蕎麥（ソバ）の蕎の字がソの音で讀まれ居ることの一事によつてもこれは疑ふことは出來ぬ。序で乍ら附記する。

## 第八章 支那語研究の方法に就いて

支那語は此れを實習すると云ふことの外に學問の方面から深く且つ博く研究をして行かないと支那

語なるものゝ真相はわからない了る。如何に巧みに支那語を操ることが出來又如何に徹く理解することが出來てもそればかりでは固より研究とは云へない。又古代の漢文なり漢語なりを如何によく讀み書きすることが出來ても單にそれだけでは支那語なるものゝ性質を知ることが出來ない。從來漢學と云ふ漠然たる手博い研究で以て萬般の支那の文獻が取扱はれて居た。併しその研究方面と云ふは主として經學、史學、文學の點に在つてその思想感情の表彰たる言語そのものに就いての根本的研究は顧みられなかつた。單に顧みられなかつたのみならず、寧ろ言語の研究は小學の末枝であるとして軽く見られて居たことは事實である。若し支那にあれ程の象形風の文字が發達して居らずに音標文字で總べての文獻が書かれて居たのであつたのならば、かくべつ事實支那の文獻は悉く形が主になつて居る文字で書かれて居るが爲め、欺かれて眞の言語の存するところを遂に拉へそなふことが屢ある。文字の形があれ程複雑な發達を遂げて居るだけそれだけ却つてその裏面に言語の方面まで切込んで、根本的の觀察をして行く必要があるのである。然るに從來の漢學に此の側の研究が殆ど全く怠られ蔑視せられて居たとは斯學研究上の一大缺陷であつたと思はれる。

更に一步を進めて考ふるに從來の漢文研究にては單に古代の支那文を讀み書きすると云ふことに留つて居て現代の時文とか尙今日の北平官話などゝそれが如何なる歴史的關係を有して居るかと云ふやうな卓近な問題になると愈益手がつけられて居なかつたやうに思はれる。今日までの漢學とても素

より没す可からざる努力と効果とが擧つて居ることは十二分に認められなければならぬが、併し茲に云ふのは寧ろ従來の研究範圍が明でなく又研究の方法と云ふが唯いつも古習を繰返すばかりの舊式の法であつたと云ふ點である。

凡て支那語の研究範圍はその歴史的の方面と地理上の方面との二つに分かたれるとは云ふもの、併しこれは單に研究の方法の便利に依るまでとあつて苟も支那語の學術的研究には此の兩方面の觀察を常に同時にする必要があるのである。尙言語學上の立脚地からするならば之を世界の一般言語の現象とも照合して見る必要があり、或は又心理學上から又音韻學上から、その他人種學上からと云ふやうに種々の方面からの精密な觀察を要するのである。

上述のやうな種々の方面からの科學的觀察はつまり支那語の新しい研究法である所以であつて、従來の舊式の觀方とは全くその趣を異にして居るのである。従來の研究では例へば音韻の方面で云つて見れば韻鏡とか詩の韻とか、らわりだした音を以て正しい標準音となし且つは眞の古音其の者とせられて居たけれども新研究法の觀方からすると根本的に舊來の斷案を打ちこはすことすら珍らしくない位である。これが歴史的の方面に應用せられては現代から明、元に洩り、宋唐に洩り更に三國時代より兩漢に至り、尙出來得べくんば周末春秋の古い言葉までの沿革をも辿つて行くことが出來るのである。此の方面の多くの材料を集めると同時に又他方に於て又古來漢民族と互に相接觸した諸民族の言

語を對照にとりて兩者の言語關係を縦横に觀察し更に進んでは支那各時代に現れた多くの言語現象から有史以前に於けるゾット古い支那語を歸納的に假定することも出來或はその假定説を前提として續釋的に後世の言葉に解釋を及ぼして行くことも出来る。つまり前提に矛盾の生じない限り假りに定めたいものを楯にとつて一層之を確實ならしめて行かうとする研究法。此れが支那語の最も闡明しがたい部分の研究法案である。

併しながら以上に述べたやうな大々的研究法は云ふは易く行ふは難しで到底今日の研究程度では望み得ることでない。先づさしあたりは部分的に一局部の研鑽を以て出發しなければならぬ。素とよみこれとても唯研究の範圍を成る可く狭めると云ふだけであつて研究の方法そのものに至つては既にも述べたやうに新しい方法で科學的に進み決してドグマを挿むことは許されないのである。近來普通にも日本は支那と同文の國であるから支那語の研究などは云々とさも朝飯まへの仕事のやうに支那語の研究を容易に見るものがある。併し茲に吾人の注意を要することは同文であると云ふことが便利となつて居るだけそれだけ又言語そのもの、研究の上に之が妨げをして居ることがどれ程あるか此の方面のことと致へに入れて支那語研究を云々しなければならぬ。

日本人の支那語觀察には字形の觀念が兎角先きに立ちがちである。従つて字形の印象が強く残つて音そのもの、印象は比較的強く残らない。此れは同文である爲めの弊害の一である。然るに字形の觀

念に普通乏しい西洋人などは丁度日本人の場合と反対で言葉の音の方を主にしてこれから這入つて行く。従つて四聲の別とか有氣音無氣音の別までが一々留意せられて行く。畢竟するに音そのものから這入る研究は言語の真相が得られ易い。之に反して紙面に見えて居る文字の方から這入る法は實に迂遠な方法であると云はなければならぬ。何となれば文字そのものは眞の音を有する生きた言語でないことは勿論であるから。

かくの如く觀察して來ると支那語の研究には飽くまで音そのものを本位にとつて進み、言語の根本的區別を明にし尙文字を洞察して言語を看破することに勉め、どこ迄も文字に欺かれぬ範圍に於いて文字を利用することを肝腎とするのである。而して之を取扱ふ方法は言語學なる科學的の方面から新なる歟を入れて先づ部分的に開拓を始めるのである。支那語研究の方法に就いて云ふ可きことは多々あるが以上は普通に陥り易い點の一つ二つをかい摘んで述べたのである。

最近の日本の世態は漢學物典の氣運に向つて來て、孔子教、漢文研究、漢字研究など一として唱導せられないものはなきに至つた。漢學の復興は古典學の普及に關聯するものなれば日本學海のため一大快事である。たゞ吾人の最も注意すべきは此の際此の支那研究が從來の漢學の謂でなく最近の文明的にして、科學的なる研究法に據れるものとならんことを希望する次第である。

## 第九章 言語上より觀たる支那本部

凡そ一國の領土内に行はるゝ言語の状態は頗る複雑であるのが普通である。假令、行政上では同じ主權の下に在るにもせよ言語状態の全然純一であることは、殆ど望まれにくい話である。近くは日本の言語に於いても、アイヌ語、琉球語、臺灣語、生蕃語などの言葉が、兎もかく、純日本語の外に考へられて居る如く、一國の言語は決して單簡に看過することは出來ない。併し、此のうちでも琉球語は流石に、言葉の性質上、今日の研究では、純日本語のうちに容れて考へられて居る。けれども、今若し、琉球が日本の領土内に這入つて居なかつたとするならば、琉球の言語は、依然尙琉球語として呼ばれ、従つて、研究上からも別の言葉の如くに觀られて居たかも知れないのである。かゝる誤りは事實に於いてまゝあることである。

今支那本部 China Proper 十八省の言語に就いて觀察するも、同様のことが云はれると思ふ。支那十八省の言葉は、貴州方面に散見する、苗族の言語を除けば、其の他は、大概所謂支那語である。其の支那語内部に於ける相違の有様は、如何に甚しくとも、それは單に所謂方言の相違と云ふ語で説明せられて居る。併し其の之を方言視する所以は全く合日所謂諸地方の方言なるものが、一個の北平政



府の下にあると云ふ行政上の考から出て居るのである。今假りに、廣州、廈門地方の土地が既に北平政府と行政上何等の關係なしとするならば、恐らく、此れ等の地方の言語は、支那語と云ふ名稱でなく、別の名を取つたかも知れないのである。吾人は廣東方言と安南語との關係が、必ずしも廣東方言と北平官話との關係よりも、遠いものとしては斷言しにくいやうに思はれる。若し安南語が北平官話に對して別の國言葉として取扱はれるべきものであるならば、廣東方言も亦同じく別の言語としての取扱ひを受けなければならぬ譯である。

尙類例を西部歐羅巴に就いて考ふるに、かの地方では、古來ローマンス Romance 語族と云つて古代のラティン Latin 語から、變遷發達して來た一語族があり。今も尙其の俤が諸地方に國語としてあまた残つて居る。即ち、

## 一、伊太利語

## 二、佛蘭西語

## 三、西班牙語

## 四、葡萄牙語

は其の主なるものである。而して其の言語の性質上、孰れも皆互に親近の關係を有して居る。若しかりに、歐洲の過去の歴史にして、かゝる諸邦國を建立せしめることなく、之を打つて一團となした一

大邦國であらしめたならば、恐らく、今の支那に於ける如く、此れ等は孰れも唯單に方言としてみなされて居るものに相違ないことと思はれる。要は西歐ではそれ／＼別に其の政府を立て、別の國と考へられて居るから、従つて其の言語も亦、宛然別種の如くに國名流に呼ばれて居るのである。又その方が便利なのである。

此れによつて支那本部の言語を観るに、丁度支那の場合は、歐洲ローマンス Romance languages の場合とは反對に現れて居るものと考へられるのである。

而して支那の方言的言語の相違は、伊太利語と佛蘭西語とに於ける相違も管ならぬ程の相違で、普通廣東人又は福建人が北平人に對して、言語上一見異國人の觀あるが如きも、一つは此の間の消息を自ら告げて居るものと察せられる。

次に然らば支那方言の著しい相違を有するものは、如何なるものであるかと云ふに、大略左の如きものである。尙之にその人口の概略を加へて置く。

## 一、浙江方言

四四、〇〇〇、〇〇〇<sub>人</sub>

(上海、寧波、溫州等の方言)

## 二、福建方言

二〇、〇〇〇、〇〇〇

(福州、廈門、仙頭等の方言)

三、廣東方言

二〇、〇〇〇、〇〇〇

(廣州、客家等の方言)

之に對して次ぎに方言でなく支那に一般に通ずる所謂標準語は如何と云ふに、それは、

北平官話

三四〇、〇〇〇、〇〇〇

である。此れを既に述べた佛蘭西、伊太利、西班牙、葡萄牙の人口を擧げて假りにそれが其の國名の示す國語を用ひて居るものと見なすことが出來ると次ぎのやうに觀察せらる。

佛蘭西語

九〇、〇〇〇、〇〇〇

伊太利語

三三、〇〇〇、〇〇〇

西班牙語

一八、〇〇〇、〇〇〇

葡萄牙語

一四、〇〇〇、〇〇〇

併し世界で最も多くの人に用ひられて居る言語はと云へば勿論支那語が第一で、次ぎは英語、

一、支那語は全體で

四億二千萬人

二、英語(英米)

一億二千萬人

である。尙屬地のものをも算入せば蓋し非常なものであらう。獨逸語などはゾット少なくて僅かに七千五百萬人を支配して居るに過ぎない。かゝる一般の有様を比べて見ると支那の言語は如何に多數の

ものに用ひられ居るか々わかる。且つ又その方言を、よし分離獨立したものととしても西班牙や葡萄牙などの一國語と人口の點に於て相譲らない有様であることを知るのである。

支那語は實にその文字が世界に比類なき特色を有して居るが如くに又言語そのものに在りても、是れ亦世界の諸言語族 (Families) から全然別系統のものとしてその生命を保持し來たつて居る。支那の政體が如何に變動し支那の文明が如何に進み行くとも四億萬餘の支那民族の用ふる所謂支那語は依然として世界獨歩の支那語であるのである。而かも此の支那語そのもの、根本的整理は未だ全く手が着けられて居ないのである。支那本部の言語統一の實現は蓋し前途頗る悠遠である。

### 第十章 現代支那語の趨勢

支那は二十世紀に於ける活動舞臺の中心となり。世界各方面の人目は悉く集まつて宛かも此の舞臺の上に在る。單に政治上と云はず實業上と云はず又學術的の方面に於いても駁々として之が研究の氣運に向つて居る。此の時にあたり支那に行はるゝ言語が學術上如何なる性質のものにして又此れが現時如何なる趨勢に向ひつゝあるかの大要に就いて其の事實並びに此れに關する學說の一般を觀察することは必ずしも予輩一個の利益にとゞまらざることゝ信ずる。

現代支那語の趨勢を観察するには、豫め順序として現時支那帝國に行はるゝ言語の種類は如何。又普通に所謂支那とはその内何れを指すものなるか、又その今日に至りて發達の徑路は如何等の方面を観なければならぬ。更に進んでは支那語がその類族を同ふする他の言語に對して如何なる發達關係を有するかとの外部的比較研究を必要となす。而して總べて此れ等の觀察方法は抑も又如何にある可きものなるか。從來此れに就いて西人は孰れの方面より觀て如何に論斷し來たりしか且つ其の當否は如何などのことに就き論及しようと思ふ。素より此れ等の問題たる孰れも東洋學上の大問題にして目下尙研究中に屬し、未だ確定する能はざるものなしとせず。されば茲には唯事實に基づきたる予輩の考案を提供するにとゞめ以て同趣味の讀者と共に大いに之が將來の研究を進め行かんことを期するのである。

### 一 支那帝國に行はるゝ言語の種類

支那帝國がその領土の廣大にして且つその人口の饒多なることは既に誰人と雖も齊しく認むるところである。然れども其の計類は全く精確を缺き殊に其の人口の如き或は三億三千萬なりと云ひ又は四億三千萬の上を越ゆなど、稱し諸説紛々として毫も一定せるところがない。更にその帝國を組織する各部に就きて其配布の状態を観察せんか、此れ亦その間少からざる差異を存して居る。今其の比較的

精確なる最近の調査に依つて其の面積と住民の數を對照するに

漢 土	三九六、八九六七 <sup>方里</sup>	四、〇七三二、七三〇五 <sup>人</sup>
滿 洲 (滿洲國建設以前)	九四、一七五〇	八五、〇〇〇〇 (今の滿洲國は三千萬)
蒙 古	三五四、二〇八四	二五八、〇〇〇〇
新 疆	一四二、五三八一	一二〇、〇〇〇〇
西 藏	一一九、九六八八	六四三、〇〇〇〇
(合計)	一一〇七、七八七〇	(合計)四、二六〇四、七三二五

となるを見る。然るに今茲に言語の地理學的分布に就いて觀察するに先づ其の主要なるものは

支那語	漢土一圓及び南滿洲地方南部内蒙古の一部
滿洲語	北部滿洲國黑龍江口烏蘇利地方及び吉林省の一部
蒙古語	蒙古一圓
トルコ語	新疆地方天山南路カシュガル
西藏語	西藏一圓 (前藏後藏)

の如く現にそれ〴〵其の各地方に於いて行はれつゝあるを見るのである。

かくの如き事實によりて攷ふるに所謂支那語は單に漢土即ち支那本部のみに行はるゝに非ずして尙

滿洲の南部を侵し滿洲語をして既に北方に減退せしめつゝあるの概がある。さなきだに本來支那總人口の九分以上を支配せる支那語は是に於いてその益優勢なるを認めざるを得ない。

同じく支那領域内に行はるゝ言語にしてかくの如き隆盛なるものもあれば又反對にカシュガル地方に行はるゝ土耳其語の一派の如き或は又雲南貴州ウナンクイチュウに於ける苗族の言語の如き其の他尙西南幽谷の間に行はるゝ幾多の諸種族の言語の如き實に微々たるものもある。總べて此れ等を算入し來れば其の數果して幾何なるかを知らない。然れども此れ等の諸言語は唯雜然として相互の間に何等の秩序關係の存するなくして散布せるが如きものには非ず。從來前人の研究が示すところに依つて之を概括すれば大體に於いて次ぎの二大言語系統に屬せしむることを得るのである。

一、印度支那語系統。

(支那語、西藏語、ビルマ語、苗族語、安南語等之に屬す。)

二、ウラル、アルタイツク語 (Ural Altaic) 系統。

(土耳其、フィンランド、蒙古、ツングース、朝鮮、日本、アイヌ等の言語之に屬す。)

支那帝國の領土内に行はるゝ言語の數は夥多なりと雖も二大系統の中に悉く抱括せしむることが出来る。今之を地理上に照して觀察するに於て天山南路と萬里の長壁とは宛かも支那領土二大系統言語の境界線たるものゝ如く支那の領土は爲めに言語上より南北の二部に區分することを得るのである。

即ち其の北半はウラル、アルタイツク語 (Ural Altaic) 系統に屬して其南半は印度支那語系統に屬する地域である。後者は單綴音の言語にして主として語詞の排列順序によりて文意を明かにせること普通の漢文に於て見るが如きものである。而してこの系統の言語には一般にテニヲハの存するもの極めて少なくその語尾の變化して語格を示すが如きものは全く之を缺いて居る。前者ウラル、アルタイツク語系統の言語は多綴音の語詞多くして——語の結合比較的固く且つテニヲハの發達せるもの多くして語詞關係を之にて表はすこと極めて密接である。

支那に行はるゝ言語にかくの如く二様のものゝあることは事新らしく云ふまでもないが、普通に所謂支那語なる言葉は即ち前者の系統に屬するものであつて此れが系統語族の優勢なる實に、全世界の人口の約四分の一を支配し亞細亞の面積の約五分の一を蔽へる一事によりても察することが出来る。即ち西の方ヒマラーヤの山脈及び天山を含みたる西藏の高原地方より東南に緬甸暹羅安南を抱含し北は甘肅より萬里の長城を傳つて遠く南滿地方に及び東は總べて太平洋の海岸一帯に至る間の廣大なる地域を占めて居る。此の一大言語族は上述のウラル、アルタイツク語族及び印度歐羅巴語族と共に歐亞に於ける三大語族の系統を鼎立せるものである。

言語の系統上より觀たる支那語族及びその地理學的分布は大略以上の如くである。次ぎに然らば茲に論ぜんとする支那語族中の代表語即ち所謂支那語は過去に於いて如何なる歴史的發達を經、以つて

今日に至りしか。その現代に於ける支那語は古代支那語に比較して如何に差異を有するかに就いて少しく述べて見よう。

## 二 古代支那語と現代支那語

支那上代の言語が時代の推移すると共に絶えず變轉して停止するところなきは歷朝の文獻に徴するも明かである。先秦の支那語は兩漢の支那語と違ひ兩漢の言語は六朝のそれと異なるところ多く唐宋以後のものに至つては更に一層之と懸隔の甚しきものがある。元來明初の俗語と今日の北平語とを比較するだにその間少なからぬ相違の點あるを覺ゆるのである。今茲に稍古文に近き言語形式を有する文章語即ち今の所謂時文なるものを標準にとりて之が今日の北平官話と比較對照してその間如何に相懸隔するものあるかを示さんに、例へば

一、時文。昨有自旅順歸來之某將校云前沈之敵艦多半起拽。

官話。前幾天有打旅順回來的一個將校據他說已經沈了的俄國兵船打撈了多一半兒還可以用得。

(昨日旅順より歸來せる某將校の説によれば旅順口沈沒敵艦の過半は引揚げ使用の見込みありと云ふ)

二、時文。營口之氣候日見其寒已至結氷之際故運送之差船於上月抄截止在遼陽我冬營軍各船一切預備頗稱完備於營口糧草薪炭之類堆積如山火車每日數次運此等物件北進。

官話。營口的天氣一天比一天冷了、快到了凍氷的時候見了所以運送陸軍的差船以上月底爲止在遼陽的冬營我們的各樣兒船所有預備都很齊備在營口的糧草柴炭堆成了出了火車每天好幾回往北運這些個東西。

(營口の氣候は日を追ふて酷烈將に結氷の時季に迫りたるを以つて陸軍の各御用船は去月末を以て最終航となしたり、又遼陽に於ける我冬營軍の諸船準備は總べて缺くる所なく且つ營口には米薪炭の堆積して山の如く汽車は毎日數回は等の品を乗せ北進しつゝあり。)

以上は單に文章法上の比較に過ぎざれども尙之を音韻の方面より比較すれば更に相違の甚しきものがある。時に或は今日の音韻にして古來の傳を傳ふるものなしとせざるも一般には其の音著しく變化して居る。敵艦の古音テキカン (tek kam) が今日テイシェン ti shien とされる一事によりても推察することが出来る。

其の他單語の方面より觀るもイー i (已) がイーチン iching (已經) となりツァイ tsai (際) がン一ホッ shi hour (時候兒) となりロコ (故) がンローイ soi (所以) となりし現象の如きその外過

去を示す助動詞として例へばチンラ chinla (沈了) タウラ tao la (到了) に於けるラ la (了) の發達せるが如きその他動詞の目的格を示す助辭の發達せるが如き其の古代語と言語状態を異にせるもの多き殆ど枚舉に遑あらず。

支那語がその言語の性質上單綴語 (monosyllabic language) なることは從來最も確かに認められ且つ現時も博く行はれたる説である。吾人亦此れが根底の動かす可からざるを信するものなり。然れどもこは主として古代の支那語に就いて適用し得可くも、現代支那語の如きは頗る之と趣きを異にするものがある。上來の例によりても見らるゝ如く現時の支那語は單綴音の固々別々に孤立するもので漸次減退に傾きつゝある。之に反してその語法關係を示す助辭の多く發達せるが如き、動詞の時を示す形の生ずるが如き、又離れがたき二綴音又は三綴音の語詞の頗る多く發生し來たれるが如き總べて此れ等の現象は殊に支那の俗語に於いて多く認めらるゝところのもの。豈唯に偶然の現象として看過せらる可きものであらうか。吾人は之によりて現代の支那語の大勢が那邊に向ひつゝあるかを察知し得るのである。

斯の如き現時支那語の傾向は本來の純單綴音の状態を脱して漸次多綴音即ち Polysyllabic の言葉に近づかんとしつゝあるものゝ如く見ゆ。こは支那民族と北方民族との歴史的接觸の結果にもよれるか。一般の場合より云へば全く性質を異にする兩言語は如何に接觸を切にすると雖も其内部の語法上に此れが影響を及ぼすが如きは極めて稀なる現象なりと云ふべきである。然れども支那に於ける現代の言語がかくの如き塞外の言語の佛を呈せるものなるは宛かもかの土耳其又はマジャール(匈牙利)の言語が本來ウラル、アルタイック語族に屬して而かもその歴史的關係より歐洲式の單語を帶ぶるに至りしが如き類例にてもあるか。將た支那語内部の自然的必要に迫られたる結果にてもあるか。其の原因の孰れに在るかは暫く措き今日の支那語殊に北平官話が頗る多綴語の色を帶び且つウラル、アルタイック語に似たる性質をその一部分に取り入るゝに至りしことは争ふ可からざる事實である。然るに支那語に非ざる他の一般の單綴語即ち安南暹羅西藏などの言語の趨勢は如何と云ふに吾人は之に關し未だ十分なる討究を試むる能はざるを以て茲に確言する能はずと雖も少くもその音韻上の點に於いては此れ等の諸單綴語が滔々として北方支那語の形式に向つて進みつゝあることは是れ亦拒む能はざる事實である。されば現代の支那語に於いてその最も發達せるものは即ち北平官話に在りと云ひ得られる。

### 三 西人の支那語觀

從來西人にして東洋學を研究せし人々その他一般泰西の學者が支那語に就いて抱きし概念は之を大ざの如くに概括することを得べし。即ち支那語は世界の諸言語中最も發達の程度に於いて幼稚且つ單

純、其の語詞をならぶるや孤立的 (Isolating) 其の構造や千遍一律の單綴語なりと云ふに在る。けにや語尾變化の豊かにして且つ語法の形式の多き屈折語 (inflectional language) に慣れたる西人が眼には支那語がかくの如く映するは怪しむに足らざることなりとす。事實又支那の或る言語及びその同語族の間にはかく評言せられ得べきもの決してなしとはしないのである。

然れども由來西人の東洋觀察には往々にして純粹の學術的研究態度の外に多少の色眼鏡を以つてする傾きがある。有體に云へばかれの自尊主義の結果なるが動もすれば東洋の事物を視くびらんとするの感情のあるもの、如く觀らるゝものあるは余輩一個の僻目か。見よや、支那文明の根本的起源に於けるが如くかれ等は之を以つてあながちに西人が祖先の故地たるカルデア、アシリアの文明に牽強附會せんとし黄帝を以つて *Balk* 種族の東漸なりなど、信仰し而して曰はく、支那民族 (Chinese) の如き黃人種を以つてしてはいづくんぞかくまでの高度の人文を胚胎せしむることを得んやと。直言すれば漢人の祖先は西方に出で東亞の文明は西方文化の餘光に過ぎずとのことを説かんと欲するもの、やうである。こは支那文明起源に關するかれ (T. d. Lacouperie) 等の見解である。

次ぎに然らば支那の言語に對するかれ等が見解は如何と云ふに此れに就いてはかくの如き本末關係は説かず、又説かんとするも説き得ないのである。然りと雖も彼れ等はその自己と同人種の用ふる言語は之をむげに揚げて而して支那語は全く言語としては最低度の發達語なりとして呼んで居る。而し

て彼れ等の用ふる言語即ち屈折語は如何なる歴史的沿革を経たるかに就いて説を立て、曰はく『こはウラル、アルタイック語式の言語即ち添着語 (agglutinative language) が發達を重ねて始めて到達し得たる言語状態なり然るに此の添着語は素と孤立語即ち支那語式の言語の發達して成りし言語なり』と云ふ。畢竟するに彼等の此の言語階級の立て方は支那語を以つて言語發達の最も低き元始的狀態にありとするのである。即ち

第一段 孤立語(單綴語)……………支那語

第二段 添着語……………蒙古滿洲

第三段 屈折語……………印度歐羅巴語

にして此の見解は獨逸の言語學者シュライハー (Schleicher) の主唱以來非常に多く行はれたる説にして今日の言語學と雖も尙此れが影響を蒙れること幾何なるかを知らないのである。

又一説としてはその高度の文明と言語とを混同して文明の程度により言語の上下を律せんとするものあり。然れどもかゝる觀察は言語問題に非ずして文明の問題たり。故に茲には論及せざる可し。

西人の觀たる支那語は大略かくの如し。今左にこれが觀察の當否如何に就いて少しく論述し併せて現代支那語の真相が如何なるところにあるかを觀察して見ようと思ふ。

凡そ言語にはそれ、其の特色とするところがある。歐洲の言語は多く語法形式を表彰し『曲げ』

と語尾變化を具有するに反し支那の言語は總べて之を有せずして孤立的 (isolating) の場合多く主として其語序 (word-order) に依るを以つて本來の特色として居る。語法形式の洋語に存するは洋語の特色とするところである。然るに本來言語の根本的性質を異にせる支那語に向つて之を求むるが如きは餘りに形式を重く視たる見解なるが如し。語法形式を有する故にその言語が最も發達したりと主張するが如きは宛かも『こそけれ』の形を存する故に古代の日本語が雅正なりと主張すると同じく、共に餘りに形態に重きを置きたる論である。支那語に於いては歐洲語族のそれの如く語尾形式を表はすの特色なく主として語序の上に結合状態によるかさもなくば助辭を發達させ此れによりて言語的表彰の目的を達せることかの語尾形式を有する言語と相譲るところはない。唯支那語にはその性質上單綴音の同音語の數多あるとのみは争ふ可からざるも、然れどもこれとてもその綴音を増加して以つて漸次多綴音の語詞に變形しつゝあるではないか。その他又四聲有氣音發達によりて區別せらるゝの特色がある。兎も角く支那語が語尾形式によらずして而かも尙言語表彰の目的を遂げ得たるはその最も著しき特色の一つとして數ふべきものである。又以つて言語發達上最高度の域にあるものと云ひ得べきが如し。然れどもかくの如き論法は單にその特色を以つて直ちに優所となすに過ぎずして宛かも西人の最高言語説の筆鋒にさも似たみかたである。

要するに歐洲語は歐洲語、支那語は支那語、各其の特色とするところを別にして居る。然るを之を同一視して比較を試みその發達程度の高低如何を云々するが如きは言語の根底を混同したる觀方にして又言語形式の一方に餘りに重きを置きたる觀察なりと云ふ可きである。西人がむげに支那語を最低度のものとして觀たるが如き一つに全くその形態上の觀察のみに偏せしによるものである。

今茲に西人が以つて最高度の發達を遂げたりとなす歐洲の言語を觀るに必ずしもその總てが語尾形式の表れたるものゝみに非ずして、例へば近代の英語に於いても見らるゝ如く殆どその支那語と選ぶといふ如き語序 (word-order) の性質を帯びつゝあるものである。即ち單に名詞動詞を排列するのみにして其の排列の順序によつてこそ意義の關係の知り得らるゝも語尾形式の如きに至つては何等の變化なきものあるが如き其の一例なり。又支那語に在りても近代以後助辭の發達頻りにしてさながらアルタイ語の形式を帯びつゝあるものあり。かくの如き言語上の新事實は嘗つて西人の揚言せしところの言語の發達階級の順序と齟齬するものがあるやうである。即ちかれ等の所謂最低度の支那語は發達して進化しつゝあるが如く、又その自ら最高度の言語となせし歐洲語 (英語) はその所謂最低度の方に向つて退化しつゝあるが如き譯ではないか。實際の言語の形態は實にかくの如く常に動いて停止するところを知らないのである。然れどもかゝる移動は言語循環なる更に原本的の原則に基因せるものにして其の間退歩進歩など云ふ區別あるの理はないのである。



## 四 支那語の言語發達上に於ける位置

かゝる一般的言語の趨勢は常に循環してやまない。然るに動もすれば歐洲言語を總べての標準にとり而かもその單に形態上のみの側より觀察して總べての言語を同一の形式の下に律せんとする。是れ支那語發達の最も低しと見られたる所以である。然れども常に言語は變轉して同一状態に固定するなき性質のものなる以上は形態上の觀察を離れたる別の方法によりて觀察せらるゝところなくてはならぬ。於是言語の心理學的觀察の必要を見るのである。言語の心理學的觀察は最近言語學研究法の一つとして既に屢々適用せられ言語問題の解決に資せらるゝものは多い。この心理學上より言語を大觀する時は歐洲の言語も支那の言語も其の發達程度に於いて何等の高下の差あることはない。此の考は獨逸の學者の一部には既に唱へられて居たことがあつたのである。それ故今若し言語と文字の發達關係を觀察するとせんかその語法形式に富む言語のみが美しき文字を發達せしむると云ふが如き理由決してあることなくかゝる形式の全然なき支那語と雖も梵文學歐洲文學などに遜色なき世界有數の文學を發達させたることあるは茲に贅言を要せずして明かである。それ故言語の語法形式の有無如何の如きは必ずしも茲に言語の發達程度を規定し得る標準とはなり得ざるものであると云はなくてはならぬ。かくの如く支那語を觀察して其の言語の表彰と心理的作用との關係を窺ひ且つその語韻組織の如何

に複雑巧妙に行はれつゝあるかを思ひ併せて最近支那語の趨勢を觀攷する時は轉た支那語が他の單綴語に比して優に其の特色を發揮しつゝあるかを認めなくてはならぬ。其の言語としての發達の位置が印度歐羅巴語に對して如何又ウラル、アルタイック語に對して如何などのことは元來比較する能はざる問題である。若し之を他と比較せんとするならば心理學的言語の研究方面より觀攷することを忘れてはならぬのである。

要するに支那語はその形態上よりすれば一般の歐洲語の如くしかく語法形式を有することなしと雖も尙亞細亞に於ける其の同語族中最も高度の發達を遂げ諸種の特色を外形上に表し、更に之を心理學的方面より觀察すれば世界の諸言語中發達程度の高きこと歐洲言語に匹敵す可く而かも支那語は語法形式のなき範圍内に於いて殆どあらゆる總べての發達を遂げ世界諸地方の言語中優に其の獨特の性質を發揮して一大異彩を放てるものである。吾人が支那語の發達位をかくの如く觀るのは心理作用と言語との關係上より觀た見かたである。若しそれ音韻發達の點を標準に世界の諸語と比較するならば恐らく印歐語と雖も支那語の右に出づるものはあるまいと斷言する。唯字面にそれが見えて居ないだけである。

## 第十一章 支那年號に現れた思想

漢の武帝（西暦紀元前一世紀）の時、始めて年號が設けられてからは、天子の御代は、一々必ず其の年號の何年、と云ふ呼びかたが行はれるに至つた。古くは、素と惠王の三年とか、襄王の二十五年とか、と云ふやうに、天子即位の年を標準にして數へて、呼んで居たのであるが其の習慣が、爰に全く改められたのである。

支那に於ける此の年號の設置は、引いて、日本、朝鮮（新羅の法興王の二十三年以來）南詔國、交趾、安南の諸方面にも其の影響が及んで居る。併し此れ等の地方では、其の設けられた時代が、著しく後世のことに屬して居る。抑も年號なるものは、後の學者をして其の史的事實の年代計算の上に、少なからぬ煩を感じしめるものであつて、かの西暦紀元の、數字的にして、一目瞭然たるものに比較する時は、愈益と其の煩はしさに思ひ至らざるを得ない。けれども、吾人は此の年號の煩を以つて厄介視せず、寧ろ此れに依つて、支那並びに其の影響國を通じて、其の思想の一斑を、窺ふ材料として見ることが出来る。

第一、由來、總ての事物に、形式的のことを好む漢民族が、此の年號の設置を始めたこと云ふこと、及び、爾來頻繁に、改元を行つて、年號の名稱に汲々苦心し居たることの二點は、是れ、支那人の特性の最も明かに現れて居るところであつて、支那人はかやうなことに特に非常な *interest* を持つて居るのである。

第二、歴代の年號には、種々の言葉が用ひられて居るが、其れに依つて、支那人の國民思想が窺はれる。年號は、單に言語としての意味を有して居るばかりでなく、又文字の形にも餘程關係がある。つまり、年號の名前は言葉と文字の兩面を具へて居るものであつて、年號の研究は、此の側から、頗る興味のある觀察が、出来るのであらうと思ふ。

年號の形式は云ふまでもなく普通は二字で現されて居る。元逆（漢）、大業（隋）、貞觀（唐）、洪武（明）、康熙（清）の如き其の一例である。けれども時としては、始建國（王莽）、中大通（梁武）、中大同（梁武）の如く三字なるものがあり。又、建武中元（漢光武帝）、天冊萬歲（唐武后）、天瑞景星（五代南詔）、政隆寶應（宋交趾李天祚）の如く四字なるものがあり。甚しきは貞明承智大同（唐南詔隆舜）天授理法延祚（即天授孔法延祚）の如き、六字の年號を有することもある。かやうに年號は字數に於いて、又其の文字に於いて、古來まち／＼に現れて居るが、併し其の年號なるもの、裏面に包含せられて居る意味は、蓋し、大概は一様の型に容れることが出来る。即ち、型とは、『安福』『瑞祥』『長慶』など、云ふやうな類の思想である。

支那人の世界観、理想、希望は總べて悉く、現世の幸福と云ふことにあつて、其の範圍以外に出ることは絶えてない。其れ故、年號の上にも彼れ等が選り採りたる文字を見ても、亦成る可く幸福に關係の深い文字のみを用ひて居る。従つて其の類の年號が最も多いのは決して奇とするに足りない。例へば、

『安』の字について、

漢安、建安、永安、太安、咸安、大安、隆安、崇安、興安、天安、廣安、始安、長安、唐安、西安、承安、政安、仁安、文安、保安、平安、久安、正安、師安

『和』の字について、

征和、綏和、元和、章和、永和、建和、光和、太和、咸和、陸和、崇和、義和、延和、承和、景和、興和、天和、中和、大和、乾和、統和、重和、至和、政和、宣和、泰和、致和、保和、安和、長安、康和、寛和、正和、養和、人和、明和、貞和、藏和、上和、風和

などがある。其の他明、清、貞、平、康、昌、嘉、延、元、豊、興、武、久、統、治、聖、慶、定、祐、徳等の文字は殆ど常に用ひられて居る。併しこれ等は、すべて幸福の意味を現す無形の語から取つた文字であるが、更に尙、有形の名詞に因んだ名稱も少なからずある。

支那人が年號に用ひた有形の名詞は、其の文字上では複雑多様であるやうであるが、其の實決して

多様ではない。自分の観るところでは、多くそれが動物に限られて居て、且つそれが、瑞祥に關聯して、傳へられて居るものばかりのやうである。

年號に現れた動物は鳥、獸、蟲類などで、其の瑞祥と認められたものが用ひられて居るのである。

即ち、鳥類では、

鳳——鳳凰(晋李宏)、鳳翔(夏赫連勃々)、鳳鳴(即蕭銑鳴鳳)、天鳳(玉莽)、鳴鳳(隋高宗)

雉——白雉(日本孝徳天皇)

鳥——赤鳥(吳大帝)、白鳥(隋向海明)、朱鳥(日本天武天皇)

雀——白雀(後秦姚長)、朱雀(唐渤海、日本天武天皇)

鴻——鴻濟(梁新羅吳興王)

獸類では、

寅——壬寅(西涼李高)、庚寅(明裔魯王)

麋——神麋(北魏太武帝)

亥——太亥(不詳)

象——元象(東魏孝靜帝)、大象(北周靜帝)、寶象(交趾)

丑——辛丑(西涼李高)、丁丑(隋竇建徳)

## 獸——神獸(北魏萬俛奴)

などの如き文字が用ひられて居る。尙獸のことに關係のあるもので、次ぎの如き文字を用ひた年號を見る。即ち、

## 狩——元狩(漢武帝)

魚獸の外に、動物で爰に用ひられて居るのは、龍及び龜である。古來支那人の動物分類の上では、龍は長蟲の一種として居る。言語上、龍 *lung* は、所謂龍、又は馬の義である。龍の古音は、*lung* 隆又は *lung* で昇騰するの原義があるやうに思はれるが、兎も角其の實物の何たるかは不明である。清國の國旗に見えたる龍、其の他雲龍の時の龍は、單に支那人の想像上のものに過ぎぬので、それが有形のものとして、感ぜられるに至つたものかも知れぬ。茲に龜と同じ類にまとめて、云ふのは別に明確な標準があつて、一緒にしたのではない。其の實例は

龍——黃龍(漢宣帝)、青龍(魏明帝)、黑龍(晉張官)、神龍(唐武后)、景龍(唐中宗)、白龍(南漢劉襲)

龜——神龜(北魏孝明帝)、寬龜(日本光仁天皇)、白龜(日本聖武天皇)、文龜(日本後柏原天皇)、

元龜(日本正親町天皇)、

附、龜は日本で鶴龜と並べ稱する程であるが今日支那では非常に此れを嫌ふ。従つて其文字までを

も蛇蝎視して居る。

の如きものである。

年號は、以上動物に關するもの、外に、時としては、植物(五穀)、礦物などに關係のあるものもないが併し之を動物に比較すると非常に少い。

壽福、瑞祥をのみ年號稱呼の骨子とせる支那人が、此れ等の動物を取り用ひて居ると云ふは、裏面に於いて支那の傳説、信仰の上に於ける此れ等の動物の位置が推察せられると思ふ。否實際に於いては動物以上のものとして、之をあげ、唯單に其の有形の Symbolic のものと考へて居るものかも知れぬ。日本などでも、其の影響をうけて、鳳の鳥、雉、鶴、龜などは、今に縁起のよきものとして傳へられて居る。之を要するに年號の歴史的研究は之に依つて其の國民の思想傳説の一斑を示せる手懸りを與へて居るものと思ふ。

更に一步を進めて考ふるに年號はその意味に於いて國民思想の發現であると同時に又他方より之を見るに、既に吾人東洋人のみが此の年號を古來特有して居ると云ふことが是れ又世界に異彩を放てる所である。實云へば煩雜な面倒なものではあるが兎に角東洋紀元の常に小時期を劃して居るのである。而して此の年號なるものはそれ故ローマ字に書かるゝときはその意味の半を没却してしまふわけである。字と、音と、意味と三者揃つたものが年號の本性でそれに古來前代からの吉凶の跡を徴して、

なる可く凶事のなかつた時の年號に近いものにきめる。是れ蓋し開元の常法である。明治を改めて Meiji とするはローマ字を読む人の便利と云ふだけであつて、是に依つて明治の年號が遺憾なく書き表はされて居るのではない。若し世界的のことを楯にとるならば、むしろ meiji とするよりも一々西曆紀元年數を掲ぐる方が遙かに世界的であると思ふ。つまり年號の妙味は從來の人の考へではたしかにその字形そのものの中にこもれるものとせられて居たのである。

## 第十二章 支那語族に於ける狗

印歐言語學では家畜に關する言葉の分布に依つて、其家畜の地理上の分布が推察せられ、引いては又古代民族（種族）の移動交通の一般が臆測し得られるとの事である。吾人は嘗つて先輩渡邊（良）學士が『各國語に於ける馬』の研究端緒を公けにせられしを見て特に東洋方面に就いて少なからぬ興味を引き起した。吾人は今茲に支那語族に於ける狗の分布に就いて簡單なる臆列をなして見ようと思ふ。但し自分は之に依つて民族の古代に於ける移動のこと迄を云々するのではない。

先づ支那語には古くから『狗』及び『犬』と云ふ語がある。

狗 狗は孔子曰狗叩也叩氣、吠以从守犬句聲。

犬 犬は狗之有縣蹄者也孔子曰視犬之畫狗也。

狗の字に於ける牙（獸偏）は素と犬の字で句の旁フツは唯の音符たるに過ぎぬ。即ち支那の各地方で狗のことは次ぎの如くに云ふて居る。

北平……………kou  
 南京……………kou  
 厦門……………kau（俗音）、讀書音は kou  
 廣東……………kau

而して犬の字は昔し極古くは如何に書いて居たかと云ふに、孔子の言葉にも見えて居る如く、その實物のまゝの象形文字である。彼の吉金文に現れたるもの即ちこれならざるはなし。

爾雅に依れば狗とは犬の毫毛の未だ十分ならざるもの、如くに見えて居るが、説文の方には狗の字の表はす言葉の方が犬の字のそれよりも古いやうに見えて居る。吾人も亦文字發達の順序は別として言葉其のものからすると、狗の方を古い語と考へる。少なくとも支那語族の言語上の比較は確かにさう思はしむるのである。

カ

犬の字

固より同語族中の此の語が總べて全然同一音也と云ふのではない。支那語は其の特質として他部族の語でよく二綴語と呼ばれつゝある語でも、支那語にうつし取る時には單綴音として、取り入れる傾

向がある。北方蒙古語で『馬』のことをモリン (molin) と云ふがこの言語を支那人は唯のモ (mo) と云ふ語で寫し取つた證據は春秋以前の文獻に澤山見出される。詩經の語にも馬はモ (mo) 又はボ (bo) の語で現れて居る。之をマ ma と讀むに至つたのはづつと後の時代である。韓語のマル (mal) は支那を經ないで北方から直ちに傳へられたものである。

さて然らば支那語の狗 (kou) のことをば他の支那語族 (單綴語族) では如何に呼んで居るかと思ふに、

- 西藏の文語……………khyi
- ホルバ語 (Horpa)……………katak
- ギヤミ語 (Gyami)……………kou
- ギヤルング語 (Gyarung)……………khi
- マニヤーク語 (Manyak)……………kshah
- ネパール語 (Nepal)……………khi
- キラントイ語 (Kiranti)……………kochie
- ロドング語 (Rodung)……………khii
- ヅミ語 (Dumi)……………khibu

- カリング語 (Khaling)……………khleh
- ベンガル語 (Bengal) 方言……………kai
- 緬甸文語 (Burma)……………khwe
- モン語 (Mon)……………koli
- 苗族一般語 (Miaotsze)……………le
- 安南語 (Annam)……………sho
- シャン語 (Shan)……………ma
- アホム語 (Ahom)……………ma

の如き有様である。尤も苗族暹羅安南方面では別系統の語で行はれて居る。

此のうち苗族語の le は臆測するに古音は klie 又は hie の音であつたものが更らに語頭音を失つて le となつたものと疑はれる。但し此れは然りと斷言するのではない。兎に角上述の k または ksh を語頭音とせる語は上代に於いて支那語の狗 (kou) と聯絡のありしものではないかと思ふ。揚雄の方言に據れば南楚地方に杜狗と云ふものが見えて居るが果してこは狗の種であるか疑問である。

要するに亞細亞に於ける單綴語族中安南方面を除き其の他の部分即ちヒマラーヤ山中ネパール地方より北、西藏、東支那諸地方に多く同一系統の下にある語が見出される。——固より尙詳細綿密なる

比較研究を要するは云ふを待たないけれども——然るに吾人は更らに一步をすすめて北の方異民族の語より西の方遠く進んで歐洲諸地方の語を散見するに尙言葉の外見の似寄を見出すのである。

土耳其語 (Turk) .....kenpek

マジャール語 (Magyar) .....kutya

フィンランド語 (Fin) .....koira

アラビア語 (Arabia) .....kelb

シルカシアン語 (Circasin) .....khah, koy,

其の他滿蒙地方では.....inda khou

滿洲語.....

蒙古語.....nokhai

此れ等の諸語はウラル、アルタイ語族で支那語とは全く語脈を別にして居る語である。尙印度では

梵語 (Sanskrit) .....kukkura

と云ふのである。

吾人は以上の諸材料よりして複雑なる音の形式が強いて單簡なる支那の kou となつたと云ふのではない。又西洋に於いて、

近代英語の dog が

瑞典語の dogg

アングロサクソン (A. S.) の docga

中世英語 (Mid. E.) の dogge

に關係あるが如き事を證據として推論するのでもない。唯吾人は以上の如き言葉の分布は偶然のものであるか否かを疑ふのである。吾人は動物の汎稱 (general name) が多く其の啼き聲に依つて自ら偶然的一致をなして居るを見る。又支那の狗、犬の兩字に就いても、之によつて解釋の餘地を與へる如く此れ等諸地方の言葉に於いても果してかゝる解釋がなし得らるか否か、此れは動物分布の方面から逆に調査せられなければ十分のことは申されまいと思ふ。唯茲には此れ等諸地方語に比較せらるべきものは支那で云ふ犬の子の義に用ひて居る『狗』の方の字が其れにあたると云ふ考への一端を示したのである。

### 第十三章 支那音譯外國地名考

支那の文字で、外國の言葉を精密に音譯すると云ふことは、頗る困難なことである。普通の音文字

と違つて、支那字は、その字形の上に訖度意味が露れて来る。併し、元來音譯なるものゝ目的が、其の字の音で以つて、原語の音を寫すに在るのであるから、暫く其の意味の方面のことは、抜きにして考へなければならぬ。素とより意味と音との兩方が共に、同時に寫されて居ることもあることはあるが、其の類のものは茲に省略して置いて、純音譯のものに就いて、少しく觀察して見よう。

支那人が、外國語の音譯は既に餘程古く、先秦の文獻に早くも、少なからず現れて居るが、其の著しく多くうつされるに至つた時代は、今から約二千年以前の前漢の時代である。即ち、司馬遷の史記殊にその西域に關する傳、例へば大宛傳などの如き部分に、色々の音譯が散見して居る。降つて、前漢書、後漢書、及びそれ以後の史籍、又はつと降つて唐代から、明代あたりにかけての旅行記、航海記などにもたくさん音譯が見出される。其の他佛典に關するものにも、音譯の頗る多く含まれて居ることは云ふまでもない。

凡そ音譯は、同一の地名でも、時代に依り、人により、又其の原語の模様に依つて、必しも支那の方では同一に音譯せられては居ない。無論時として、歴史的のうつしかたを襲用したりなどして、同一の法式を慣用することもあるが、普通は大抵色々に書き代へられて居るのである。例へば

- 一、白 達 (Baghdad)  
 二、八吉打 (Baghdad)  
 バグダード

三、報 達 (Baghdad) gh を m に轉じたる音譯也

- 一、鉢鐸創那 (Badakhsiana)  
 二、八答黑商 (Badakhsiana)  
 バダフレンシャン

の如きものである。即ち音の上では、互に相類似してゐても、文字其のものは、孰れも皆非常な差を有して居るのである。併しその音譯たるの目的に向つては同一である。

音譯は又必ずしも地名ばかりでなく、各種の外國語を自由にうつすのである。即ち其の一例をあげるならば、

- アルサク朝——安息 (Arsakidae)  
 カタイ族——契丹 (Cathay)  
 キルギス族——吉利吉思 (Kirghiz)  
 フビライ——忽必烈 (Kublai 又は Khubilai)

かやうに地名であると、否とを問はず、支那文字を以つて、外國語をうつすことは、早くから行はれて居た。吾人は此の音譯の字の、宛てかたの有様に依つて、其時代時代の字音を、窺ひ知ることが出来るのである。全然其の音譯のみの手懸りだけで、直ちに其の古音を否定することは、勿論速断と云ふの外はない。尙他に種々の方面からも、觀察して、きめなければ、十分でないのである。が併



し音の歴史的の状態は、先づ音譯に依つてさぐると云ふが、其の研究の一法となつて居るのである。例へば安息の息の字は、今日の北平音では、*hsi* の音で知られ、*K* の入聲は全く缺けて存しないのである。けれども、漢の時代に其れが *hsia* (安息の息) の音を寫すに用ひられて居た事實がかくの如くに、ある以上は、畢竟、古くより息の字が *K* の入聲たりしことの、一つの傍證となるわけである。然るに、づつと降つて、元の時代になると、忽とか、必とか、烈とか *T* の入聲音は、消滅して *drop* した。其の爲め音譯の方面にも、入聲でなく、普通の母音で終る音として、用ひられて居ることがわかるのである。必ずしも總てがさうと直ちに斷定することは出来ないが大體は於いて此の類の觀察が、認められるやうに思はれる。

次に然らば現在の音譯、地名に於いて字音が如何に現れて居るか。今最も普通に知られたる外國地名を取つて少しく其の音を原語に對照して見よう。

### 一、華 盛 頓

米京ワシントンを、普通音譯して、華盛頓とする。日本に於ける華及び盛の音には、決してそれく *Wa* 及び *Shing* の音は存して居ない。然るに、此れが支那北平音は、

華は *hua* (*Wa*) …………… 盛は *Sheng* (*Shing*)

である。頓は日本と同じく *ton*。それ故、今日の支那音からすれば、*Washington* が華盛頓で音譯せ

られて居るのは、道理に近いわけである。

### 二、和 蘭 陀

云ふまでもなく、西洋にオランダとか、カラダとか、云ふ國名があるわけではないが、普通譯して、和蘭、又は和蘭陀、又一つに荷蘭陀ともする。其の語頭の音が、和、荷、孰れにもせよ、今の支那音では、*ho* の音である。さればこそ原名 *Holland* の *Ho* の音が、此れでうつされて居るわけである。

### 三、西 班 牙

今のスペインの國名が、西班の二字で、假りに音譯せられたとしても、一見、此れで十分であるやうに思はれるであらう。西の音は *hi* で、班は *pan* であるから。然るにあとに牙の字のあるのは、如何なる理由に依るかと云ふに、此れは、素と無用の長物の添へられたものではない。且つ牙の今の音は *ya* でなく、*ya* であるなどのことから、考へて見ても、西班牙とはスペインなる原語の音譯ではなく、イスパニアなる原語のうちの、スバニアの部分で、此の三字で、うつしたものであると思はれる。語のアクセントが、バのところにある爲め、最初のイの音が、明かでなく、従つて音譯に於いても語頭のイはうつされなかつたものであらう。

### 四、諾 威

ノールエイを音譯して、諾威とする。素と諾には、nakの音とdakの音との二様の音が、考へられるが、諾威の場合には、其のnakの音のうつり轉じてnoとなつたものを茲に用ひたものである。威は、ウエイ即ちweiである。それ故諾威とかくのはNorwayの音譯として適當なものである。

#### 五、埃 及

埃の音はアイ、及の音はキフの入聲。然るに此のアイキフで、エジプト Egypt をうつすは、一見奇なるやうではあるが、併しアイの音は、地方によりてエとなり、又音韻の自然の傾きからも、エの方につり轉ずる、而して及の音は、支那南方地方ではキツブ kidであるから、此れを以つて、EYPを寫したものであらう。其れ故、結局埃及とはEYPまでを音譯したものと考へられるもので、最後のTは畧してうつきなかつたのである。音譯した支那人は、恐らく南方のものであらう。

かやうに、現在用ひられて居る支那音譯も唯之を今日の日本音のまゝでは、其の音譯たるの實が、明かに知りにくい。けれども此れを支那の本音に引きあて、對照して見る時は、原語なる外國語と偶然ならぬ一致の存するものがあることを、發見するのである。此の點を明かにしないで、すべて日本音で讀んでしまふと、支那の音譯の大部分は、恐らく無意義に終るわけであらうと思ふ。

たまには獨逸 (Deutsch) とか、浦鹽斯德とか云ふやうな、日本で作つた音譯もないではないが、支那の音譯を見る場合には、必ず支那本土の字音を先づ確かめて置くと云ふことが必要なのである。何

にせよ外國の普通の地名を支那では一々むづかしい漢字に音譯する。此れを一々教育される支那の兒童は定めし大變であらう。

### 第十四章 「府」の語源に就いて

今日『東京府』、『總督府』、『統監府』など云ふ場合に、『府』なる言葉が用ひられて居るが、此の語の由來に就いて、少し、その過去の歴史を通覽して見たいと思ふ。併しその言語の方面の觀察に這入る前に、先づ此『府』と云ふ文字の、構造を見て置く必要がある。

楷書で『府』と書かれて居る此の文字は、その楷書體となる前に、爰に擧げたやうな篆書體で書かれて居たのである。即ち府は广と付との二字の、複合せられて出來たものであるが、

府

そのうち广は古代支那人の思想で、家屋の外廓を象つたものである。而して

『付』の字は、此の家屋とは關係ないもので、全く此の『府』の字の現して居る言語上の音をうつして居るものにか過ぎないのである。それ故文字として此字を觀る時は固より广の部分が大切であるけれども、併し言語上から云ふ時は、『付』の部分の方が大切となるのである。而してその『付』の音は云ふまでもなくFuである。

『付』*fu*の音を有する『付』の字は、説文の九の下部に依ると、府は文書の藏也とある。一體、此の*fu*と云ふ音が現す言葉は、如何なる意味を有して居るものであるかと云ふに、古代では『府』の音を以つて『腑』の字に代用して居たことがある。例へば周禮の疾醫の部に、胃、小腸、大腸、膀胱との六腑をば、六府と書いて居る。又禮書などに依ると、府は庫の字に對して用ひ、寶藏財貨之處の義でも使つてある。又古代財幣を掌る官を、府と稱して居たともあつた。併し今日の如くに『府』を都府の意義に用ふるに至つたのは、既にかなり古いことで、唐の頃の制度に大洲を府と云ふことにきめて居たこともあつた位である。

『府』はかやうに臟腑の義に用ひられたり、寶藏の意に使はれたり、又都府の義につかはれて居た。此れ等の意義を通じて考へるに府には集合の意味が含まれて居る。玉篇にも府は聚也とある。尙此の外『附着』『寄附』の『附』『符合』の『符』なども、府と同音であつて、その意味も亦『集合』の義に關係がある語である。かやうに*fu*の音は『共に合する』『集合』の義がある故に、市都にも之が適用せられるに至つたのである。又府の字の構造が物を藏する家屋の象形に基づいて居る所以であるのである。

然るに支那語全般の歴史、殊に其の音の方面を觀察して見るに、過去の時代に於いてそれが著しい變遷を重ね來たつて居る。それ故、*fu*が集合の意を現す言葉であるとしても、その音が必ずしも、

古い素とのまゝの音であるとは斷言できない。近い話が、昔し洛陽 *Lak yang* と云つて居た洛の音 *lak* が、今では *lo* の音となり。又昔し反目 *fon muk* と云つて居た目の音 *muk* が、今の北平音で唯 *nu* の音となつて居る。かゝる類例の事實から綜合して考へて見ると、府の音 *fu* も素とは更に少しく違つて居た音ではなかつたと云ふ疑問が、當然起らざるを得ない。

府 *fu* なる言葉の古い形として、自分は、以上の事實から假りに、*fuk* の音の存在を豫想し得ると思ふ。併しながら、此の豫想を事實上のものとして、認めらるゝに至るには實際此の *fuk* なる音に依つて、尙『集合』又は之と類似の感念が現されて居るものがあるか、否かを確かめなければならぬ。然るに之に該當する實例はたしかに發見することが出来る。即ち、

*Fu* の音に對して

1	<i>Fuk</i>	幅、副、福
2	<i>Fuk</i>	複、復、腹

の如きものがある。これ等は或る廣い意義に於いて、『府』の原義と同一である。殊に第一の方には幅福などと同種の言葉で、『富』*fu* の如きものもある。此の富 *fu* は、音の上又意味の上で福など、關係の書つてあつたことはなかつたか。説文には富は備也、一曰厚也とあるが語源の關係上は幅、福などと同類ではないかと思はれる。唯その音の形が、*fuk*—*fu* と軟かになつたまでである。更に複の字、復の字、腹の字などが現す語を考へて見るにこれとても亦『集合』『寄り合ふ』『再びする』など

の義があつて、幅湊、副使などの時の *fu* の語とその意に於いて大差はない。而かもその音形式は同一である。爾雅釋詁第一の部に、副は審也とある、がその義も亦茲に云ふ義の範囲内に存するものである。

以上の事實を綜合して觀察するに、文字上でこそ府は幅、副、福、又は複、腹、など、別字であるが、その言語の古い素との状態に遡つて考ふる時は、これ等の語と、その根源に於いて、餘り遠い間柄ではなかつたであらうと思はれるのである。

尙 *fu* の類似の言葉として、苞、飽、鮑などの語 (*pa*) がある。これ等は主として、物の包まれて、多く集合せる義であつて、字こそ違へ言語上から云へば、上述のもの、一傍證として考ふべきものである。因みに云ふ、これ等の音は、唇音 *p* を以つて發音せられて居るものであるが *p* と云ひ *fu* と云ひ支那の音發達史の上から云ふと、寧ろ同種のものとして取扱つても、大體に於いて、差支はないのである。

要するに、『府』の語源は多く物の含まれて、豊なる有様を指すもので、其の素との古い音形式は *pa* の音であつたかと思はれる、と云ふに歸する。これは、府と云ふ字に就いて云ふのではなくその語について云ふのである。その區別はよく見わけなければならぬのである。

由來支那人と *pa* と云ふ音とは密接の關係がある。蓋し壽福とか、福祿とかの語が無上に目出度

く感ぜられて居るからである。毎日たそがれの空に飛びかふ蝙蝠すら支那で目出度く考へられて居るのもその文字に蝠の字があるからである。と云ふ。その思想は日本にも傳はりホクロク(福祿)をまつるの風となり、又大福帳とか、御多福とか、すべて豊かに縁起のよいことを聯想して此の文字を用ふる事となつて居る。思ふに福の字だけでなくすべて、*fu* なる音はその語源を充滿、充實の意に發して居る語である。試みに覆の字とか腹の字とかを取りて考ふべし。覆は蔽ひ合はする義、腹は十分に腹藏せる義である。尙別の字にて例へば包の字の如きもこはハウの音なれどもその古音は *pa* である。此の *pa* は *fu* と音韻上同系統のものとする可きものであるがその包の義の充實の意なることは云ふまでもないことである。かやうな例證から考へると富の字の如きも素とは *pa* の音又府なる言葉も素とは茲に起源を有せしことと推定する。

## 第十五章 豆と云ふ言葉

言葉と文字とは人のよく混同し易いものであるが、今茲に自分の述べんとする要點は言葉としての豆のことであつて文字としての話ではない。唯文字上の説明を借りて話を明かにするだけであるから、よく此の點は區別して見られなくてはならぬ。尙今自分の述べんとする豆なる言葉の沿革は、豆

文字以上に種々の觀察を要するものであつて、謂はゞ抽象的のことで、まのあたり字面に見えて居る字形だけの話ではないのである。

さて假りに先づ字の方の説明から觀察に這入ると元來此の『豆』の字は無論マメの義で用ひられ、之に疑問を狭むものはない。けれども抑も此の文字の出來た起りは如何なるところにあるかと云へば、周代或は之れ以前に於いて、天或はその他の崇拜物を祀る時の、所謂、祭器の形に象つたものである。これは文字學者の一般に認むるところである。上代の祭器を呼ぶに簠簋籩豆の語のあるを以つて見るも『豆』が器物なることは直ちに類推せられることであるが、尙字形の變遷沿革の方面から之が比較研究を試みて見ても直ちに肯首せられるのである。即ち、左に先秦の古銅器などに鑄せられたものうちからその代表的のものを取りて見れば、



豆の古文

などが周の散氏盤、齊公豆、疑生豆に見られる。これが下つて篆書で書かれる時代になると、皆一様の形を取つて茲に示す如く書かるゝに至つた。これが即ち今の『豆』の字の過渡時代に立つ字形である。かくの如き象形の孰れを通じて見ても之に今日考ふる植物の豆らしい點は少しも聯想されない。



豆の 説文にも豆は古食肉器也とある。尤も説文の出來た後漢の當時之にマメの義が別に全然なかつたとは斷言しにくい、兎もかく『豆』の字は器物として

認められて居たものらしい。



豆の字の原形が器物に象つたものなることは以上の如くである。然るにその古文の最古のものには往々何とも知れぬ一種の豆の字がある。即ち、その象形は茲に示す如きものである。或はこれは祭器などの最も元始的の幼稚な作をして居た時の象形でもあるまいかと臆測する。併し十分なことはわからぬ。

以上は文字上の方面から見た豆の字の古い状態である。次ぎには『豆』の字の形をはなれて、その言葉の方に這入つて觀察しよう。

豆なる語は音を普通にトオ、又はヅと云つて居る。つまり *tau* 又は *tau* の音である。今日支那の廣東地方では之を *tau* と云ひ厦門で *tau* 上海地方では *tau* と云ふて居る。各地方多少音の差はあつても大體かくの如き音であつて、且つその意味はマメのことを云つて居る。併しこれは現代のこと、又は上代よりもづつと時代の後れてからのことで、古くは上に述べた通り『豆』の字がそのマメの意でなかつたとすると、別にマメのことを表はす語が存して居なかつたかどうかの問題が起る。依つて之を支那の文獻史上に考ふるに、古くマメのことを云つて居る言葉には即ち、『答』及び『杓』の字が別

にある。このうち、『答』よりも『赤』の方が古いと思ふ。『答』の字の竹冠りは後の俗字で元來は艸冠りの字でなくてはならぬ。

『赤』及び『答』の二字は豆の字の先驅者である。學者或は云ふ、答は豆と普通文字なり故に假借と見ればよしと。併し此の見解は日本の極めて俗なる字音を本として曲解したもので答の本音はタフである。豆の tou とは入聲有無の關係上確かにその間に聯絡は認められない。たまに入聲の消えて入聲ならざる音にうつることもありはするが、フ即ちpの入聲は元明清以來は別として遠く古い時代に相轉換せしが如き現象は殆ど全くその例を見ざることである。故に『答』『豆』兩字を普通の上で異字同語とすることは直ちに信じられない。自分はむしろ答の字の原義の『繰り返す』とか『群集する』とかの根本意義が早くもマメなる植物に結びついて此の文字をかりることゝなつたものと思ふ。答がもと艸冠りなるはそのマメの艸の部に屬するを以つてである。その下の『合』の字は唯音を示した符牒に過ぎぬ。合の音カフをタフにかよはせて讀ませるは、なほ甘(堪)の音のカンを湛の時にタンと讀ませる類の一つでこれには音韻學上又言語學上深い理由が存して居るのであるが、その理由は茲に省いておく。


晋書に菽、麻、麥、一斛の語があり、説文にも『答』は小赤なりとある如きも答がもと豆の義たりしことを示して居るものである。

次に赤がマメなることは、これは艸冠りのついた茶の字があり、又菽の字などがありて、何れもマメの意を有するに依りて明かである。尤も同じくマメと云ふうちにも種類が多くあり、又その名稱の依つて起つた點が、小苗につけたものあり、十分生ひ立ちたるものに付したるあり、又成りたる實につけたることもある。故に一概には云はれないけれども古來傳ふるところによりて、赤、茶、菽が一般にマメと訓ぜられて居ることは争はれぬ。而してその最も古いものは赤の字であるが、此の文字の古文を序でながらに調べて見ると頗る面白い形に象つて居る。即ち屢鐘鼎文に見ゆるものをとりて茲に掲げて見るならば、

赤の字の古文

などがある。此の他色々の形で現れて居る。説文に赤は豆也豆生之形とあるによつて見ると、この古文はマメの卷鬚の他莖にまき纏へる形に象つたものたることがわかる。尙菽の字の古文を取つて考ふ

菽の字の古文

るも、又同様である。菽の字のうちに又の字のあるはもと『又』の字は手で物を取るとか掴むとかの義であつて、と書いて居た文字である。故に菽は豆を取るとか云ふ義でもあらう。

文字上はかくの如くであるが、さて、言葉の方面から行くと、此のホの字はシユク<sup>トク</sup>の音である。此の字音は同時に又その言葉の音でなくてはならぬ。ホには又別音として、Tok<sup>トク</sup>の音がある。トク<sup>トク</sup>の音は古く、シユク<sup>トク</sup>の音は比較の後世の音である。かの淑女と書いてある古代の文面は之を徳女と云ふやうな風に音の上で古い方に引き戻して見なければならぬ。此のホ、従つて又茶も菽もその音として考へられる。すると此のホ即ち Tok<sup>トク</sup>なる植物は豆生の象形であると見られる。

さて然らば此のトク<sup>トク</sup>の音と前に述べた豆の音トウとは如何なる関係があるか Tok<sup>トク</sup>と Tou<sup>トウ</sup>とは言葉の音の方面で如何に解釋せられるか。と云ふに此れは答(タフ)と豆(トウ)との関係とは違ひ、音韻上で密接な聯絡が存して居ることと思ふ。今『豆』の音に唯トウ(Tou)の一つでなく、タウ(Tau 廣東)ツ(Tu)ツ(Du)などの諸音のあり得ることを認めて之をホの古音(Tok)と比較して考ふるに古來他の例で Tok<sup>トク</sup>が Tou, Tau<sup>トウ</sup>などの音に發達して變つて居るものが少なからずある。讀牘の旁なるトク<sup>トク</sup>の音字が寶の字の音にトウとなり、悼の字の音字阜(タク)が悼の時にタクとなるなどその好類例である。されば言葉として、Tok<sup>トク</sup>の音が移りて Tou<sup>トウ</sup>又は Tu<sup>トウ</sup>となれるは珍とするに足らぬ。現に督、毒、積、禿などの入聲音トクは總べて今日の北平音で皆 Tu<sup>トウ</sup>又は Tu<sup>トウ</sup>の音となつて居る如

き有力な證據もあるのである。

されば音の上、又意義の上で菽は豆の義でマメの意を表はす以前に既にマメの義に用ひられ居たる文字である。即ち、同一の語に對し、豆の方は、菽(即ちホ)の後繼者の位置に立つものである。併しホがその役目を豆の字に譲りたる頃には既にホの字の Tok<sup>トク</sup>と云ふ入聲音は消え失せて、恐らく To, Tu, Tou<sup>トウ</sup>などの音にうつり居たものと推定する。後世山椒の椒に Sho<sup>トウ</sup>の音がある如く、もとはホには Tok<sup>トク</sup>の音のくづれて Te<sup>トウ</sup>となりしことのあつたことが考へられる。これホの字がその表はす言葉の上の役目を豆の字の方にゆづるに至りたるわけであらうと思ふ。

周禮に『肉豆』の語あり、爾雅に『木豆』又『竹豆』の語がある。齊書には『銅豆』の語のあるなどより推すに、上代豆の字が祭祀の用器としての語をうつし居たることは争はれない事實である。然るに豆の字の此の原義が忘れられて、別にマメの意味で盛に用ひられるに至つた時代は降つて漢魏の頃ではないかと思ふ。魏の張揖の廣雅などには既に『豆』を菽也と解して居るを以つて見ると、今より一千五六百年以前には既にたしかに豆がマメの意を取るに至つて居たことが考へられる。

豆なる言葉の沿革は大體かやうに辿られる。以つて豆なる字の起源と語としての起源とは自ら混同す可からざる區別の存することが察せられるのである。

けれども併し支那上代で然らばマメのことをなせトク Tok<sup>トク</sup>と云ひたるか。これは伸び伸びとツル

の伸び行く點を取つて呼んだものとか。總じて艸物の伸び行くことをトク（之の字の古字古音参照）と云ふことは支那上代語に多く類例を見るところである。併しマメに就いて果して確かにさう云ひ得られるか、實はわからない。唯推定に止まる。尙序で日本語に之をなせマメと云ふか name とは抑々も如何なる原義を有するかこれについては國學者流の考や今の植物學大家のうちにも説はないではないが、要するに之は未だ中々容易に解けない。これは植物分布の上のこと氣候潮流の關係、隣國語との比較研究など種々の研究を重ねた上でなくては十分なところは云へないのである。要は唯『豆』の字は素と上代からマメの義ではなかつたと云ふこと、豆なる言葉の古い音はトウ Tou でなく、トク (Tok) であつたであらうと云ふ自分の考を述べたのである。

## 第十六章 文字上の植物名

植物に關係のある名稱を、文字上から捜し出すことは、頗る興味のあることである。わけて、文字の極めて古い時代に遡つて、其の繪の形で書かれて居た時代の言葉を比較にとりて調べて見ると支那古代に於ける言語の一部もさとりられるのである。松村博士が先年道樂半分に日本の植物名と大陸の言語との關係を調べられて自分も面白く讀んで居るし、又時々博士と閑話をするので、博士の趣意も近來大分わかつて來た。その研究の結果のうまく、あたると、あたらぬとは別にして、兎もかく、あの側の研究が言語の方面から着手せられて居るのは、頗る興味を以つて迎へられる所以である。自分は博士の立ち場とはちがつて、日本のことには關係なく、唯支那の上代のことのみに就いて一つ二つ敘述して見たいと思ふ。

### 一 苗木又は小苗をタク (tak) と云ふこと

支那で、木とか樹とか云ふことは、皆一定の丈に暢びたものを云ふのであつて、説文によると『木』は冒也と云ふ。即ち木の枝も茂りて地面を蔽ふ程に至れるものを云ふの義である。『樹』の字に就いては説文に生植の總稱とあるけれども、論語に、邦君樹塞門の語があり爾雅に屏謂之樹とあるのを以つて見ると、樹も又大きな木を云ふにきまつてゐたらしい。苗木については云ふまでもなく『苗』の字が先づ第一、念頭に浮かぶ。説文に『苗』は艸生於田者とある。即ち苗は素と單に五穀之初生のものに限られたものかと推定せられる。

然らば一般の苗木は何と云つてゐたか。又何と云ふ字にそれが現れてゐるかと云ふと「自分の調査したところでは『毛』の字と『之』の字とが之にあたるのである。詳言すると此の外に尙『艸』の字と『出』の字が加はる。此の四字のうち前二者『毛』と『之』とは古音がタク (tak) であつて、後二者『艸』と『出』とは古音トツである。



毛がタクの音なるは托、託、宅などの合體文字からそれが推されるが、その苗木の義なる所以は、説文に『毛』は艸葉也从二垂穗一上貫一、下有根、象形とある。以つてその義のある所は明かに察せられる。更にその形の古いものを取つて見てもその意義は如何にもよく字形と一致して居るのである。即ち、



屯の字の象形字

一は地面を示し、上に芽、下に根があり、これがタクと名附られた點は思ふに地面より上に芽の伸び出るさまを目星として附けたもので、すべて伸び出て、又は伸び出で、高く上ること

を支那古代ではタクと云ふのである。(第二編第十(一章参照)) 此は卓の字の意義に比べて見れば思ひ半に過ぎるであらう。



之の字の古文

また『之』の字が、なぜ植物に關係があるかは第一に其字形の基づくところを見れば、その手掛を得る。即ち吉金文に依ると、之の字の古形はすべて、玆に示した二個の代表的文字中孰れかに這入る。その意義は説文に『之』は出也、象艸過中枝莖益大有所之、一者地也とあるにてよく知られ、明かに苗木の形を示して居る文字である。『之』の字の古音がタクなる理由は、科學的の證明をすれば頗る長くなるが結局その歴史的

に古く遡つた音がタクで、それが即ち『寺』の字に現れ、その寺の古音のタクなるは、その諸聲字の



特の字の篆書

『特』の字を見れば直ぐにわかるのである。つまり『特』の字音のトクは『之』の古音のタクの名残がこれに残つて居るものと見ればよくわかるのである。此の點に於いて『之』の古音のタク (tak) は即ち上述の『毛』の音と一致するのである。唯がの方には古音がそのまゝ残り、『之』の方には古音が著しく變化してしまつた爲め古音の姿が残つてゐないと云ふまでである。さればその義、その字形の同一轍なること亦贅言を要しないのである。又『之』に艸冠りをした『芝』の字なども素とを云へば最初は

小苗の如き小草に象つたものであつて其の古音も亦タクの音である。故に文字上から觀たる苗木の古名は支那に於いて、タク (tak) と云ひ、伸び上るの義で『卓』越の卓と關係のある言葉であることを注意して置く。

次ぎにはタクの音から少しくちがつて、トツと云ふ方の名稱に就いて考ふるに、それには『艸』の

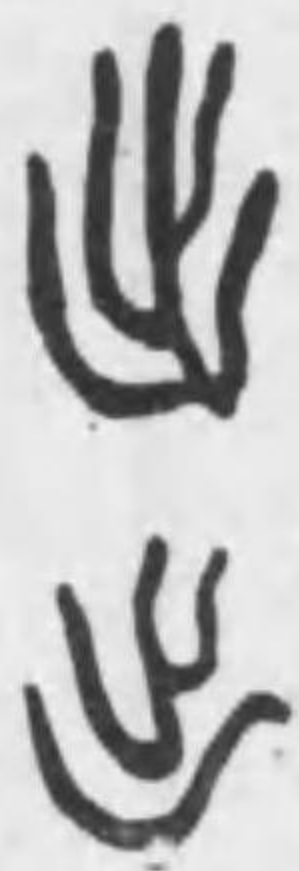


『艸』の字の古文

これは艸の字の片方のみを書いた字で、説文には明かに艸木初生也象艸出形有枝莖也とある。音は輻の字のそれと全く同一であるから言語上では地中より地上に抽け出した生ひたちの様を呼んだ言葉であると考へられる。要するに苗木の古名にタクの外に別にテツ (tsu)

の音の存することは注意すべき點である。

出の音テツ (te) に關係のある他の字はトツ (to) の音を有する『出』の字である。出は説文に進也象艸木益滋上出達也とある。義はやゝ苗木たるの性質を失へるが如しと雖もその古音より推定せられる名稱のトツは上述の出と密接の關係のあるものと考へる。説文第二卷にある『咄』音トツ (to) はたしかに出の古音を留めて居るものであつて、聊か出の古音の證左となるものである。その音、その義は又その字形の上と相對して毫も疑ひの餘地はない。故に言葉として



出の字の古文

は『出』も『出』も上代に於いて大なる差はなかつたものと考へるを妥當なりと思ふ。後世『出』が出づるの義となつて居るのは伸び榮える方の義の轉義である。『之』の字をユキ (行) と訓する如きも亦等しく伸び出づるの義 (四四六頁参照) に本づいて居るのであつて、孰れも植物に起源を有して居るのである。

以上に述べた點をまとめて云へば、即ち、

苗木の支那上代語 { 一、タク (tak) …………… 毛、之。  
二、トツ (tot) …………… 出。

となるのである。

二 尢 (ジュツ) の原義が五穀のみのるの義なること

言語の上で支那の上代に『みのる』ことをジュツと云ふと云ふことは、『實』と云ふ、語を一見すれば直ぐわかる。然し自分は茲に、更に他の方面からして古い字形の上より、之を觀察せんと欲するものである。

述とか術とか、又時としては利とか、殺など、云ふ文字の音のしるしなる尢の字に於いて、之に『みのる』の義の現れて居るのは如何なるわけであるであらうか。



尢の字の古文

『尢』の字は、その象形が米に關係のあるもの、如く又禾の字に關係があるやうにも見える。之に點の打つてあるものが若し穀粒の義に象るものとなすならば、その幹部は即ち禾の字の異形と見られる。果して然るならば、禾は即ちイネである可きもので、之をジュツ (jitt) と云ふ呼びかたをするは、その禾



禾の字の古文

に實の實りたる點を指して云へるものと察せられる。故に『尢』は實也と解す可きものである。釋名に太陽の日を日は實也とある。こは云ふ迄もなく全くの音譯なりと雖も、尙多少日光とか、熱とかの充實せるの義を含めることと思ふ。五穀の實の入りたることもこれ亦たしかに原義は充實の意である。『尢』の音のジュツなること豈又偶然ならんやである。『述』や『術』などにジュツの音なる尢の含まれるは

單にたゞその音符たるに過ぎぬものであつて、その意義上には別段の關係するところはないのである。尙尤の古音については別にまた *chut, tsat* などの音が考へられる。けれども此れは、恐らく上述の *tot* の音よりも更に新しい音であると推定する。然しそこらの研究は自分はまだ十分につんで居ないから尤の古音のことに就いては云はないで置く。

### 三 菊をキクと呼ぶ所以

菊を日本語でキクと呼ぶは本来の日本語であるか、どうかは随分議論もあるであらうが、自分は密柑のミカン、枇杷のビハ、菠薐草のハウレンサウなど、同様にキクも即ち支那大陸からの名稱であらうかと考へる。菊をキクと云ふからと云つて直ちに菊と云ふ植物がすぐ支那から來たと斷言するのはない。植物は植物、名稱は名稱で、何れも全く別である。古く歴史以前から菊の種類は日本の島國に存して居て、唯その名前のみが支那の名稱を知るに至つて之に適用せられたものかも知れぬ。つまり玆ではキクと云ふ呼びかたが、素と支那上代の名前ではなかつたかと思ふ點に就いて述ぶるのである。

日本では古くより『老いせぬ菊』かざす白菊『菊のせりわた』など云つて菊をキクと讀めども菊の別音としては又ククの音も之にある。kiku と kuku の兩者中後者の方は朝鮮及び支那の古音に近いところがある。尤もあとの *く* は省いて *kuk* として見なければならぬことは無論だが、左に菊の

各方言音を列挙して見ると

朝鮮音……………*kuk*  
支那廣東音……………*kuk*  
安南音……………*kuk*

かやうに朝鮮支那安南まですべてククの音である。蓋し此のククの音は菊の本音と見る可きものである。尙福州地方では之をコウク *kouk* と云ふて居る。菊をキクと云ふは支那の後世の音であるから、菊キクと云へる日本音は後の音の姿が傳へられたものか。それともまた日本でキクと訛つたものかも知れない。何れにしても素とは菊は支那起源の名稱と考へる。

然らば支那で之を菊と云ふわけは如何なる點に目星をつけて呼び始まつたのであるか。一見菊はその文字の上からは、さながら菊の花の象形なる如くに考へられる。即ちかの小篆を見てもわかる通り菊の字は上下二部より成り、从艸菊聲で出來て居る。一見直ちに此れは象形らしく思はれるので左圖の下丸き部分は何を表はすかと云ふに、説文によると在手曰菊とあつて、手で掬しすくふの義らしく説いてある。段玉裁は然し之を疑つて、椒聊の實に見て居り、高田



菊の字  
篆書

氏は之を古文の臼の字に關係があるとして見て居られる。

さて菊の字に在りてその下部が果實であると、何であるかに關せず、

その菊と云へる言葉から云へば唯その音符たるに過ぎぬ。つまりクク *kuk* の音を出させて居る符牒たるに過ぎぬのである。更にそれが菊の象形に關係があるないの論は、茲で問題外である。かくの如くにして出来たる文字をなせクク *kuk* と云ふやの問題。これに就いては前人に未だ其の説あるを聞かない。古人の考はわからないが、卑見ではククなる名稱は菊の花や、實から附けた名稱でなくて、全く菊の『葉の形』から来た稱呼であらうと思ふのである。

菊の種類はすべてその葉の状態が他の植物の葉よりもきはだちて葉邊の鋸齒状著しく、切れ込み方深し。その切れ込みの著しい點が即ち此のクク *kuk* の音を出させて居る所以である。蓋し支那上代にKとKとでつゞける所謂入聲音の此の言葉には此の義の含まれて居ることが甚だ多い。例へば山岳の切れ込みは之を谷と云ふ。谷はコク *kok* なり。又嶽と云ふ。嶽はガク *gak* なり。嶽の字で呼ぶ山岳の形なども、その山の狀が布圍着て寢たやうな丸き山には云はないで、多く巖々兀々たる山に云



菊葉

ふ。即ちその峻溪を一方に思ひ出させるやうな山に限つて嶽と云ふのである。又他の語では、切りきざむことを刻と云ふ。刻はコク *kok* なり。その他又切る如く暴虐なるを酷と云ふ。残酷の酷なり、酷の音はコク *kok* である。又くちり穴を隙と云ふ。隙にゲキ *gek* の音のあ

ることは云ふ迄もない。更に思ふに國家の國の如きも古くは『或』の字を書きて、ロク *kwok* 又はクワク *kwak* と讀ませて居たのであるが、此の或の古音も素とは國と云ふものがすべて酷血を流した苦心になりしもの、義でもあるまいか。又區劃の劃、これも音カク *kak* 又はクワク *kwak* なりで、刀で筋目正しく『しきり』をなす義なり。鹹の音クワク *kwak* などにも茲に考へ併すべきものである。

かやうに、カク *kak* コク *kok* の音はすべて切れ目、切り込み、切り開くなどの義を含有する言葉について居る。切れ込みのある葉は獨り菊のみに限つたわけではないが菊にクク *kuk* の音をとらし所以は蓋し亦このあたりに存することと思ふ。これ自分が菊の音キク（古音クク）が花の部分から出たのでなくて、むしろ葉の形から出た所以也といふわけである。尙母音についての研究は五つの母音及びそれ以外のものに就いて多少研究が出来て居るがこれは省く。次ぎに菊の字の脚部に關係のある文字で今日多く見るものは麴の字である。これは一つに又、もと麥の偏に曲の字を書くことがある。併しこれ等は共に孰れも俗字である。麴を糶とするは尙更ら俗字中の俗字たるものである。眞に酒母の義なる『麴』は素と革偏に勺の字を書きそのうちに麥の字を書いて居たものである。尙此の外別に或體のものもある。

すべて植物の名稱はその語源を明かにしがたいものが非常に多く、今日の時代より上代の植物の比較考證をなすなどは頗る困難である。然しその名稱上の聯絡を求めて、大陸と日本との關係を考へる

時は又少なからぬ言語上の一致を見出すことが出来るのである。近くは『竹』のことをタケ take と云ふはその字音の tok (篤の字の音符、竹は tok) から出たもので、『橘』のタチ tati は枳の古音の tat より出で、その他『梅』のことをツガ tuga と云ふは樅の古音の tung から出で、『杉』のことをスギ sugi と云ふは松(松柏類すべて同じ)の音の sung より出で居るのである。此のツガとかスギとかの音は猶相模の相 sang の音を saga とし愛宕の宕 tang を tango とするの類で日本の訛音である。

## 第十七章 支那上代の熱帯動物に就いて

支那上代の状態は總べて東洋史上の一大疑問として觀ぜられ、今日の研究程度ではまた上代支那の孰れの方面も闡明が出来兼ねて居る。吾人は今、記録の上の古代研究以外に種々の遺物古器物等よりして大いに古代觀察を試み得るの餘地が残つて居ると信するに依り、茲に蛇足を加へて古銅器の方面から少しく卑見を述べて見よう。

上代支那の研究す可き點、一二にして足らず、歴史以上に遡つて、更に地理、地文、動植物、交通、風俗、言語、神話、傳説、繪畫、模様、文字などの研究は孰れも皆面白き題目となる。わけて、熱帯

動物の支那上代思想に現れた點などを今歴史以上に遡つて觀察することはこれ亦興味のあることと思ふ。

熱帯動物で早く支那人に知られ、黄河流域地方の言語に上つたものは象及び麒麟である。易の繫辭などに在天成象とある象は所謂象の本義ではなくて、これは章と音通なる爲めの假借字に過ぎぬ。象の原義はその字の古形に最もよく残つて居るのであるが此の象の字はもと動物としての象であつて、これが本義でなくてはならぬ。もとの象形の姿は今更擧ぐる迄もなく、此の字が即ち象の形から轉化したものであることは人の能く知る所である。此の象 (shang) なる言葉は説文に象は長鼻牙南越大獸云々とあるが素とこは『暖』とか『大』とか『壯』とか云ふ語と頗る縁の近い語で、さういふ意味から付けた名前ではないかと思はれる位である。而してこの象は古より牙齒を以つて有名であつて、左傳の襄公にもその記事が見えて居るが、更に古



周代の象の模様

くは詩經の魯頌に既に元龜象齒の語が見えて居る。更に記録をはなれて三代の古銅器類を検するも、その動物類の模様の多きうちにも象の形と明かに思はれるものが又少なからずある。例へば周時代に見る禮器酒器符の流の部分の側面などにこゝに示す如き模様があつて、例の雷紋を以てその周圍が取りかこまれて居る。その他鐘鼎文にも象の形そつくりのものが見え

て居る。文字としての象形の場合は原形に近い形で鑄である事が多いが、模様としての場合には多く左右相雙に一對にする目的の爲め、實形よりは幾分か美化されて現れて居る。茲に示したるものはその一例である。

象に限らず種々の怪獣と思はるゝ形をしたものが三代の器物には澤山見られるが、扱此の象の模様が果して象、學名 *Elephas Indicus*, *Elephas Africanus* であつたとすると、何故に三代當時の太古に於いて黃河流域地方に此れが知られて居たか、疑問となる。西人が今の南方暹羅の暹は象と同語根より出づなどゝの意を述べんとするは非なるも、上古の交通が後世よりも却つて大々的なりしは推察せられる。

固より地質時代より觀て、古くも大獸マンモス (*Mammoth*) (タタール語、土中の義) が西比利亞諸地方、又は近くは我が日本などの如き熱帯に甚だ遠ざかれる地方に於いてその遺骨の發掘があるより考ふる時は、三代の前、黃河流域に居たりしものか。必ずしも否定は出來ず。されど又一方より考ふる時は西方波斯、中亞細亞附近の熱帯地帯より伊犁天山南北路の麓を経て幾分の *Cathay* 的交通が黃河の方面に向つてあつたものかも知れない。それにしても駱駝の如き萬里を行くに適した體格とは違つた象が支那北部に來て居たとは頗る受け取れぬ。然るにこれが三代の器物などの模様に採れる點より推測するに、或は西域より當時支那に向つて實用上でなく、獻上するの目的か何かで連れて來た

ことがあつたものかも知れない。

若し然らずして、西の方波斯方面からでないとするに南方暹羅方面の熱帯地から連れて來たものか。説文の象に關する記録が誤つて居ないとするならば之を南越地方の獸と見ても毫も差支はない筈である。

何れにしても象の原産地がマンモスの如く北部亞細亞に擠がつてゐたものでない以上は西方からか又は南方からかの原産であつたらしく、從て此の觀察は三代當時の地理上の交通が既によほど廣く遠くに及んで居たものと考へらる。且つ之を斯様に珍重するより考ふれば象は當時瑞獸として目せられて居たものと判断せられる。

西洋語の象 *elephant* はその語根より觀て、セミテイクの冠詞、*al, el* を省くときは、語根は印度サンスクリットの *ibhas* である。希臘語も羅旬語も皆その象なる語は之に由來して居て、梵語を根本となす。支那に於ける象の古音は自分の研究では *fang* 又は *tsang* で東日の登り行くこと、又は陽氣の動くことなどゝ語根を近くし、亞細亞東南部に廣く行はれ居た語である。印度の象と及び支那に早くから知れて居た象とは種類同一かも知れないが、言葉としては全く別であると思ふ。

次ぎに麒麟は孔子によりて著しくその聲譽を擧げたる古代の瑞獸であるが、鹿身牛尾、狼額、馬蹄、五彩、腹下黃、高丈二とある説文の記事でよくそれが描かれて居る。吾人は孔子逝て三千年の今日

ラフの實物を目撃する度に此の説文の句を思ひ出す。

魏の張揖は麒麟の二字をわざ／＼分解して、麒は牡で、麟は牝なりと云ひ晉の郭璞も亦その區別を是認して居るが、吾人はこの二字に分解することを反つて不當と思ふ。尤も詩經周南には既に麟之趾とて麟の字の一字名がある。こは口調の爲め語頭に立つ ㄗ 即ち麒を略したもので十分に云へば麒麟と二字續けて云ふ可きものである。素とこれは象と同じく熱帯の動物であつて、西方のどこかの國の言葉を音譯したのではないかと思ふ。さて支那の方で云ふこの麒麟なる語の古音は自分の見るところでは *Kien* 又は *gien* である。支那にはもと R と云ふ音なかりし故 L を以つて上代にはいつも外國の R をうつす。されば *gien* は *siren* のつもりで麟はその *ren* の音譯であらうと思ふ。さて又外國の三級音又は三級以上の音を簡單にして二級にちぢめてうつすこと。これも屢支那の音譯にあることなればつまり、麒麟は *giraffe*, *girafa* (アラブ語の *Ziráfah* 埃及語の *Soraé* 長頸 *long neck* の義) などの言語と連絡はあるまいかと思ふ。

此の假定は更に深い研究を要するは勿論だが兎も角も支那の周代の麒麟が支那原産のものであると云ふよりも外國熱帯地方のものであるらしいと云ふことを説文の記事及びギリンと云ふ言葉の方面からかやうに推測するのである。果して麒麟がジラフであるとすると日本に来てさへ冬季の寒さにジラフは弱るものを更に寒き黄河の流域(たとひ上流地方にせよ)に居たとは甚だ受取れぬ。麒麟の死は

支那地方の位置上又氣候の上よりしてさもある可きことで恐らく風土に合はなかつた爲め死に至つたものかもしれない。若し然らずして野生の麒麟が自然に支那に居たとする事は古今の差はあれ動物の分布上、認めにくいことと思ふ。

孰れにしても上代の漢民族が支那以外に居る可き熱帯動物を識つて居つたと云ふことは西方アラビア方面との交通のありしことを豫想せしむる一資料となるのである。

吾人は單に言語上よりかくの如き推察をなす。若しこれが歴史以前西方と支那との交通關係とか、動物の分布の上などより見て矛盾するところはなきか。暫く記して後の參考となす次第である。果して若し予の説の如く麒麟が全くギラフ、即ち今のジラフの如きものであつたとすると、天才、神童などを麒麟兒など、美稱するは餘り褒めた話ではない。別段にジラフには奇智があるわけでもなく、又時勢を洞察する如き能力も疑はしい。唯頸部と兩脚が馬鹿に長いと云ふだけの動物に過ぎぬ。

## 第十八章 暹羅、支那兩國語の單語の比較

亞細亞の東南部地方に行はるゝ言語の種類は、之を小別すれば、際限なく算せられるが、先づ大體のところでは、次ぎの三大別が立てられる。即ち、

- 一、支那語系統の言語
- 二、馬來ポリネシア語系統の言語
- 三、梵語系統の言語（ドラビダ等の語は茲に別なり）

である。暹羅語は此のうちの支那語系統のうちに這入る語であつて言語上で「ai」語として知られて居る語である。すべて支那語系統に這入る語は語序（word-order）を主として發達させて、文章法はすべて此のプリンシプルで行く。尙之を助くるに助辭（particle）の措置の模様と音韻上の微妙な區別法とを以つてして居る。

支那語で  
行ツタ……*çü la* ……去了  
來タ……*jai la* ……來了

と云ふやうに本動詞と助辭との關係はその位置關係が動搖されないことにきまつて居る。丁度之と同じことは、

暹羅語で  
行ツタ……*pai liao*  
來タ……*ma liao*

など明かに見られる。これは尙食ツタ……*king liao*. 間違ツタ……*pit liao*. 引張ツタ……*çak liao* などの語に於いてもその用例は見出される。また、他の場合で例へば限定語と限定される語との間に於

いてもその語序は必ず一定のきまりを有して居る。支那のは尤も、限定する方の語が先きに立つて居るが、暹羅では之と反對で、限定語があとに來て居るのである。即ち今、實例で云へば、

支那語で  
ことし……*çin-nien* ……今年  
來月……*hsia-yueh* ……下月  
はしけ……*pien-ç'üen* ……便船

と云ふやうになつて居て、先づ『今』と云つて次に『年』と云ふ順序なのである。暹羅では此の規則が反對になつて行はれて居るので、例へば、

水…… <i>nam-kien</i> …… <i>nam</i> は水	<i>kien</i> はかたい(堅)
多勢の人…… <i>kon-näk</i> …… <i>kon</i> 人	<i>mäk</i> 多くの
農夫…… <i>kon tam-nai</i> …… <i>kon</i> 人	<i>tam</i> 作る <i>nai</i> 苗
間の物…… <i>kong-klan</i> …… <i>kong</i> 物	<i>klan</i> あひだ
鴨…… <i>pet-nam</i> …… <i>pet</i> あひる	<i>nam</i> 水
銅…… <i>tong-deng</i> …… <i>tong</i> 黄金	<i>deng</i> 赤
眞鍮…… <i>tong-luang</i> …… <i>tong</i> 黄金	<i>luang</i> 黄
電線…… <i>sai-faifa</i> …… <i>sai</i> 線	<i>faifa</i> 電氣



電氣……………*faifa* ……………*fai* 光 *fa-fa* 雷

の如くに、すべて限定語が必ずあとに來て居るのである。支那語で若しかりにその堅水と書くのが氷のことであるとするならば、その順序は勿論必ず『堅水』と云ふ順序で呼ばれる。然るに暹羅では『水堅』と云ふ順序を取つて、始めてこれで語をなすと云ふ次第である。なほ、否定の場合の云ひかたは

ウマクナイ……………*mai-aioi* ……………*mai*「ない」 *aioi* 美味なる

暹羅語で  
ワカラナイ……………*mai-sap* ……………*mai*「ない」 *sap* 了解す

ワカラネイ……………*me-lu tsak* ……………*me (mai)*「ない」*lu tsak* 了解す(卑語)

と云ふやうに打消の助辭は必ず動詞、形容詞の前に來ることになりつて居る。次に之がもし命令文になると助辭はあとに來る。即ち

暹羅語で  
ウタ……………*long-se* ……………*long* 歌 *se* 見

食ベテ見ヨ……………*king-lu-se* ……………*king* 食ベテ *lu* 見 *se* 見

である。尙はたらきを示す動作とその目的のものが共に存する時は矢張り支那語流にその動作が先きに立つて目的になるものはあとに置く。即ち

手紙を書く……………*kien nung-ssu* ……………*kien* 書く *nung-ssu* 書物

暹羅語で  
畫像を畫……………*kien tokota* ……………*kien* 書く *tokota* 像看板

飯をたべる……………*king kau* ……………*king* 食べる *kau* 米

かやうにすべて暹羅語の語序の嚴重なことは大體に於いて支那語とかはるところはないのである。且つ又その語の形式に於いても梵語や、馬來語と全然趣きを異にして居るのである。

### 一 比較の表

語が組み合されて連続して現れる場合のことは、大略かやうな状態であるが、次ぎには茲に單語の場合に於いて、其の語の外形がいかなる程度まで支那語と相一致するところあるやについて少しく見て視たいと思ふ。尤もこれには先づ暹羅語の歴史的調査を了へてからでなければ、十分のことは云へないわけである。暹羅語は本來暹羅固有の語としてその變遷のある上に、又西方印度地方からの言語上の影響も少なからぬことと思ふ。然し茲に比較を試みると欲する點は敢へて古きに遡らず、今日わかり易きものゝみについて、互に比べて見るまでであるが、然し、暹羅には漢字でなく表音字が行はれて居るのである故、左の漢字は唯自分の推定に過ぎぬ。

父……………  
支那……………*fu*  
暹羅……………*po* (*vida* 𑖣𑖧𑖫𑖹 經文語)

- 母……  
支……nu  
暹……me (manda は經文語)
- 童……  
支……tung  
暹……nung 或は嫩 nun にあたるか。
- 間……  
支……kan  
暹……kan, klan
- 大……  
支……dai  
暹……nai 尊敬語、長上に對する語
- 合……  
支……kap  
暹……klap 引返す、返る。
- 集……  
支……sip  
暹……sáp 合點する。理解する。
- 節……  
支……set  
暹……siet 一段落を告げる。了る。

- 排……  
支……pai  
暹……pai 行くこと。排、發？
- 索……  
支……cak  
暹……cak 引張る、引。
- 樂……  
支……lak  
暹……lak 慕ふ。
- 漠……  
支……mak  
暹……mäek
- 剔……  
支……tak  
暹……tik 破壊する。tik (上音) 裂ける。
- 支……  
支……pak  
暹……hak 折れる。
- 滅……  
支……met  
暹……mit 刀の義。

割……

支……kat  
暹……kat

退……

支……tai  
暹……トナぐる。打つ（槌の音）

森……

支……sim  
暹……soan

水堅……

支……sui kien (=ping 水)  
暹……nam kien (水堅)

温……

支……wun  
暹……won

易……

支……tek とかけ、支那の易の古音はtekなり。蟲なり。  
暹……take 蜥蜴、鰐（第二編第十章六易の條参照）

象……

支……cang  
暹……sang

牛……

支……gu  
暹……ngoa

馬……

支……ma  
暹……mà

猫……

支……miao  
暹……meu

雞……

支……kei  
暹……kai

鶩……

支……pet  
暹……pet-nam 鴨……pet 家鴨 nam 水

三……

支……sam  
暹……sām

四……

支……ssu  
暹……ssi

六	支	lok
六	暹	hok
七	支	cit
七	暹	cet
八	支	pat
八	暹	pet
九	支	kiu
九	暹	kau
十	支	sip
十	暹	sip
十一	支	sip-yit
十一	暹	sip-et=sibet
千	支	sien
千	暹	pang

暹羅で sen と云へば十萬のこと。

萬	支	man
萬	暹	nun
百	支	pak
百	暹	loi

支那の loi 類、loi 累 loi 磊にあたる語。

備考、  
 暹、一……………nung  
 一……………song  
 五……………hä

聽	支	ting
聽	暹	djing
觸	支	sok
觸	暹	tok
觸	支	kam
觸	暹	kem
耳	支	ji
耳	暹	sou

支那古音は tok dok なり。

脚……  
 支……………kak  
 暹……………ka

喉……  
 支……………kou  
 暹……………kou

船……  
 支……………chüen  
 暹……………chüan

角……  
 支……………kak  
 暹……………kao 入聲 kak より變じたるもの。

牙……  
 支……………nga  
 暹……………nga

体……  
 支……………tai  
 暹……………toa

雀……  
 支……………chak  
 暹……………nokka-chök

蟲……  
 支……………nan, min 閩 聲  
 暹……………men

米……  
 支……………kok 穀か  
 暹……………kao 入聲 kak より變じたるもの。

薑……  
 支……………kiang  
 暹……………king

梅……  
 支……………mai  
 暹……………luk-chiom-boi

柑……  
 支……………kann  
 暹……………som

滅没……  
 支……………net  
 暹……………bot 無の義

尿……  
 支……………niyo  
 暹……………diyō

身……  
支……sin  
暹……toa

臀……  
支……ten  
暹……ton

銀……  
支……gin  
暹……gin

鉛……  
支……yen  
暹……sin

赤……  
支……don, tan 嗽、日？  
暹……den-den 赤色。

黄……  
支……kuang, huang  
暹……luang

皓……  
支……kao  
暹……kao-kao 白色。

曇……  
支……dom  
暹……dam-dam 黒色。

備考 暹青……kio-kio 青、黒、白、赤の四色に限り二重語とす。

紫……muwan

桃色……sichompu - si 色。

房……  
支……fang  
暹……hon 室。

話……  
支……hua  
暹……pu 暹羅語は pu-tai

朗……  
支……lang  
暹……long 歌、歌へ、long sei

踊……  
支……tong  
暹……teng lam

獨……  
支……dok  
暹……nok 離れて居ること mon-nok いなか。

茅……  
 支………·dok  
 暹………·kok 首府盤谷の谷は茅の義。盤は邑の義。

貝……  
 支………·pai  
 暹………·fuoi

暹羅の單語で支那語に比較される可きものはかくの如くたくさんに見出される。これは全く同じ單綴語族の系統に屬して居るが爲めである。而して支那はその文字が象形的であり、又安南なども象形文字を用ひて居る。故に單綴語は象形で表はさなければならぬかのやうに考へられて居る。然るに茲に云へる暹羅はその通則を破つて、印度起源(?)の表音文字を以つて國語がうつされて居る。實に暹羅は象形文字を用ひては居らぬ單綴語の國である。

暹羅語は單綴語でありながら此れに漢字が用ひられて居ないと云ふことは暹羅、支那兩國の言語を比較對照する上に頗る困難を感ぜしめるのである。今日の暹羅の語形を以つて直ぐ支那語に類例を求めめることは輕卒に出來ないことで又容易のわざではない。さらばとて、暹羅語の古代形を一々搜し出すことも、今のことにはならぬ。たゞ併し支那の方は自分の能ふかぎり古形の語を探りて、茲に列擧したのである。嚴密な科學的研究は更に今後の調査を俟つこととしてともかくも茲には非科學的とは知りつゝも古い支那語と今の暹羅語のうちから聯絡のありさうなものを對照にとつて掲げたのである。

## 二 單語の組み立て

暹羅はもと支那語と語の系統を同じくして居るとは云へ、其の單語に類似のもの豫想程に多くはない。猶日本語が朝鮮、蒙古、滿洲語に於けるその如きものである。單にその單語の形式に於いて一致することの少ないのみならず、その一音綴のもの同志が互に結合して複合 Compound の語をなす時とても又同様で、その組み立てかたは支那語と全然同一と云ふことは認められない。事實その熟語なるものは支那の漢語とは違つた組み立てを有して居るものが少なくないやうに思はれる。

暹羅には春夏秋冬の四季を現す言葉がなくて、雨季乾季の語があり、雪と云ふ語がなくて、氷(人造水)と云ふ語があるなど頗るその風土觀察上興味のあることが發見せられる。然し此の例の研究には尙單語の構成の状態について支那語の漢語と特にこと變つて用ひられて居る言葉を觀察するも、又支那語の外部的比較研究には頗る有益な仕事であらうと思ふのである。單綴語がたゞに支那のみの事實ですべてのことを解釋しやうとしてゐたことは從來の弊害である。單綴語そのものと性質を明かにするには暹羅語でも安南語でもネパール語でも西藏語でもかまうところはない。無盡の文獻を有する支那ばかりが單綴語解釋の關鍵なりと思ふものがあらば非常なあやまりである。吾人はむしろ不文の僻地の言葉のうちに却つて、爾雅や、方言、說文などに載せられてない事實が屹度發見せられること

を信するのである。言語研究の實質よりすれば詩經や書經の價值と、今の暹羅の方言の價值とはその間に甲乙の輕重はない筈である。甲に一〇〇の價があれば乙にも一〇〇の値がある。自分が今茲に漢語の組み立てを一方にとりてそれに對して態と暹羅單語の構造を比較せんとするも、つまり此の考によるのである。左に掲ぐる暹羅語は今現時の盤谷に使用せる言葉である。一々それを更に分解して各要素の示す意義を指摘して、支那のそれと異なる點をば注意しようと思ふ。

一、 流星

liu-sheng.....流るゝ星の義  
dao-han .....星 尾

支那で流れる星と云ひかたをする隕星に對して暹羅では尾ある星と云ふ。要素の順序は星尾であるが、暹羅では支那と反對に限定語があとに置かれてあるのである。その意味は正しく尾星即ち尾のある星の義である。

二、 東

tong.....陽氣の義  
tawan ok .....太陽 出

支那では東も旦もつまり陰陽の陽の義で呼ばれて居るのであるが、暹羅では tawan ok 即ち出る日の義でそれで、東と云ふ方角が呼ばれて居る。つまり、日の出が東と云ふ尤もな考から出て居るのである。然らば西はどう云ふかと云

ふふ

三、 西

sai .....古音 tai で滯り留るの義。  
tawan tok .....太陽。 落。

支那で西はおちつくとか、滯るとかの義であらうと思ふが、暹羅では落つる日の義と呼ばれて居る。別の例であるが古朝鮮で、南を前の義で呼び、北を肩のうしろの義で呼べるなど此の方角に對する呼びかたは諸民族の間に面白く研究せられる問題である。

四、 雷光

lai-khang .....雷の光  
fua-lap.....空 lap 嘗める。

暹羅で空をなめると云ふ義が電光の義になつて居るのは甚だ面白い。尙雷のことと云ふ fua-long と云ふ。fua は空で long は音とか、歌とかの義である。

五、 霧

mu .....古音 bak か  
laon luon .....塵埃 fuong 雨

霧を雨のちりと見た呼びかた。之を暹羅で laon-luon と云ふ。支那の霧の字は察するに、霧そのものと呼んだ言葉でなく、霧が物を蔽ひかくすの義によつた



ものでないかとその語源上から思はれる。詳しくは後の研究にゆづる。

六、

漣 {lien ..... 小波の續く義か  
luk-lalük ..... luk 子 lalük 波

暹羅では luk-mo (犬の子) luk-kai (雛) などの luk の如く luk は子の義であるが、漣の時にも亦此の luk を用ひて波の子と云ふ義で呼ぶ。

七、

鳥 {u ..... 古音 ko  
ika ..... 鳴聲

八、

鶯 {yok ..... 古音 kok  
yihiyō ..... 鳴聲

九、

鳩 {kiu ..... 古音 kuk  
nok-kaō ..... 鳴聲

十、

雀 {chak ..... 古音 chak  
nok-ka-chō ..... 鳴聲

十一、

雛 {sū ..... 古音 chu  
luk-kai ..... luk 子 kai 鳴聲

十二、

梟 {keu ..... 古音 keu  
nok-fok ..... nok 鳥 fok 鳴聲

鳥の名稱は多くその鳴き聲によりて呼ばれて居ることは各國その例に乏しくない。茲に擧げた、鳥、鶯、鳩、雛、梟は支那、暹羅兩語にその鳴き聲で呼ばれて居るものである。鷄の音が支那で kei (今は chi) 暹羅で kai と云ふもその鳴き聲をうつしたものに過ぎぬ。

十三、

南瓜 {nam-kwa ..... 南國の瓜  
fak-tōng ..... fak 糸瓜 tong 黄金

暹羅の南瓜は黄金の瓜に見たてて呼びたるもの。Cambodia の地名に關係あるが如くに思はれるが、暹羅では全く別で、黄金瓜と云つて居るのである。

十四、

馬鈴薯 {ma-ling-cho .....  
man-falan ..... man 甘藷 falan 法蘭西の略か。

法蘭は外國の義に轉用したのか。つまり man-falan は「わたりいも」の義ならんか。馬鈴は falan の音譯にあらず。

十五、

柘榴 {shak-lu ..... 木の瑠璃。

[luk-tapin] .....luk 子 tapin ルビー (寶石)

ルビーが暹羅の名産なることは有名なり。そのルビーの寶石に柘榴のなかみが似て居るところよりルビーの子と云つて柘榴のことを指すのである。

十六、

苔

[kai] .....生へるの義。

[tak-lai-nam] .....taklai 微 nam 水

水の濕つばるところに微の生へた者と見て、之を taklai-nam と云ふ。

十七、

乳母

[niu ji] .....乳の母

[luk-on] .....luk 兒 on 軟

乳のみ兒を暹羅で軟兒と云ふ意味の語で呼ぶ。支那の兒は暹羅の luk にあたる。

十八、

盲人

[mang-jin] .....目のなき人の義。

[ta-bot] .....ta 目 bot 無。

暹羅の bot は支那に之にあたるものを求めると、沒趣味の沒 bot にあたるもので、無の義である。沒目の義で即ち盲人の意を作つて居る。目は目の義であるが、支那に之にあたる語は未だ氣附かない。

十九、

涙

[lu] .....續き、重なる義。

[nam-ta] .....nam 水 ta 目

支那の涙と暹羅の涙と其の意味は全く別である。暹羅の nam-ta はさながら日本語か、又は、朝鮮式で目の水と云ふ義を持つて居る。日本のナミダはナは目の義、ミダ mida はミヅ mizu と同義で水のこと。つまりナミダは目水の二語より成る。暹羅ではそれがさかさまに結合される。

[gakai] .....その聲。

二十、

咳噓

[sak-uk] .....シャクリ聲。

咽喉にシャクリを催したる時に出るシャクリ聲、行きつまる如き聲をする。

sak-uk と暹羅語に云ふ。これ即ちその寫聲語なり。尙クシャメ (噎) をなす時の語に attchoi と云ふも同理である。又アクビ (欠伸) を haonong と云ふ。

hao は即ちアクビ聲なり。

二十一、

銅

[tong] .....鳴り音か

[tong-den] .....tong 黄金 den 赤

暹羅では赤味を帯びた黄金となつて、それで銅のことを云ふ。尙日本で鐵をク

ロガネと云ふと同じ心もちなり。鍍物を色にて呼びわけするは諸國の語に最も普通に見るところである。青銅、白銅またこれが部類に這入る。

二十二、真鍮

{chin-chiu ..... 鳴り音か。  
{tong-luang ..... tong 黄金 luang 黄

黄色のこがねと云ふ義で真鍮をあらはすなり。

二十三、大根

{a-puk ..... 蘿蔔  
{foa-pakat ..... foa 頭 pakat 野菜

暹羅では大根のことは野菜の長と云ふ義である。

二十四、算盤

{tsan-pan ..... 算用の盤  
{lok-kit ..... lok 玉 kit 考。考へ玉。

二十五、自轉車

{tsu-hsing-cho ..... 自行車  
{lot-tip ..... lot 車 tip 蹴ろ

自轉車は英語では兩輪の義で組み合され、支那語では自ら行く車の義。日本で自ら轉する義。それが暹羅では蹴る車の二語で組み合されるのである。馬車を lot-ma と云ふ如く lot はすべて車の義である。

此の外なほ暹羅では巡查のことを polī と云ふ語があるが、これは英語からの外來語である。茲に出すべきものでない。總じて暹羅の複合語は國民の考へかたの支那語と相異なるものは又その語の組み立てに相違が現れて來るのである。けれども又中には同様の思想の結合で出來て居るものもないのではない。左にその例を擧げて此の節をむすぶことにする。

一、養子

{yang-tze ..... やしなひ子。  
{luk-liau ..... luk 子 liau 養

二、大可

{tai-ka .....  
{di-māk ..... di 善 māk 非常に、甚だ

三、少女

{seo-jo .....  
{nung-sao ..... nung 若い、sao 娘、

三 單 語 表

單語の比較及びその組み立ては大略かくの如しである。然し暹羅語のうちには尙明かに支那語に比定されると限つたものばかりでなく、支那は支那獨特に、暹羅は暹羅獨特にその發達をなして今では非常な懸隔を生じて居る。たとひ、聯絡のあつたものでもその何れと何れとを比較してよろしいか、

關係のわからないものも少なからず見出される。いづれ後の研究に依りて或は比較され得る手掛りがいつか発見されるかも知れぬが、茲にはたゞ有るがまゝに今の暹羅語を書きつく。即ち、次の如し

- 兄……………pi 'cai
- 姉……………pi sao
- 兄弟間……………pi-nung-kan
- 主人……………nai-yai
- 皇族……………nai-klom
- 眠る……………lap
- 誤る……………pit
- 計算……………kit
- 可笑……………kiet
- 種々……………tok-tok
- 落る……………tok
- 裂く……………cik (上音)
- 善……………di
- 弟……………nung 'cai nung は若いの義。
- 妹……………nung sao, sao は娘。
- 極めて親しい間柄のこと。
- 長上……………nai

- 先生……………klu
- ラッパ……………kle
- クハ……………paka
- 支那筆……………paka-cing
- 天……………sawan
- 地……………ding
- 星……………dāo
- 山……………pukao
- 川……………menam
- 海……………tale
- 池……………sa 支那古音がsa.
- 太陽……………pla-atit, tawan
- 月……………pla-cang
- 時計……………nailakka
- 地震……………ding wai
- 教師……………klu
- 材木……………cik
- 大……………di māk
- 支那の清……………cing 清筆の義。
- 大川……………menam メーナムは母河の義。
- 或は關係あらんか。
- 日(曆)……………wan
- 月(曆)……………duan

雨……………fuong  
 寒……………nao  
 暑……………long  
 涼……………zien  
 濕……………piak  
 犬……………ma (上音)(去聲)  
 鼠……………nuo  
 水牛……………kuai  
 兔……………kat-tai  
 豚……………nou  
 虎……………sua  
 鳥……………nok  
 鶯……………hang  
 あひる……………pet  
 魚……………pla (aは長音)

猿……………ling  
 鹿……………koan  
 獅子……………sing to  
 熊……………mi  
 豹……………ping

十萬……………sen

第一……………ti nung

蚊(蛾)……………yong

蝶……………pi-sua

やまゆ……………jit-cok (鳴る聲)

鳴……………dang

悲鳴……………long-hai

音色……………sui-ang-siang

味ふ……………king

見る……………ju

香……………hom

臭い……………meng

にかい……………kom

蒸す……………numn

煮る……………tom

第二……………ti song. ti 第二

鳴るなご……………me dang. me 第二 mai.

飲、食……………king

乳……………hom  
 酒……………lau  
 米……………kau  
 粥……………kau-tom  
 顔……………nā  
 口……………1. pak 2. pla-ōt  
 鼻……………cang-muk  
 毛髮……………kom  
 目……………ta  
 頭……………foa  
 腕……………mu  
 脂……………niu  
 腹……………tōng  
 陰莖……………koi  
 黃金……………tōng

1. 一般 2. 皇族

手足……………nuka

tōngのoは開きたるoなり  
 陰門……………hi

銅……………tōng-den  
 鐵……………lek  
 真鍮……………tōng-luang  
 亞鉛……………sang-ka-si  
 金剛石……………pet  
 王宮……………nai-wan  
 屋敷……………wan  
 住家……………ban  
 寺院……………wat  
 塔……………pla-pla  
 屋根……………bong-ang-ka  
 二階……………kang-bong.  
 橋……………tapang  
 梯……………ka-dai  
 芝居……………lo-kong

赤……………den  
 黃……………luang  
 王……………nai  
 室……………hon  
 門……………pato  
 佛、僧……………plaのaは短音  
 上の方……………kang-lang. bong は上  
 下の方……………kang-lang.  
 役者……………kon-lokong 壯士役者 kon ilkei

稻……………kau-na	麥……………kau-swai.
豆……………tat	野菜……………pakat oa は頭、長、
大根……………foa pakat	地方……………non nok は遠 <sup>ル</sup>
田舎……………mon-nok	
市場……………talāt	
追加の部	
空……………fua	
望月……………sip-ha-kam	sip 十 ha 五、kam 晚
流星……………dao-hān	dao 星 hān 尾
曉……………lung ebāu	chāu 朝
朝……………chāu	
晝……………kan wan	kan 間 wan 日中
夕方……………yuen 又 wella-yen	wella 方(時) yen 夕
晚……………kam	
夜半……………klan-ūm	klan 間 kun 夜

夢……………wang (下平)	
正午……………tiyen	
昨日……………moa-wani	
今朝……………moa ča ni	moa 既の義の prefix.
今日……………wan ni	wan 日
明日……………pū ni	
只今……………pladio-ni	pladio 只 ni 今
今年……………pi ni	pi 今 ni 年
備考春夏秋冬なし	
雨季……………nā fuon (下平)	fuon 雨
乾季……………nā lien	lien 乾
雲……………mēk	
東……………tawan-ok	tawan 日 ok 出
西……………tawan-tok	tok 落
南……………nua	

北……………tai	
風……………lom	lom 嵐 (lam) にあたるか。
備考雪なし	
雷……………fua-long	fua 空 long 音
電光……………fua-lap	fua 空 lap なめる、ねざる、
霧……………laon-fuon	laon 塵 fuong 雨
野、原……sa-nam	sa 草
田……………na	
島……………sowang	
山……………kau	
何々山……pukao	
峯……………yot-kau	pun 邊 (pen)
嶺……………yot	
山麓……………pun-kau	ding 土地
土……………ding	

泥……………klong	
道路……………sa-nong	ta-nong (文章語)
橋……………tapang	sa-pang (文章語)
石橋……………tapang-hing	hing 石
水……………nam	
泡……………fuon	luk 子 laluk 波
小波……………luk-laluk	
海……………tale	
島……………kok	
濱……………fuan	
岬……………jen	
岩……………hing(上聲)	hing 石
沼……………nong	
小川……………klon	me 母 kong 隊
備考 Mekong	



渡場……………ta-luac'uan

ta 場 luac'uan 船 c'uan は船の字音か。

獸……………sat

皮……………nan (下平)

尾……………hon (上)

爪……………lep

牙……………nga

小馬……………ma klep

牛……………owa

羊……………pe

雄犬……………tuo pu

雌犬……………duo mie

犬の子……………luk ma

蝙蝠……………keng-ka

嘴……………pak nok

鳥の巢……………lang nok

lep-sat 獸爪 lep-sat 人爪

nga 象牙 kio 一般牙

klep 小

owa (文章語)

pu 牡

mie 牝、妻

luk 子

keng-ka (文章語)

nok 鳥

lang 巢

鳥籠……………klong-nok

鳥……………ika

鸛……………yihyō

鳩……………nok-kaō

雀……………nok-ka-chōk

雛……………luk-kai

鼻……………nok-fok

鱗……………plek

毒……………pit

貝……………hoi

蛇……………gwu, ngu

蜥蜴の子……………chingchai

鳴く蟲……………men-long

螢……………hing-to

蚊……………yung

klong 籠

ika (啼聲か)

yihyō (啼聲か)

kaō (啼聲か)

chōk (啼聲か)

luk 子

fok (啼聲か)

men 蟲 long 啼

hing fai (文章語)

蠅	men-wan	men 蠅 van 日
蟻	mot	
米	kao	
藁	fang kau	
玉蜀黍	kao pot	
栗	luk-kaola	
へんち	fak	tong 黄金
南瓜	fak tong	teng 瓜
西瓜	teng mon	
甘藷	man	
里芋	pu gao	
馬鈴薯	man-falan	falan マンイン
筍	no-mai	no ひんばへ mai 木
竹	mai-pai	pai 竹
果物	luk-mai	luk 子 mai 木

備考	pong na-mai	pong 役に立つもの
梅	lak-chiom-boi	bai 梅か
柘榴	luk-taplin	tap tin ルビー (寶玉)
葡萄	ang-ngun	som 蜜柑
橙子	som-sa	
花	dok	
蕾	dok fup, fup	
生ひ樹	tong mai	mai 木
根	lak mai	
枝	king	
葉	bai	
草	sa	
蓮	boa	
苔	taklai-nam	taklai かび nam 水
鉛	tak-kloa	

石油……………nam-man-kat	nam. man 油
砂……………sai	
孫……………lou	
曾孫……………len	
夫……………poa	Doa-nia 夫婦
妻……………mia, panm-a-ya	
養子……………luk-lian	luk 子 lian 養
老人……………k'ie t'ao	
兒童……………dek, luk	
乳兒……………luk-on	on 軟
坊主……………pla	
相撲……………chok-moi	
女芝居……………pleon	
大工……………chang mai	chang 細工 採る
象狩……………klong chang	chang 象 klong 採る

農夫……………chao nai	nai 田舎
盜人……………kon kanoi	kanoi 盜む
乞人……………kou kotang	kotang 乞願
盲人……………ta-bot	ta 目 bot 滅、莫
なまけものkon-kikie	kon 人
おしやべのchang-pöt	chang 細工 pöt 話
醉拂ひ……………kon-kimao	
頭……………1. foa, 2. shisha, 3. shigen.	1. 一般 2. 長者 3. 貴族、皇族、
頸……………1. kō 2. sō	1. 一般 2. 皇族
舌……………ling	
唇……………jing pak	pak 口
齒……………fuan	
顎……………luk-kan	
髯……………noat	
皮膚……………nang	

骨……………pla-douk  
 血……………lua  
 肩……………ba  
 胸……………ok  
 胃……………kla-po  
 袋……………tong  
 手……………mou  
 指……………niyu  
 爪……………lep  
 足……………1. ting 2. ta  
 鼻汁……………nam-chamok  
 唾液……………nam-lai  
 涙……………nam-ta  
 汗……………hua  
 尿……………1. diyō 2. pa-sana

溜溜  
 1. 一般人 2. 皇族  
 nam 水 chamok 鼻  
 nam 水 ta 目  
 1. 一般人 2. 皇族

病氣……………penglok  
 吃……………peng-ang  
 咳嗽……………sak-uk  
 嚏……………attchoi  
 欠伸……………haonong  
 シビレ……………cha  
 着物……………sua  
 衣服……………pa nung  
 枕……………mōn  
 家……………1. blan 2. luan  
 戸……………plato  
 池……………bō  
 佛……………pa-pot-lūp  
 車……………lot  
 馬車……………lot ma

peng 氣 lok 病  
 peng 氣 ang 吃  
 その聲  
 その聲  
 pa 衣 nung 着

人力車……lon·chek	
自轉車……lot·tip	tip 蹴る
生れる……peng	
死ぬる……tai	
首府……kulunglêp	
州……mon·tong	
縣……moan	
郡……ampao	郡長所在地……ampao
村役所……kam·nang	
庄屋……pu·yai	
會長……te·sa	知事……'cao·moan
貨幣……ngon 銀音?	小錢……'ât
六七拾錢……tekol 又 tikal.	tekol は 64ât 最近には tekol を 100 stanz に分る
支那錢……bak·nung	錢名……silin (16ât). fuan (8ât). sompai (4ât)
	pai nung (2ât.)

### 四 音 韻 表

前節に述べた多くの單語のうち音韻上特に注意す可きものは次ぎの諸音である。

一、三種の入聲音の存在すること。

- (1) k の入聲 { tok ……觸れる……sok (支那)  
nok ……鳥
- (2) t の入聲 { wat ……寺院  
pet ……八……pat (支那)
- (3) p の入聲 { sip ……十……sip (支那)  
lap ……眠る

二、三種の鼻的語尾音の存在すること。

- (1) m の鼻音 { kem ……鹹……kam (支那)  
nom ……乳
- (2) n の鼻音 { mun ……萬……man (支那)  
kien ……堅

- (3) ngの鼻音 { dŋing ..... 聽 ..... ŋing (支那)
- { luang ..... 黃

三、語頭音に二重子音の存在する事。

(1) kとlとの結合

- kljed ..... 嫌ふ。
- klai ..... 孰れのもの。
- klan ..... 間
- klong ..... 籠
- klom ..... 王族
- kleon ..... 採る。狩る。
- klap ..... 立ち返る。引き返へす。

(2) pとlとの結合

- { plik ..... 巻く
- { pladio-ni ..... 只今
- { plā ..... 魚
- { plā ..... 佛

茲に掲げた(一)入聲(二)鼻的語尾、及び(三)語頭の二重音の存在の三大現象は單に暹羅の音韻研究

資料として必要なるのみならず、之を支那の音韻に比較する上、又は支那の元始的音韻起源を研究する上に、有力なる外部の傍證となるものである。支那に於いても古書に現に、筆のことは不律 *plie* と云ふと云ふ如き場合があるのを以つて見ても、如何に類似音韻現象の比較の興味あるかを察せられるのである。此の側の研究については第二編第五章第五節有史以前の *k, t, p* についての攷を参照せられたし。詳細はそれにゆづりて今茲には贅言しない。

支那語系統の諸同語族中ても此の *Tai* 語の音現象は時として頗る他の單綴語のそれと趣きを異にして居る。殊に茲に最後に示したやうに二重子音を多く有して他の同族語と區別して觀ぜられるところは宛かもゲルマン語族中 *ボヘミア* 語が獨逸諸方語から著しく變つてむしろ露西亞語に似た形式を有するのとその轍を同じうして居るのである。

*ボヘミア* 語の音韻は獨逸語よりもクロアト、又はセルビア等の方面に近く、その言語形式は大略次の如きものである。

- držeti* ..... 保つ。
- hladov* ..... 空腹の。
- hlaritě* ..... 聲高<sup>々</sup>。
- hluchnouti* ..... 聾の。
- hnedý* ..... 褐色の。
- hrieh* ..... 罪惡。
- mlady* ..... 若<sup>々</sup>。
- kdy* ..... 何時。

lidsky .....	人間の。	krásný .....	美しい。
ptacnik-a .....	鳥屋。	skrzý .....	に依つて。
tláčiti .....	壓搾。	vzdy .....	常に。
vzad .....	後へ。	včela .....	蜜蜂。
zprávay .....	新聞。	zidka .....	稀い。
zjevovati .....	指示。(Josef Masarik—Böhmsche Schulgrammatek 1889 参照)		

獨逸語とボヘミア語(チェヒス)との相違は勿論支那語と暹羅語との相違よりも更に甚だしいものである。けれども土地を接して居ながらその言語上の懸隔甚だしい點に於いては兩者あまりにその關係はちがつて居ないと云つても過言でなからうと思ふ。暹羅語と他の單綴語族との比較研究をなすには絶えず印歐語族内の諸國語の研究を比較にとりて進まなくてはならぬ。これは他山の石を以つて我を磨くの類で、或る程度までは種々参考となる點が多いのである。

尙吾人が特に茲に本章を追加した所以は所謂支那語の研究が唯單に支那語だけの研究にとどまつて、その外部からの比較研究の必要を忘るゝものがあるから研究法上の一資料にとつて社撰を顧みず茲に載せた次第である。

## 第十九章 田舎にちなめる言葉と文字

田舎にちなめる言葉並びに文字に就いて日頃自分の調べて見たものうち、多少興味のあるものを左に摘録して見よう。尤もこれは自分が獨創の見解のみのもではなく、既に前人の闡明せるところのものも少なくはないので唯それに音韻言語の方面の觀察を加へたところは聊か自分の考へであるのである。此の點は先づ斷はつておく。

田舎の町村に關係のある文字は見る人の觀方によつて如何やうにも見られるであらうが、茲に觀察するものは主に自然に關係のあるのを採りて述べるのである。殊に田畑に關係のあるものを採つて觀察しようと思ふ。

### 一 土の字と生の字

土地の土の字は今日では云ふまでもなく、十の字と一の字とで構成せられて居る。然し文字のもとを云へば此の十は數字の十ではなくて、支那の上代では、此れが次ぎに示すやうな形で現れて居る。即ち、



散氏盤、積古



南宮中  
鼎、嘯堂



宗周鐘、積古

の如きものである。此の古文の形より推して考ふるに説文に「土は土地之吐萬物者也」とある如く、土の字は何か土地より生ひ生じたものを象形にとつたものと見られる。つまり横棒は云ふまでもなく地面を表はし、縦棒は即ち、やつと地面から出たての小苗を表はしたものである。その小苗の芽の萌え出るところが地面に在ると云ふ點で之を土地の象形としたものである。果して然らば土の字は十の字と關係はないものである。十の字の方は古人の説では東西を一とし南北を一として交錯させて作つた文字であると云つて居る。とにかく、植物にはもとより何等の因縁のない文字である。

固より古文に於いて、牧敦、又は齊刀文（金索）などには十と一とで出來た土の字も見えては居るが、その十はやはり、萌芽の變形と見る可きものであらうと思ふ。此の芽の象形（土の字）中まん中の膨れたるところを一の字に書いて、つまり之を十の字とする例は他に王の字千の字などにその類例を見出すのである。左にそのうち王の字の古文を擧げて見よう。



王の古文、一



王の古文、二

これは書く上の都合から次第にかやうに改められたものである。いづれにしても土の字の成り立ちが萌芽を吐いて居る象形なることは以上の如くである。而して、此の土の原義はその土地と云ふ轉義を取るに至つて、原義を失ふに至つた。然し却つて吐の字にそれが残つて居る。口より吐き出すのも地面より萌え出づるのもその出づる點に於いてはかはりはない。之を言葉の方ではト(㊦)又はツ(㊧)と呼ぶのである。土をツチと訓するそのツ(㊧)は既に白石ハクシヤクなども云へる如く土の字音として見られる。

上述の土の字に密接な關係を有するもので尙此の外に「生」の字、「之」の字など種々の字がある。「之」の字の方は茲に暫く省いておくが、(第二編第十章一参照)生の字の方はこれ亦土の字と頗る興味ある關係を有して居る文字である。

先づ生の字の古文の形を茲に示して見ると、次ぎの如きものが見られる。即ち、



史頌敦、筠清



毛父鼎、嘯堂



長生敦、積古

かやうに生の字と土の字とは古文の字形上から云へば、事實上唯僅かに地面から萌え出た芽が更に二葉の芽を出したと云ふ差異を有するまでである。それ以上に甚だしい差はないのである。



若しそれ言葉の音の方面より云ふ時は、土の to に對して、生は shank (日本音は訛音也) の音であつて大なる差を有し又その後世の意味も互に相遠くちがつて居る。言葉としての生はむしろ、別に成の字の方と音、義共に密接の關係があつて、土の字の方とは比較的遠い關係になつて居る。然るにそれが文字相互の關係になると、その成り立ちの素との構成法から云ふときは生と土とは極めて密接なること上述の如しである。

尙茲に考へ併す可きことは、在所、在方など云ふ時の在の字である。在の字は兩漢三國時代の墓碑銘、石刻にも屢見られる如く、素とはナ<sup>ナ</sup>の字と土の字で構成せられて居る。尙漢代の文献上では才の字と土の字とで示されて居る。才が在の字の音符であるならば、一方の土の字はその意義の符號でな



在の字、一  
南宮中鼎



在の字、二  
靜貞

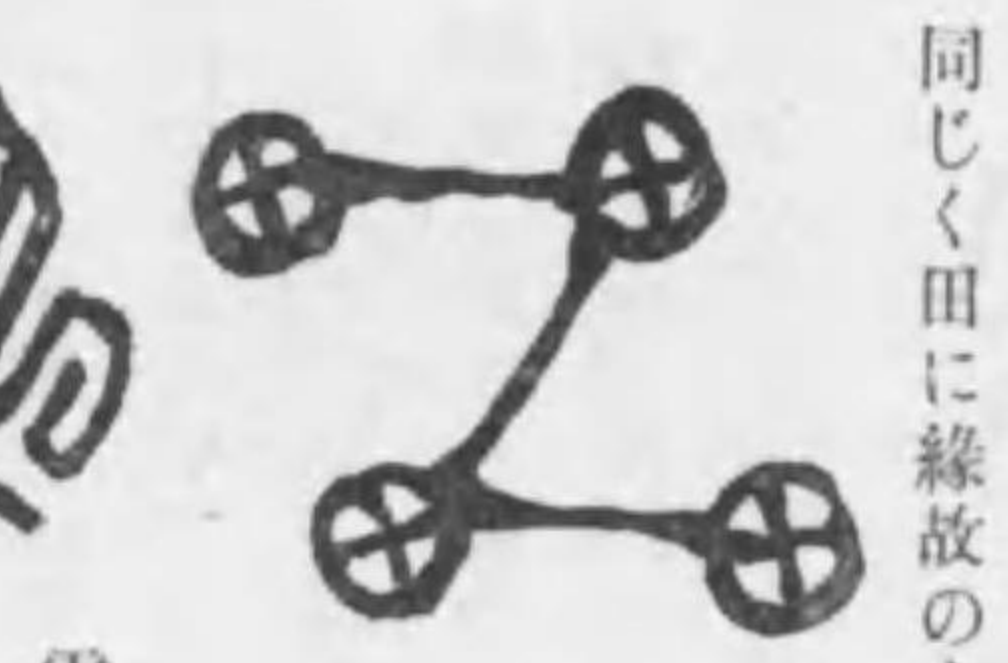
であつて、猶萌芽、又は出づるの義を有して居る言葉の音である。

然るにその字形は鐘鼎古文に於いて明らかに才の字として見えて居る。之が土との結合で見えたものは少なく、普通はたゞ例の十の字なりの象形でその中央に芽の包まれたる如きものの書かれたるものを見るのである。こは明らかに才の字の古文にして、後世の在の字の前身たる可き文字である。音が

才 (三三、一四二) であると同時に又その意義に於いても萌芽にちなめる心持を有せる文字である。

在の字の偏が素と才の字でなくてはならぬのに、今日では一種異様の形になつて來た。これは存の字などの類推に支配されて生じたものであつて、存の字も正しくは素と才の字の偏に書かれなくてはならぬ文字である。後世の楷書に現れて居る一般の形を以つて古文を揣摩臆測することは到底不可能のことであるから、茲には楷書の如何に係はることなく、古文を本として觀察したのである。

### 二 田の字に縁故ある文字



雷の古文  
楚公鐘

雷の古文  
とである。

石鼓文

かやうに見て來ると、普通田の字に見えて居るもの必ずしも田の字

に關係があるときまつては居らぬ。然らば實際田に縁故のある文字は如何なるものがさうであるかと云ふと、事實上は甚だ少ないやうに思ふ、左に述ぶる書、疆男の三字は、然したしかに田の字と深い關係のある文字である。

其の一 書 の 字

研究上の立ち場から云ふ時は、もとより、書の字の一字についてもその構造が聿の字の下に周の字の如き字の現れたるものがある。寅簾、又は牧敦などに見ゆる如きものがその一例である。然し自分は説分の文面にある書介也从聿象田四介を最も正鶴を得て居るものと信ずる。



書の古文一  
毛公鼎、古籀補

けれども更にその古いところを詮じて見れば書は素と書の字と、田の字とから成り立つて居るものである。毛公の鼎にその古斑の形が明かに見えて居る。高田忠周氏の説参照。

なほ高田氏の説に従へば中間に含まれたる田の字はその周圍にあつた の形が省かれたものであるとのこと。これは恐らく同氏の説の通りであらうと思はれる。然しこれは書の字と田の字との組み合せ上自然とその意味は生じて来る。これが漢代頃から



畫の小篆、説文、

以後の形では多く田の周圍に四方のかこひが劃されて書かれて居る。小篆に於いても、それ故上述のやうに書かれて

居る。今日の楷書ではやゝもすると田の字の下に一の棒ばかりが引かれて居るのは不足せるわけで、此の小篆を本とすると四方にかこひを施さなくてはならぬわけである。しかし、古文のうちには又次ぎの如きものがある。即ち、



畚の古文二  
吳尊、古籀補

鐘鼎古文に現れた書の字はかやうに色々の形がある。この書は已に示した書の古文一から脱化したもので、尙やはり書の字と田の字との合體文字である可き筈の文字である。然るに茲に示した吳

尊畫の字は一見奇なるが如きもその田の字の上に交錯して現れて居るものは者の字の一部分名残りをとめて居るもので、者の字の下の日が取り除かれたものと見れば理解され易くなる。と云ふは、書の字の元來の構造がもと聿の字と者の字とで出来て居る文字である。従つて書の字にその者の字の一部が残つて居ることは偶然ではない。今比較の爲めこゝに書者兩字を示しておく。



書の字、泰山石刻



者の字、説文

此の兩者を見くらべて以つて、書の字の古形に及ばしその形の偶然でないこと

がわかるのである。

尙書の字についてはその複合の文字として畫の字を偏に、刀を旁りとしたる劃の字がある。これは

説文にも錐刀曰割とありて、書とは別義である。つまり割の方は限り削り、筋目をつける器具を指して云ふのである。書の方は唯さかひ目をつけると云ふ義である。何にさかひ目を施すかと云ふと、田地を区分し介別するの義である。それ故に書には田の字が含まれて居るわけである。割然と田畑の領分を定めると云ふがその義である。されば古文が書に従ひ、田に従つて出来て居る所以は蓋し田の領介を書せし故であらう。

かくの如く書の字は素と、かつきりと、田地の界を區別してきめる義から出来て居る。然らばそのことをなせカク (kak) 又はクワク (kwak) と云ふか。これ頗るむづかしい問題である。けれども言語學上から推して考ふるに此のカク、又はクワクなる言葉はその文字構成の原意に頗る類似せるところがあるやうに思はれる。支那上代の言葉で kot 又は轉じて kat なる言葉は多く殺伐なる意味を有し物を打破る、分割する、決別する、捕獲する、區劃すると云ふやうな心持ちが含まれて居る。書の古音も亦このうちの何れかに聯絡するところがありはしないが、暫く記して後の研究を俟つ次第である。

其の二 疆 の 字

疆は境界の義で、疆域などの熟字を形成して居る文字である。疆に似た文字の疆の字は後の強の字にあたるもので強しの義である。後世では疆と疆とはかやうな區別で違つたものとせられて居るが、鐘鼎古文の上では必ずしもその區別はなく多くは疆を借りて疆域の疆のところに代用して居る。

一説には疆は疆の字の或體とみなし、疆を以つて正字として居る (説文参照)。然しこれは猶白と伯、乍と作との關係の如きものであれば必ずしも疆の一方のみを正體としてみなくともよろしからうと自分は思ふ。けれども本來疆の字の構造は直ちに其の形の上に現れて居る如く、田地と田地との境界を區劃したところを示して居る文字である。

疆の古文

伯角父敦

疆の古文

中師父敦

後世でこそ邦國の領域を呼ぶに疆域なると云ふて居る。がその素とは、初め田地と田地との境を意味する文字で表彰さ

れて居るとは少しく合點がいかないやうである。併しかゝる例は一般言語現象上などにも多くある現象で敢へて珍とするには足りないことである。次に茲に面白いことはその疆の字が初めの疆の字に附加するに、武器の弓を以つてして居ると云ふことである。

疆の古文

銘動鐘

疆の古文

孟姜敦

吾人は常に國 (或) の字に戈の含まれて居ることを以つて殺伐の風習が連想せられるのであるが、田地の境に弓が備へ

られて居るところを見ると尙殺伐の光景目のあたりに見る如き心地がする。田圃と武器とは上代より

離る可からざる關係があつた者と見える。兵農同一制度、屯田兵などの方法と同じ方法の存せしことは此の文字を玩味することに依つて察知せられるのである。

かゝる字形の構造より考ふるときは亶と弓との兩部分にて已に境界の義がさとられる。又それだけでその意を示すことが十分に出来る。これ鐘鼎文に疆が境の義に用ひてある所以である。何ぞ必ずしも疆を以て疆の假借などと説かなくとも立派にその原義は知られるのである。けれども、然し、文字は理屈の通りには行はれるものでない。猶言葉に豌豆と云つた上に更に、餘分のまめを加へて「豌豆まめ」と呼ぶが如く、疆が尙土地の境界たることをあらはす爲めに之に土の字を附加して玆に疆の字が出来たわけであらうと考へる。

疆の字の形については大略かくの如きものである。尙その音について疆の音キヤウは古音 kang であつて、その音符は云までもなく亶である。亶はそれ故意義や示すと同時に又音をも示して居る符牒である。kang は支那上代の言葉で多く廣大の義をする音なるが、果して此の場合にそれが適用される可きかどうか、此の點は未詳であるから暫らくこゝには斷定せずにおかうと思ふ。

其の三 男 の 字

田の字に力は之をダン(男)と云ふ。これは極めて普通のこととて今更らの如く云ふ必要はない。その田の字も、田畑の田で之に何等の疑ひもないのである。唯玆に觀察せんとするは、むしろその力と

云ふ方の字である。力と書いたものをなぜ之をリヨクと讀ませ、チカラの義をもたせてをるのである



力の古文 其の一



力の古文 其の二



又(手)の 古文



爪の 古文

か。之を観るには先づ力の字の古文を又(手)の字、爪の字のそれに比較して見るが捷徑である。

これ等の比較によつて見ると、力と云ひ、又と云ひ、爪と云ふ。其の象形なるものの上では大なる差は認められない。然るに此れが今日の楷書の上で見ると大なる相違が生じて來るに至つた。尤もこれは既に古文が小篆になるまでにかかりの變化が生じて居たのである。左に説文所録の小篆を比較の爲めに列擧して置く。



力の篆書



又の篆書



爪の篆書

これ等は何れも素と何の象形であるかと云ふに皆手の特徴を書き別けた象形である。今その三者の特徴を擧げて見れば、次の如くなる。即ち、

- 一、力は 腕の筋肉を示し所謂腕力を表影せるものである。

二、又は 手のはたらきをなす指を表彰せるものである。もと手は五本指が書かれて居たものであるが、漸次省けて三本だけを残すに至つた。

三、爪は手のうち指さきの爪の部分の特に表彰したものである。

素とかくの如き意味で出来て居る故、力の字からは助の字、勞の字、務の字などの如く筋肉の勞力に關係ある文字を作り出し、又の字からは、取の字、友の字、右(祐)の字、左(佐)の字、史(叟)の字、支の字などの文字を拵らへ、爪の字からは爲(猴)の字、争の字、受の字などを作つて居る。以つて此れ等の字義の區別と起源とを推知することが出来る。

さて、男の字に於いては此のうち力の字が含まれて居ることは最も理に叶へるわけである。殊に田の字と力の字とで配合したところはよほど興味のあるところである。婦の字が箒草を持した象形で出来て居ると同様に男の字が田と力とで出来て居ることは共にその仕事の役目を示して居る文字である。然るに此の男はまゝ田の字の下に力と爪の書かれて居るものが見出される。力爪兩者同起源な



男の古文、一

叔姬寺男膝簠

(口輪周器銘参照)



男の古文、二

齋矣錡



男の古文、三

遣小子師敦

りとは云へ雙方の併用せられるは贅物と思はれるが、事實これは吉金文に散見するところである、今茲にそれを示し併せて男の字の古文をも列挙しておく。

説文に男は丈夫也从田从力言男用力於田也とある。上來述べた文字の構造を知つて此の文句を玩味する時は無限の趣味を感じ又上代支那の農業本位なりしことも察せられるのである。

さて男の字の構造はかくの如くである。が今その音に就いて見るに此の男の音がナム、nam又はdamの音なることの理由に就いては前人に未だその説あるを聞かない。案するに支那語の單綴語のうちで nam, dan と云ふ綴音はそのかず甚だ多くないのである。

思ふに dan の音はもと nam の音の訛音であつて、その nam と云ふ言葉は單に支那語内部だけでなく、ひろく西藏方面にもその系統を引いた語が存して居る。然るに支那に在りては予の淺學なる未だ「南」と「男」の兩系統文字の外に殆どその音字の場合を見出さないのである。然らば此の nam と云ふ音は如何なる意味を有する言葉であるかと云ふに、

nam——暖き義、濕潤生熟の義、繁殖の義、

を有する語であると考へる。これはその文字時代に這入つて假りに南の字を金石文の上で解剖して見てもその原義は汲み取られるのである。(高田氏の直話期せずしてこれに暗合す)。

印度支那殊に暹羅方面では nam と云へば今日必ず水、(大河)の義となつて使はれて居る。Menam

の如きその一例である。又 nam-kien (水堅——水の義) などの語もある。此の水を nam と云ふも遠き古代のことは未調査であるが愚案では、「南」と同起源に出でた語であつて水は物を生熟せしむるものであるところからその名稱が起つて來て居るのではないかと思ふ。然しこのことは後日更に別の研究にゆづりて茲には省略しておく。

### 三 禾の字より出でたる文字

禾の字が素と穂の垂れた稻の象形なることは屢々述べたところであるが、茲には更に此の禾の字の系統に屬する文字について二三の例を擧げて見よう。

支那はもと何れの國も同様に農業本位の國であつただけにその文字上に表れたものも中々多く且つ中には甚だ巧みにその思想が字形に現れて居るものがある。休息の休の如き素と上代では人に禾である。吾人は尙他の例で觀察して見よう。

#### 其の一 穆の字

禾の字で三代の祭祀用古銅器の銘に最も多く現れて居るのは複合文字としての穆の字と年(禾と千)とである。先づ穆の字に就いて觀察して見よう。

穆は鐘鼎古文では偏旁その處を異にし禾の偏の方が反つて普通は旁となつて居る。その構造上、禾

はその義符であつて、穆はその音符である。つまり穆は音 bok で麥の bak と同様に穀名を指したもので説文にも禾也と説いてある。禾穀は農本の時代には最も大切なことで、その豊作を國の最も目出度いしとせること、日本も支那もかはりはない。睦じきことを同じく bok と云へるも、い

くらか語源上似たる縁故が此の間にありはしないかと思ふ。

さて穆を穆穆たる文王などと敬意の義に用ひ、和親の義に用ひ、饒多の意にも用ふ。何れも皆敦厚、



智鼎

遲父鐘



戊彝



鄒惠鼎



虢叔編鐘

目出度き心持ちである。何れもこれは農業にちなみ、その意は禾の字より出で、その言葉の音は穆より出で居るのである

さてその字形は古文に如何に現れて居るか、之を吉金文に徴すると、茲に列擧した如きものを得る。

此の外に尙穆の古文は鐘鼎文の上であまた見出される。茲に最後に示した鄒惠鼎の穆の字は阮元が積古齋卷の四に載せたもので阮元自身は之を鳩の字に獨斷して居た古文である。我が吉金文會の河井仙郎氏之を研究調査して、そのもとが穆の字の一部分殘缺したものなることを發見せられたるに依り

茲に特に掲げておく次第である。移の字が禾と關係あること以上の如しである。次ぎには年の字に就いてその禾の字との關係を觀察して見よう。

其の二年の字

夏殷の古銅器は別として周代の祭器にはおきまりの文句、眉壽萬年、永實用、又は其萬年子々孫々永實用享などの結句が必ず見出される。其度毎に年の字の古文はきつと見當るのであるが、その何れを見ても一として禾の字との關係の知られて居ないものはない。



年の古文、一  
伯鬲鼓



年の古文、二  
兮中鼓

これは劉心源の奇觚室吉金文述から取つたものであるが此の種の古文は決して珍とす

るに足りない位たくさんある。

年の字の構造はもと禾と千とに従ひ、その千は初め人の字に起源を有して居る文字である。年の音のネン *nen* は人の音ニン *nin* より出でたものと考へても大なる差はない位である。兎にかく、人にして千にしても年の字の音符たるに過ぎぬ。その年の字の本義は飽くまでその禾の字の部分から出て居るのである。殊にその穂の實の充實せるところより起れるものである。説文にも年は穀熟也从禾

千聲と説いて居る。爾雅には夏曰歲、商曰祀、周曰年云々とある。周の建國が農にありたることは此の文字上にも見えて居る。即ち一度禾の成熟する期間が丁度一ケ年を要するの義の構造である。茲に於いて一歳の意に年の字を用ふるのである。今日の楷書にはつゆだも禾の字の含畜が見えて居らないが、これは正しく篆書以上の形に遡れば明かである。

それ故に支那の年の字の古義は天文上から割り出した一年ではなくして、全く農事にちなんだ字義に起つて居ることを注意しなければならぬ。年の字を後世一つに稔に書く。これ又農事に關係せると勿論なるが此の字の音は年の音 *nen* とは違つてネム *nem* の音である。稔 *nem* はもと *nam* の音、*dam* の音などからの轉音であつて、言葉としての系統はむしろ、成熟の義を有する言葉（前節男の條を参照すべし）に密接の關係のある文字である。然しその禾の熟するの點に於いては兩者かほりはないので、年稔同様に使用せられて居るのである。

次ぎには禾の字より轉じて、更に他の文字、乘の字及び兼の字の觀察に這入らう。蓋し兩字は共に禾の字を骨子として構成せられて居る興味ある文字であるから。

其の三 乗の字

乘は説文に、禾束也从又持禾とあつて、素と農事に關する文字である。その構造を知るにはその鐘鼎古文を見るが捷徑であるから左に一二の例を擧げる。

秉の古文、一  
虢叔森鐘

秉の古文、二  
乘仲鼎

左に掲げた古文に依ると秉は手を以つて禾を把住するの義で之には東ねる意が存して居る。秉は取るの義にのみ後世では用ひられて居るが古くは此の東の義が存して居た。書經の

小雅にも維周之氏、秉國之均（節南山）などと秉を執の義に用ひて居るが、同時に又彼有遺秉などと秉を東ねたる把の意にも用ひてあるところのあることを見る。

秉の形に就いて云ふ可きは大略以上の如くである。更に音に就いては秉は丙の字と同音で古音は、pang である。支那上代の語で pang 又は tang（方）などの音は大抵多くのものを抱合するの意味合ひが含蓄されて居る。丙を pang と云ふも多くはその火力の盛なるを指して呼べる言葉であると自分がかやうな見解を有して居る。その一々の考證研究は茲に暫く省略する。pang の音、tang の音又は fam の音には、多く物を綜合する義があるところからして或る學者は之を希臘語の *phaino* に關係はないか。Greek では *pan-theo* (all-god 多神教) など云ふ時の Pan の音は偶然にも支那の pang とその意が似寄つて居ると云ふ。こは一説としてその同系説の出たわけであるが、支那語と希臘語との間にはかゝる關係を必然ならしむる如き因縁は毫もない。それ故たゞ pang と *phaino* は偶然の似寄りと云

ふより他に説明の方法はないのである。この事はついでながら附言したのである。

其の四 兼 の 字

兼の字のなり立ちは上述の秉の字を連想すれば直ちにわかるものであつて、唯兼は禾一株を書き兼は二株を書けばそれで此の字をなすのである。左に兼の字の古文並びに篆書を列挙する。即ち、

説文に兼は并也从又从秝兼持二禾、兼持一禾とある。説文の此の解は正しくして、げにその通りの構造である。此れに就ては

兼の古文  
詛楚文

兼の小篆  
説文

が手に物を持つる形であることをさへ注意してお

けば他に云ふべきことはない。

兼の字の形の上の觀察は以上の通りである。さて然らば言葉の方面から見て、兼はなぜ故にケム kem と讀むのであるか。此れにつひては少しく述べなくてはならぬ。

凡そ兼の字ばかりでなく、支那單綴語に在りてその兼併の義又は集合の義を表はす音は K を語頭音として語尾に P 又は M の唇音を以つて終る綴音 (Silben) で表はれて居る。そればかりではないがそれが最も普通である。現に合の字の古音の kad 又合の字の古音 kam の如きその一例である。kad と云ひ kam と云ふ。意義上の程度の差で p と m との區別こそあれ、その實は同語から出て居るものと



して見られる。されば兼の音の如きもその母音の部分は暫くおき、その音の kam は猶 kap (合) と云はんが如きもので、兼も合も音聲學上は同一種類の音と見られる。つまり兼は合併の義である。合併するの義を有する言葉を唯禾の字を通じて現したものに過ぎぬ。禾の字の利用されたる點より見れば農業上から此の兼ねると云ふ言葉が文字上にうつされたものとも見られる。易の繫辭に兼三才などの語があり、兼は普通一般にかね合はす義に用ひられて居るけれどもその原義如何とたづぬる時は實に以上の如きわけでケムの音を有し、かね合はすの義を含んで居るものであると考へられるのである。尙兼の音についてはレム lem の音に就いても觀察せられる餘地があるが、あまりに本題を離れるから茲には暫く省くこととする。

以上土の字、田の字、禾の字にちなんで吾人の最も普通に用ひる文字を觀察した。古代思想の文字上に現れた表影はかくの如くに明瞭に寫されて居るのである。

終りに臨んで村の字、邦の字、都の字に就いて概言せんに、村は俗字で、素とは都を正字とする。都、邦、都三者共に邑をその義符として、何れもたむろし、あつまるの義を共通の意味として居る。邑の本音は *pad* 更に古くは *kap* 又は *tap* 民衆集合地の謂である。民家稠密ならずとするも、兎もかく相あつまりたるの義がある。されば都、邦、都はそれを現すに或は *ton* (屯) とし、或 *tsfang* (丰) とし又は *ts* (者) としてその音符の區別を立て之を義符、邑と組み合せてそれぞれ都、邦、都

の字を造つたものに過ぎぬ。されば都と云ひ、邦と云ひ、都と云ふ、決してもとは左までの差のあつた言葉ではない。少なくとも此れ等の文字の出來た當時に就いてはかやうな觀察が適用されるであらうと思惟せられる。

田舎にちなめる文字上の言葉を字形の方面から觀たる研究の概略は大凡そ以上の如くに觀察せられるのである。

## 文字の研究の結論

### 一 研究上の指針

文字の研究は第一金石の方から形體の元始状態を闡明すべく、又言語の方面から根本的に字音の本質を検討すべくその研究の方面範圍はかなり廣きに亘る。又その研究の方法は龜甲鐘鼎を始め金石の比較考勘より、文獻古書、拓本寫眞の資料を本とし、或はその字音の變化の研究法としては言語の方言現象を調べ上げた上、之を音聲學上の取扱ひ方から科學的に比較検討を試みるやうなことでなくてはならぬ。又その字義の研究法に至つてはその言語上の意義の外に文字そのものの生ひ立を突き止めその字源、要素の正體と、その組合せによる意義の發生、沿革徑路等を究めなくてはならぬのである。

されば文字の研究はその埃及や、アツシリア、バビロンあたりのそれとの比較は暫く別としても、支那自體に於いて時代に沿ふ研究方法に觸れるだけのことはして置かなくては十分と云へぬ。而かもその過去幾千年の歴史沿革に遡りて、その發生當時から各時代に至る變遷の徑路を辿らなくてはならず、

又支那四百餘州の地理的分布と云へる、極めて廣い面積に渡る現象の觀察をも抜きにするわけに行かぬ。従來はひとり文字の研究のみと云はず、すべて東洋文化の學術的研究と云ふものは歴史的にたゞ古い處へ廻ることを主眼となし、大事な現代の現象からは没交渉であつてもよい。何でも古代史に觸れてさへゐるならそれで以つて能事了れりとなしてゐた傾があつた。古きを温ぬるも固より肝腎なことであるに違ひはないが、更に今日は地理的の分布に見る擴がりの特徴、ローカル・カラーを見のがしては全く研究とならぬ。それでは任務の大半を忘却したものと云つてよいのである。これが爲め字音研究の開拓には、努めて支那と安南文字の比較であるとか、支那各地方言の間に見る字音の相違とか、又日鮮の字音や、支那安南、暹羅の間に見る音の比較であるとか云ふものもかなり取り入れて研究して見た。

かう云ふ研究の新開拓に取扱つた支那内外の材料は、あまり豊かであるとは云はぬが、その材料の取扱ひ方については多少苦心をしたつもりである。何れにしても文字のことゝ云ふと、前人未拓の分野であるだけにかなり思ひ切つた方面にまでも觸れて言及しておいた。文字の研究に自分が興味を感じ、之に手を染めてから今日まで三四十年、その間、舊來の材料として知らるゝものは大抵歴史的の方面のもの、古人の遺した昔しものと云ふ風に相場がきめられてゐた。自分は聊かその型を破つて更に出来るだけ地理的の方面に力を伸ばすことに努めた。そこで現代の支那及び支那人の有する生きた

資料の中から古代の研究手掛かりを獲んことに努めた。本書初版刊行後自分が親しく支那大陸に渡り文化各般に就いて悠々自適わが欲するがまゝ南船北馬の行脚を恣にし、その間六十六種の刊行書籍を出しておいたが、この間手懸りとなるヒントを得たことも少なくない。

岡井慎吾博士の高著日本漢字學史中には自分の文字書の著述中絶して支那に遊びたるを文字研究上悲しむべきとなりと特筆せられてゐるのは恐れ入つた。博士は悲しまるゝと云はるゝも、自分としては益々幾萬の文字が實際の風物地理との密接の關係ある事實を發見せしこと多く、心私かに寧ろ聊か快哉を覺えてゐるくらゐのである。塵の字が鹿と土とより成る配合上の意匠の如き、殊にその上代人が鹿を三つも集めて來てその下に土を配せる思ひ付きの如きは、今日北支に、南支に、その群鹿の沙煙を揚げて驅けつて行くときの實景上から見ても本當によく判る。之を親しく目撃してゐられないかたには説文の塵の字の生ひ立の眞の實感は起り得ないことかと思はるゝほどである。

文字の形音義に關する研究が、これまであまりに史的穿鑿の一方にのみ片寄り過ぎ、人の知らぬ古代資料をのみ漁り來たつて異説を立てることが研究の誇りとなりたる如き觀があつた。而かも現代に於いては土俗學や考古學の方から又心理學や言語學の方面からいくらでもこれまでの史的材料以上に有力にして且つ劃期的の手掛りになるものが可なりあるに拘らず之を採入れた新しい研究をせず、又そのいくらでもある點に氣がつかず、或は學者がそれを取扱ふは學問でないものゝ如く見縊つてゐる學徒

さへ少なくない。日本神代史の研究にも臺灣生蕃や南洋馬來を實地に研究すると發見するところの多々あるに拘らず之を敢へてなさざるものが多いのである。誤れるも甚だしい見解であると云はなくてはならぬ。

文字の研究に見る字音の側の研究にしてもそれである。どうしたつて韻鏡だの、反切だの、雙聲疊韻だの、押韻だの云ふものだけでは始まらぬ。どう云つたつて本當に語つてゐる現代語の生きた音現象をつかまへて來て論ずるに非ざればピンと來ない。血あり、熱のある研究になりつこない。血も熱もない枯死したやうなペーパーの上の研究ばかりをいくら重ねて見てもこれで字音研究になるとは考へられない。古典の範圍内で死語の研究をするが目的であるならともかくも、今後の東亞文化の生きた研究に寄與せんとする志のあるものは大いに反省を要するところであると信ずる。從來支那から來た學問がやゝもすれば現代文化の生きた世界に對しその指導位置を占め得べき筈なるに、事實さう出來ない悩みはそこらに主因が伏在してゐると云へる。これ支那研究に没頭する若き學徒の特に反省し念頭において置かなくてはならぬ點であると考へる。

## 二 文字研究の幽玄味

支那文字の研究については、尙支那趣味の話（大阪屋號）や翰墨談（富士書房）などに公にしたも

のが断片的ではあるが、何れも自分の新しい試みとして出してある。從來の説文や金石にのみ囚はれた見方でなく文字そのものの上から又文化史に通ずる立場から之を取扱つて見た。尙文字の形の方面の研究については數限りなく自分の根氣の續く範圍に於いて公にして見たいと考へてゐる材料を持ち合せてゐる。從來の土俗民情趣味篇の幾倍のものが用意されてゐるが、壽齡と大方の要求だにあらば公刊して見たい考でゐる。

字音の研究は本書には主としてKTPの三音を中心として方言の比較による研究を言語學上の研究論文の形で紹介しておいた。こは一見小範圍の字音現象のやうに見えるが事實その關聯する處は極めてひろく、且つ將來漢字の音研究はどうしたつて言語學上の立脚地から出發しなくては物にならぬことを信じてゐる所から之を公表したわけである。一々精細なる比較考證を述べたとてこは専門家以外には無用の觀なきにあらざるも、若し之によつて後の學徒の多少とも手掛りになるとがあるならば望外の幸である。

支那は廣東、福建、寧波、上海から南京、北平へと隨處の字音を確かめた上、然る後之が時代別の古音とそれとを比較しその沿革を査定する方法をとると、こは今日達し得る最も適切な方法であると信ずるが、之によつて始めて浙江以南、福建、廣東、安南あたりの音にして秦漢三國六朝隋唐の古代音に當たるものあるとも立證せらるゝわけである。單なる歴史的時代の古音をたしかめて見たとこ